

常磐の真  
操も怪し  
いもの

過渡時代

三元

清盛常磐  
を納る

若し常磐が真に源氏の將來を思ふならば母を見殺しにしても三人の子を庇はなけれ  
ばならないのである。然るに常磐の陳情は子等と共に刑に就くから、母の命を助けて呉  
れといふのであつた。これによつて見ても、常磐の貞操は頗る怪しいのである。  
處が、清盛は常磐の容色にムラ／＼と野心を起した。斯んな美人をムザムザ獄卒の  
手にかけるでもないと思つたのか三人の子と共に其罪を許さうといふことになつた。  
一門は事の甚だ非なるを説いて清盛を諫めたけれども、清盛は頑として應じなかつ  
た。

已に兄の頼朝を赦した。今其長を助けて幼を殺すは甚だ謂はれなきことである。と、  
如何にも尤もらしい理屈を捏ねてトウトウ三人の子を許し、常磐を引き入れて慰みも  
のにしてしまつた。

異常の事  
に非ず

後世常磐の貞操を説くものは、常磐が現在一門一族の仇敵たる清盛に肌身を許して  
清盛との間に一人の女までなした其事の甚だ異常なるを思ふのである。然しながらこ  
れが抑も間違のもとで、徳川時代の武家の女房が敵の辱めをうけない前に自殺して果

男の脳力  
に對する  
女の防衛

てるとか、又懐劍といふものを用意して居て男に抵抗するとか、手込めにあへば舌を  
かみ切つて死んで仕舞ふとかいふのを標準として常磐時代の女を想像するからいけな  
いのである。當時にあつては女が、現在骨肉の仇たる男に貞操を委すといふ事も決し  
て異常な例ではなかつたのである。

平時忠の  
事

平時忠は平清盛の妻の兄であつて高倉、安徳の二朝に仕へ、荐りに顯要に昇つた。  
清盛を助けて勢焔一代を傾け、叙位除目多くは此人の意に出でたといふ。時人は當來  
の大臣を以て目し、平關白を以て呼んだといふのであるから、其平家にあつて重きを  
なして居たことは推して知るべきである。

壇の浦の戦ひには、内侍所を護衛し、平家滅亡の後、神鏡を護衛して京都に還つ  
た。

時忠の  
女

此人が義經の歡心を買つて、其罪を赦されようといふので、子の時實と相談の上で、  
一人の祕藏女を義經に納れた。之は時實の策略で、時忠は流石に親として掌中の玉と  
愛でいつくしむだ、最愛の女を一門一族の仇敵たる義經の玩弄物として、提供するに忍

仇敵に操を賣る

三元



義経時忠の女を納

びなかつたものと見えて、初めの内は大に反對して居たが、事情止むを得ざるに及んで其女を義経に納れた。義経大に悦んだとあるから素晴らしい美人であつたに相違ない。花も羞らうやうな深閨の佳人を思ふがまゝにした義経の得意は思ふべきである。

時忠は泣いて時實に従つたとあるから女も嬉しがつて行つた譯ではなかつたに相違ない。が、兎に角、一門の亡魂が西海の波に漂うて、彼奴めがと睨んだ其男の慰みもになつてヂツとして居たのである。けれども此時代にはそれも大した異常な例ではなかつたのである。

前 靱繪御

靱繪(巴)が夫の仇たる頼朝に捕へられて和田義盛の妻となつたといふ傳説もその一例として見るべきものである。

靱繪は中原兼遠の女であつて、今井兼平の妹である。美にして勇とあるから縹緞の方も萬更ではなかつたものと見える。木曾義仲の妾で北國の戦には常に一部の兵に將として驍名を轟かしたとある。

義仲の敗走

義仲が鎌倉方に敗られて、十三騎と共に落ち延びんとする時、靱繪も其中にあつて

畠山重忠と靱繪

屢々追尾する敵兵の膽を奪つて披靡せしめた。例の畠山重忠が『小癩な女!』といふので靱繪の鎧の袖を掴むで馬から引摺り落さうとする。靱繪がウムと應へて馬に一鞭あてる。

四宮河原まで

鎧の袖はメリメリと裂けて重忠の掌中に残つた。大そうな力であつたものと見える。義仲が四宮河原まで落ち延びた時には十三騎の勇士も追々討死して、今は唯七人を残すのみであつた。而も靱繪はなほ其中に無事であつた。

内田家吉打たる

處へ遠江の住人、内田家吉といふものが自ら六十人力の剛の者と名乗りをあげて打つてかゝる。靱繪も馬をかへして接戦し、果ては馬上にムンヅと引組むだ。内田家吉といふ男、餘程もの好きな奴であつたと見える。

(八三) 靱繪と板額



義仲落涙

處が鞆繪の剛勇は難なく家吉を組み敷いてしまつた。鞆繪が其首を斬つて義仲に見せると、流石の義仲も物のあはれを感じてかハラハラと落涙に及んだ。

義仲鞆繪を論ず

『惜む可きの勇士、今一女子の爲に獲らる。我もまた何者の雑兵に討たれんも知る可からず。他日人まさにいはん。義仲死に臨むもなほ女子を携ふと、適適名を累はさんのみ。汝これより去つて其身を完うせよ』

耶繪預け

と、懇に諭して去らせようとしたが鞆繪は唯嗚咽するのみ、容易にかへらうとはしなかつた。けれども義仲のいふ所があまりに切なので、鞆繪も泣く泣く別れてひとり國へ歸つた。其時に年がやつと二十八とある。

和義盛と鞆繪

『源平盛衰記』には其後鞆繪が和田義盛に嫁したといふことが書いてある。鞆繪は義仲に別れて後捕へられて鎌倉に護送せられた。頼朝は稀代の女傑と聞いて之れを森五郎に預けたが、衆議は概む死刑と決した。處が茲にひとり奇特な志の人があらはれた。それは外でもない和田義盛であつた。

和義盛と鞆繪

義盛は鞆繪の驍名を聞いて其薄命を悲しんだ。かゝる勇婦をムザムザ殺すのは惜しいものであるといふので、頼朝に乞うて妻として貰ひ受けた。かくて鞆繪の腹に生れたのが、朝比奈三郎義秀である。和田義盛が北條氏と戦つて、敗死するに及び、越中のがれて石里氏に就いて尼となり年九十一にして死んだといふのが傳説の梗概である。

俗説か實

鞆繪が和田義盛に嫁したといふのは、全く俗説であるというて斥ける歴史家もあるが、要するに此傳説によつて見ても、敵方に其操を任せるといふことは當時の女として大した問題ではなかつたのである。

板額

鞆繪に就いて連想せられるのが板額である。鞆繪、板額と並び稱せられた當時の勇婦が揃ひも揃つて敵方の妻となつたのは一寸面白い現象である。板額は城九郎資國の女であつて、小太郎資盛の姨である。建仁元年に源頼家が資盛の叔父、長茂を執へて之を誅戮した。資盛は深く之を銜み、復讐の志を決して兵を越後にあげた。頼家は佐々木盛綱を將として之を討たしめた。

鞆繪と板額



越後鳥坂の戦

過渡時代

三三

越後鳥坂の戦は最も激烈を極めた、資盛の士卒は壘により殊死して、盛綱の軍を瞰射した。矢は雨の如く盛綱の先鋒を射て、大に其氣勢を挫いた。

此時、板額は束髪して身を童形にやつし腹巻をつけ、櫓に上つて瞰射した。善く射て當らざるなしといふのであるから鎌倉の兵は、此一婦人の爲に大分惱まされたものと見える。

信濃の人、藤原清親といふのが遙に之を望見して、『憎き小童が舉動かな』と、ひそかに城後の山にめぐつて、狙ひうちに一矢を酬いた。矢はあやまたず板額の兩股を射貫いた。板額は其まゝ櫓の上にもどると僵れた。

資盛の兵は潰走した。

板額は捕虜となつた。盛綱は鎌倉に凱旋した。頼家は板額の勇名を聞いて御座所間近に召し寄せた。板額は少しもおくする色なく縛られたまゝ、ツカツカと進んで簾の前に座した。

頼家は一見して其雄偉の姿に驚いた。容貌醜とあるから鞞繪とは違つて頗る見つ

藤原清親  
板額を射る

板額捕へ  
らる

淺利與一  
板額を妻  
とす

ともない方であつたに相違ない。處が、甲斐國の住人、淺利與一義遠といふものが進み出でて、妻に申し受け度いと願ひ出た。頼家は、

『これ無雙の朝敵なり。汝これを請ふは何ぞや』

と訝る。與一は更に請うた。

『勇力の男子を生みて、朝廷を守り、武家を扶けんと欲するのみ』

と。遂に許しを得て甲州につれかへつた、板額は一門一族の仇敵に其操を許したのである。

### (八四) 風の儘に靡いた女

されば常磐が仇敵に其操を許して一女を生むだといふことは、當時にあつて大した問題ではなかつたのである。それに義朝は常磐を捨てたのである。若し義朝が眞に常磐に心を置いたならば常磐を護るために鎌田政家とまでは行かずとも心きいた郎等の一

義朝と常  
磐

風の儘に靡いた女

三五



捨てられ  
たる常磐

人や二人はつけて落してもよかつたのである。然るに常磐は三人の子をかへて一人の供もなく伏見の里の雪に踏み迷うたのである。常磐は捨てられたに相違ない。思ふに義朝は地下にあつて其生前捨て、顧みなかつた牛若が、意外の人物になつたことに一驚を喫したであらう。

鬼の様な  
義朝

義朝といふ人は保元の亂には父爲義を斬り、弟頼賢、頼仲、爲宗、爲成、爲仲、を捕へて大根を斬るやうに首をはねた人である。更に朝廷の命ではあつたけれども、四人の幼弟を殺して平家貞に眉を擧めさせた人である。乙若が十三、龜若が十一、鶴若が九つ、天王が七つであつた。保元の亂には美濃の青墓で其子の朝長を斬殺した。朝長は父、義朝と共に京都を落ち延びる途中横川の僧兵と戦つて股に矢傷を受けた。青墓に着くと直ぐ義平と一處に甲斐信濃に赴いて味方を募れといふ命令をうけたが、暗さは暗し雪は降る。股の傷が痛むで堪へられないので、一人途中から引かへすと義朝大に怒つた。爾んな意氣地のない奴は死んで仕舞へといふので可愛そうに其夜、創になやむ朝長の首を刎ねてしまつた。

朝長を斬  
る大根の  
如し

常磐と牛  
若丸

其義朝である。美人ではあつたが、根が後宮の女房、妾としての常磐と三人の子を捨てる位は何でもなかつたらうと思はれる。

既に捨てられた常磐が清盛の妾になつたからというて別に大したことでもない。常磐は今若、乙若を僧とし、牛若を鞍馬山の僧覺日に付した。別に深い考へがあつたのではない。母親としては只其子の安全を祈るのみであつた。

處が、常磐は一女をあげてから容色稍々衰へて清盛に捨てられた。それを大藏卿藤原長成が拾つて妾とした。これによつて見ると常磐といふ女は、すべての點が桂公の嬖妾お鯉の方によく似た女であつたものと見える。

常磐大藏  
卿に嫁す

常磐の話が出た次手に貞操問題をもう少し研究して見よう。

私は前に袈裟の話をして、此時代にあつては姦通といふことすら大した問題ではなかつた。袈裟は盛遠の手にかゝる前に其操を汚された形跡があるといふことを述べた。話は少し古いが、八幡太郎義家が血氣盛りの頃、荒法師の妻を盗んだなどが其一例である。趨捷絶倫の義家は法師の家の廣い堀ををどり越えて、其妻と密會して居たが

荒法師  
の妻



義家の姦通

法師は之を知つて大に怒り、一日義家の飛び越えて来る所へ大きな碁盤を立て、蹶いて倒れる處を斬つて捨てようとする物かげに待ち構へて居ると義家は飛び越えさま、小太刀をスラリと抜いて其碁盤の角を斬り離して仕舞つたので、流石の法師も驚いて逃げてしまつたとある。姦通といつても力づくで、弱い者の正義は成り立なかつたのである。

藤原成範の妻

中納言、藤原成範の妻は清盛の息女であつたが、妖艶絶妙、見る人の心を寸断するやうな美人であつた。(第百〇二項参照)

襖に『伊勢物語』の畫

藤原成範といふ人は、小納言通憲の子であつて、仁安中正三位に進み左兵衛督となり、承安四年参議に任じ、安元二年權中納言に進み民部卿をかね、尋いで正二位に叙せられた。櫻の花が大好きで吉野山の櫻を移して樋口町の自邸に環植し、神に祈つて花の壽命を三七日延したといふ風流兒であつた。其また妻なる人が襖に『伊勢物語』を繪で書いて喜んだといふ程、コクニチツシユな女であつたが、華山院の左大臣藤原兼雅といふ人がはげしく此女に戀慕して、權勢に任せてトウトウ中納言の手から横取

後世の爲に女房を

りをしてしまつた。中納言は後世の爲だなどと表面は頗る平氣を装うて居たが、内心の苦痛は餘程激しかつたものと見え、失戀の爲遂に廢人の如くになつてしまつたとある。

(八五) 小督局

齒がゆい女

小督なども後世の烈婦とか、貞女とかいふものに比べて考へると随分齒がゆい女である。

小督局

小督は前項に述べた中納言成範の女である。宮中一の美人にして琴の上手と聞えた『平家物語』によると高倉天皇が葵の前を失うて、御嘆きに暮させ給ふを慰め參らせむとして、中宮の方からすゝめ奉た女であると書いてある。その眞偽は別として、高倉天皇が小督を寵し給ふことは非常なもので、それが爲に建禮門院の御寵愛がやゝ衰へたとある。

處が、此小督の局と申すが、未だ櫻町中納言の令嬢であつた頃、冷泉の少將藤原隆



隆房の失戀

房と私通した。隆房は初め『歌を詠み、文を盡し、戀ひかなしむ』だけれども更に靡く氣色もなかつたのを、一生懸命で口説き落したとある。随分噂の立つた戀であつたらうに、それを平氣で主上にすゝめ奉た所を見ると、此頃の社會には今日のやうに『疵もの』などといふ觀念は少しもなかつたものと見える。

隆房戀慕の情に堪へず

隆房は戀慕の情に堪へかねて局のほとり、御簾のあたりを、あなたへこなたへとたたずみ歩いたけれども『小督はつでの情をだに懸けられ』なかつた。其處で少將は、

思ひかねこゝろは空に陸奥の

千賀のしほがま近きかひなし  
と、一首の歌を詠むで御簾の中へ投げ込むけれども、小督は君の御ためうしろめたしとあつて手にも取らず、上童にとらせて坪の内へ投げ出した。

玉章を今は手にだに取らじとや

隆房の憂悶病

さこそこゝろに思ひすつとも  
と、恨みなげいて、隆房は憂悶病をなすにさへ至つた。處が此隆房といふのは清盛の

清盛赫怒

女婿であつた。建禮門院の寵幸の衰へたこと、いひ、又、隆房の憂鬱病といひ、これ皆小督がなせる業であるといふので、清盛は早々小督を召し出して失ふべしと大にきまいた。

小督失踪

それを傳へ聞いた小督は驚いて我身の事は兎も角も、君の御爲心苦しき事なりといふので、ある夕ぐれ内裏をぬけ出で、嵯峨野の民家に身を潜めた。其處で今度は勿體なくも一天萬乗の君が失戀といふ病になやみ給ふことゝなつた。晝は夜の殿に入らせ給ひて御涙にのみ咽び、夜は南殿に出御あつて月の光に泣きあかし給ふとあるから、却々御執心であつたものと見える。而も清盛の權威を憚つて誰一人、主上を慰め奉るものも無かつたのである。

仲國嵯峨野に至る

治承三年八月十日の夜といふに北面の士、彈正少弼仲國が君の仰せを被つて明月に鞭を上げ、嵯峨野のほとり片しをり戸したる家といふをたよりに小督を尋ねあてた。日頃御前にて琴のしらべのあつた時、笛の役目を仰付かつたのが此仲國であつた。彼は『此月のあかさに、君の御事思ひ出で參らせて、琴彈き給はぬことはよもあらじ』と



いふので、龜山のあたり近く、幽かなるつま音をたよりに小督の在處を尋ねあてたのである。

小督再び内裏に入る

小督が仲國に見出されたのは思ひ立つて明日は大原の奥へといふ其名残の宵であつた。仲國は供に具したる馬部吉上などを以て固く小督の家を守らせ、翌日、綸旨を承り小督を牛車に載せて再び内裏に迎へ入れた。

坊門院生

主上の御病は忽にして平癒した。主上は清盛に覺られぬやう、小督を内裏のいと幽かなる所に忍ばせて夜な／＼御側近く召された。小督は間もなく一人の姫宮を生み奉つた。之が坊門院である。

清盛と小督

清盛は烈火の如く憤つた。「小督が失せたりといふは、跡かたもなき虚言なりけるか」といふので、自ら引き出して尼にしてしまつた。長門本の『平家』には清盛、小督を引出して見ると想像以上の美人であつたので、耳語しておのれの意に従へと迫つたけれども小督が聞かなかつたので耳と鼻をきつて尼としたとある。が之は嘘である。事實なれば小督は恐らく清盛に靡いたであらう。小督此時漸く二十三歳とある。

女房氣質

主上の寵幸を受けては、隆房を捨つること弊履の如く、清盛の怒りを聞いては嗟嘆野にかくれ、仲國に見出されては又内裏に參るといふのが此頃の女房氣質であつた。

(八六) 建禮門院

政治家として清盛

平清盛は實力を掌握して、實力を保持することを知らなかつた。其僧兵の暴威を挫いて、社寺寮に國税を課し、福原に都を建て、瀬戸内海の制海權を收め、支那との國交を修めようとした事などは流石に凡庸政治家の手腕ではなかつたが藤原氏に倣つて、外戚の權威に眷戀したなどは實に馬鹿々々しいことであつた。彼は土地に關するすべての權利を自家の掌中に收めることを扱ておいて、先づ其女を中宮に立ること考へたのである。

建禮門院

清盛の女、徳子は、承安元年從三位に叙し、女御となつて入内し、翌年高倉天皇の中宮に立つた。



徳子宮の御懐胎

安産の祈禱

俊寛の痛恨

清盛は其外戚たらんことを欲するの餘り、安藝の嚴島に祈願を凝して、徳子が皇子を生まんことを望んだ。故人橋牛も清盛美男子論を立て、世人を驚かしたが、中宮徳子の艶色はまた格別であつたものと見えて、帝の御寵愛は非常なものであつた。

徳子が女御となつて入内したのが十五歳、帝はやつと十一歳、雛のやうな御仲であつたが、治承二年には中宮早くも御懐胎の御身となつた。此時帝御年十八、中宮御年二十二。清盛は雀躍して喜び、后を其子重盛の邸に迎へ奉つた。

帝使を四十一社、七十四寺に遣はし、僧及び陰陽博士を禁中に召し入れて安産を禱り、輕囚の流入七十二人の罪を許したとある。

治承元年に鬼界ヶ島に流された藤原成繼、平康頼が召しかへされて、僧俊寛がひとり、悲憤痛恨の涙を呑んだのも此時の事である。

四十一社、七十四寺の神佛を驚かした清盛の祈禱も其効なく中宮徳子の御産は頗る重かつた。京都には誰いふとなくこれは藤原成親、西光法師、僧俊寛の祟りであるといふ噂がバツとひろがつた。

泰幣使路に接す

安徳天皇生まる

源三位頼政義を唱ふ

清盛の憂慮はまさに其頂點に達した。石清水、平野、日吉に遣はさる、泰幣使が路に接し、冠蓋相望むたとあるから、其狼狽の狀推して察すべしである。後白河法皇も産室に臨御あつて千手經を讀誦あらせられるといふ騒ぎ、何れも清盛への御心づかひとは知られた。

徳子は漸くにして皇子を産み奉つた。清盛は憂悶のどん底から歡喜の絶頂に持ち運ばれた。言仁王といひ、後に安徳天皇と申し奉つたのが此皇子である。

朝廷の故事として、皇子が生れた時には屋上に昇つて甃を投げる。男は南、女は北といふ例であつたのを此時誤つて甃を北に投じた。人皆ひそかに眉を擡めて不祥の前兆とした。

治承四年五月には源三位頼政が、以仁王を奉じて義を唱へ、宇治川に戦ひ一敗地にまみれて、平等院の露と消えたけれども、驕暴飽く所なき平家の頽勢は此時に至つてその前兆を發した。

勝利の悲哀は翌年福原の遷都となつて現はれた。支那貿易の積極策として建設せ



頼朝の擧兵

義仲の擧兵

清盛の悶死

られた福原は、平家が叡山及奈良の僧兵を避くるの都となつた。

養和元年には高倉天皇が崩じ、安徳天皇が三歳にして御即位あらせられた。

之より先、義朝の第三子源頼朝は以仁王の令旨を奉じて兵を伊豆に起し、石橋山の

一戦、大庭が兵に粉碎せられたりと雖、脱して安房に走り上總に入り忽ちにして關

八州の野を風靡した。

養和元年には爲義の孫、木曾義仲が同じく以仁王の令旨を得て信濃に起り、越後を

征服して遙に頼朝と相呼應した。

維盛の軍が富士川の夜襲に驚き、兵器輜重を捨て、逃げ還つた後京都は沸くが如き

騒ぎとなつた。恐怖は忽ちにして歡樂の都をとらへた。花のやうなる平家の貴夫人、

令嬢は嬌笑のほかに戦慄といふことを覺えた。

清盛は七日七夜、宛轉煩躁して死んだ。遺命して、

『我が爲に堂塔を造ること勿れ、佛に供養すること勿れ、唯頼朝の首を斬りて之を墓前にかけてよ』

というたけれども、時すでに遅かつた。壽永二年の七月には、猿のやうに輕捷な北國の兵か、早くも宇治川のはとりに其姿を現はした。

(八七) 音楽と火焰の一夜

北國の兵  
京都に迫る

壽永二年七月、趨捷勇敢なる北國の兵は潮の如く寄せて叡山に屯し、京都は忽ちにして其占領する所となつた。

宇治に向つた宗盛、資盛、勢多に向つた知盛、重衡が戦はずして引返した時一門の

恐怖は悲鳴となり號泣となつて取り亂した貴夫人、令嬢はさながら狂風に捲かれた落

花の如く、しどろになつて都を西に落ちはじめた。

後白河法皇は最も御得意であつた。夜潜かに宮をぬけ出でて、近侍數人と延暦寺に

幸せられた。

宗盛は惶惑した。此上は天皇を奉じて西に走るに如かずと安徳天皇を擁し奉り建禮

貴夫人令嬢の悲鳴



福原の一夜

故宮殿を焼く

北國の兵京美人を掠む

門院(平徳子)と共に閩族を従へて先づ福原に落ちた。

哀しき音楽は夜を徹して清盛の墓前に吹奏せられた。新しき都にうち建てられた、新しき大名の邸宅は炎々たる猛火の裡に包まれた。其火焰こそ正に清盛の墓前にかゝげられた最後の聖燭であつた。恐怖と悲哀にとり亂した一門の姫達は、誦經の座に伏し沈むで一夜を泣きあかした。

やゝ距てた故宮殿の火が、其美しい女の青ざめた顔をもの凄くいろどつた。斯くの如くにして、火と音楽の一夜はあけた。

一門は海に泛んで太宰府に走つた。

此間に京都では、一刻も早く天皇を立つ可しといふ議が起つた。後白河法皇は皇弟四宮を擁立し奉つた。之が後鳥羽天皇である。後鳥羽天皇擁立のことに關して、法皇と義仲との間に隙を生じた。

無節制なる北國の雑兵どもは京都の滞陣を好き機會として、しきりに財寶美人を掠めた。

頼朝義仲を討つ

一の谷陥る

壇の浦の合戦

後白河法皇は遂に義仲を捨て、鎌倉なる頼朝に宣旨を下すの止むを得ざるに至つた。壽永三年正月、頼朝は二弟範頼、義經に六萬の兵を附し、兩道より並び進んで義仲を討たしめる。義仲は之を宇治、勢多に拒いで敗れ、正月二十日を以て粟津の水田に戦死した。

此間に平家は太宰府を中心として、九州をしたがへ、四國の大半を占領し、山陽南海に其勢力を恢復し、天皇を奉じて攝津の一の谷の要害に據つた。

二月には範頼、義經が共に進んで一の谷に迫り、七日城塞を屠つて宗盛を屋島に走らせた。

文治元年三月二十四日はいよく源平戦争の大詰となつた。

範頼は九州に屯して宗盛の退路を絶ち義經は戦艦七百餘艘を以て壇の浦にせまつた。相模の人、三浦義澄が嚮導とある。宗盛は五百餘艘を以て防ぎ、各三町を隔て、相對した。

宗盛はひそかに天皇を戦艦に徙し奉り、士卒を唐船に忍ばせ、源氏が唐船にせまる



田口成良  
内應

諸將戦死

田口成良  
の返撃

のを待つて前後挾撃せんとの計を立てた。阿波の人、田口成良なるものが、源氏に内應して其計を義經に密告したので、義經は急に迫つて戦艦の攻撃を開始した。宗盛は天皇を奉じて九州に走る積りであつたが、範頼既に九州を占領せりと聞いて茲に最後の決戦を覚悟した。平行盛、有盛等何れも花々しい働きを見せて、戦死を遂げた。能登守、平教經の博戦は頑強なる源兵の膽を奪ひ、義經をして舌を捲いて驚嘆せしめた。

然しながら大勢は之を如何ともする事が出来なかつた。田口成良が兵船三百餘艘を帥ゐて味方の船を返撃するに至り、西軍は忽ちにして崩れ立つた。源氏の兵は之に力を得て平家の船に漕ぎ寄せ、漕ぎ寄せ亂れ入つて散々に斬りまくる。水手かんとり、櫓を捨て梶を擲ち、船を直すまもなく射伏せられ、斬り伏せられて船底に倒れ水中に沈む。

女院、二位殿などの乗り給へる船は一門の貴夫人、令嬢をあつめて戦線の外にあつたが、源氏の船から射かける矢は雨の如くにそゝいで、船體はさながら蝟のやうであつた。

貴夫人、  
令嬢を載  
せたる船

つた。  
花のやうなる女房達は聲をあげて遁げまどひ、ふし轉んで齒の根も合はず打ち顛へた。其處へ、大童になつて血刀のまゝ乗り移つて來た一個の偉丈夫があつた。

(八八) 壇の浦の悲劇

偉丈夫其人の名は中納言平知盛であつた。

女房達はオロオロ聲で問うた。『これは如何になり侍りぬるぞ』

めづらし  
き東男ど

『今は兎も角も、申すに詞足らず、かねて思ひ設けしことなり。めづらしき東男どもをこそ御覽づらめ。』

といひながら、カラカラと打ち笑つて、手づから船の掃除に取りかゝつた。知盛は女房達の取りみだした見苦しい物を片端から海に投げ入れ、『こゝを拭へ、かしこを拂へ』と差圖して、最後の用意を急ぐ。

知盛自若



御戯れも  
時にこそ

女房達は中納言の言を聞いていづれもワツと泣き伏した。

『御戯れも時にこそよれ、さほどの事になり侍りぬるに、さりとは情なき御言葉かな』  
と身を悶えて伏し沈む。二位殿も今は限りと覺悟し、練色の二衣引纏ひ、白袴のそば  
高く挟みて、安徳天皇を抱き奉り帯にてわが身に結へまゐらせ、寶劍を腰にさし、神  
璽を脇にかゝへて艇に臨み給ふ。

二位尼

天皇此時八歳、御年の程よりはませ整はせ給ひ、御かたちあでに美しく御髪黒くふ  
さやかに御背に懸かり給へりとある。二位尼に抱かれて、御心惑ひたる御氣色にて、  
『こは何處へ行く可きぞ』

と仰せある。尼涙をのみて、『兵どもが御船に矢を進らせ候へば別の御船に移し參らせ  
候』といひながら、

今ぞしる御裳濯河の流には

涙のした  
りにも都あ

浪のしたにもみやこありとは

と詠みて海中に身を躍らせ給ふ。

八條殿  
の最後

八條殿も同じく續いて入り給へば、建禮門院をはじめ奉り、帝の御乳母、帥典侍、  
大納言典侍以下、花のやうなる女房たち何れも船の舳艫にふしまろび、聲をあげて泣  
き叫ぶ。それが鯨波の聲にも似ていたましかつたとある。

浮きもや上らせ給ふかと皆々舳によりて暫くは波のおもてを眺めてあつたが、二  
位殿も、八條殿も深く沈むで、見えなかつた。

建禮門院  
御覺悟

建禮門院は、後れ奉らじと、御焼石、硯の箱などを左右の御袂につめ、身を重くし  
て水中に投げ給ふ。

此時源氏の兵は御座所をもわきまへず既に犇々と攻め寄せて居た。かくと見たる源  
氏の士渡邊五島允肥といふもの、急ぎ海に飛び入つて女院を抱き上げ奉れば肥が郎等  
熊手を以て引き寄せ御船に引き入れ奉る。

肥女院を  
抱き上げ

大納言典侍は船の上から金切聲を張り上げた。

『源氏の兵ども狼藉すな。そは勿體なくも女院にてましますぞ』  
と。時は彌生の末なれば女院には藤重の十二單の御衣を召されたるが、翡翠の御髪



帥典侍  
に悶

よりははじめ、みな鹽たれておはしますとある。痛ましくまた勿體なき次第であつた。帥典侍もまた續いて海に飛び込んだが衣と袴の裾とを舷に射立てられて沈み得ず紫紅縹亂として悶えたるを眠の父源次兵衛番といふものが取り上げ奉つたとある。

源氏の兵  
すな

親船にはまた一としきり女房達の悲鳴が高まつた。

處へ伊勢三郎義盛が義經の命を傳へ小船に乗つて觸れ廻る。『海には大事の人人入らせ給ひたるを、取り上げ參らせたらんもの共、狼籍仕るな』と茲に於いてか建禮門院をはじめ奉り、多くの女房達は皆判官の船に送られる。

先帝の御船へ亂入した源氏の兵ども内侍所と知らずして大なる唐櫃のあるに近寄つて錠をねじ開けんとするを大納言平時忠大喝して、

『内侍の御箱なり。狼籍なり』

と叫べば、義經之を聞いて、味方の侵襲を制した。

二位尼が小脇にかゝへて海に沈んだ神璽は幸ひにして浮かび上つたが、神劍は遂にかへらなかつた。神璽は海に浮かんで居たのを片岡太郎經春が取り上げ奉つたのであ

三種の神  
器の行衛

宗盛等捕  
へらる

る。

宗盛、及び其子清宗、能宗は捕虜となり能登守教經は海に投げ、知盛は教盛と自殺し、餘衆殺溺して一門皆西海の波に沈んだ。

戦ひは全くやむだ。春の日は暮れて波は静かに夜は更けた。義經の船に拘禁せられた平家の女房達は、朝來の窘迫と凌辱とに心身殆ど絶えなんとして伏し轉んだ。

窘迫と凌  
辱

(八九) 木曾義仲の戀

建禮門院は京都に奉還されて後、吉田の僧房に隠れ、薙髮して眞如覺と名乗り給ふ。また徙つて華山天皇の野河の山莊に居られたが、一族滅するの後、輦下に近く、源氏の時めくを見るに忍びずとして、大原寂光院の傍にさゝやかなる庵を結んであじけなき日を送り給ふ。

大原の寂  
光院

薨破れては月常住の灯をかゝげ、戸ぼそ落ちては霧不斷の香を焚とでもいほうか

木曾義仲の戀



御年漸く三十

見るからにもの寂しき草蘆竹牀、僅に風日を蔽ふといふやうな處に、御年漸く三十といふ建禮門院が、昨日にかはる墨染の衣、残んの色香をあざやかなる眉の跡にとどめて、行ひすまされたといふのであるから、これはさながらに一篇の詩である。

阿波内侍

帥典侍、阿波内侍など、何れも花はづかしき姿を墨染の衣にやつして、薪水に供したとある。興亡盛衰は浮世の常とはいへながら、見果てぬ夢のいかに悲しくもまた寂しきことであつたらうか。

大原御幸

後白河法皇は一度往いて院の心を慰めんと心にかけて給へども、頼朝の思はくを憚つて果し給はず。文治二年補陀洛寺の幸に託して大原の庵を訪ねたのが謠曲や『物語』で人のよく誦誦して居る『大原御幸』 閑寂夜の如き大原の奥に白髻の法皇と艶麗なる院とが、互に往事を語つて衣の袖を絞つた。其時、院は西海の戦のさまを語りいで、具に軍中の窘厄汚辱を説いて無念の涙に呉れ給ふたとあるから、建禮門院は未だ悟りすまして居られたといふ譯ではない。源氏の勢力を憚つて、熱い血汐を胸に押かくして居られたのである。建保元年の十二月、御年五十七歳にして薨去となつた。

取亂した平家の貴夫人令嬢

壇の浦の海戦に就いて考へると、自殺の覺悟のあつたのは先づ二位尼と八條殿とで、其餘の女房達は全く取亂してしまつたものらしい。それも其筈、此頃の女といふものは、未だ、あまり戦になれて居なかつたのである。武士の妻たるものは敵の汚辱をうける前に、自殺して果てなければならぬといふやうな教育もなし、又修養もなかつたのである。

小宰相

斯くいへば或る人は直に小宰相の例を引いて、平家の一門にも恁んな烈婦があつたではないかといふであらう。小宰相は刑部卿、藤原憲實の女であつて上西門院の女房として美人の聞えが高かつた。越前守平通盛が此女に烈しく戀慕して、我戀は細谷川のまるきばし

ふみかへされて濡る袖かな

といふ歌を詠むだのを院が聞召していとあはれの事に思召し、改めて小宰相を賜つた。壽永の戦に通盛が攝津湊川に於いて花々しい戦死を遂げたのを瀧口時員の知らせによつて傳へ聞いた小宰相は悲歎のあまり中夜ひそかに海に投じて果てたといふので

平通盛の戀



横笛と  
時頼

あるが、之も後世の婦人道德を以て律するのは大間違ひである。建禮門院の雑仕、横笛が齋藤時頼と通じ、其戀のかなはぬのを歎いて出家したのと同じく、單純な失戀の結果と見るのが至當であらう。殊に小宰相は此時妊娠中であつたといふから、そんなことが或は自殺の動機ではなかつたらうかとも思はれる。

藤原基房  
の事

關白、藤原基房は關白忠道の子である。安元元年に兄の基實が死する時、其子の基通が未だ幼弱であるからといふので弟の基房が攝政氏長者となり、攝録の莊園は盡く之を承く可しと遺言した。

基房清盛  
と合はず

處が基實の妻は清盛の女であつたので基實の死後、清盛が其莊園相續の事に干渉して、大半を孫の基通母子にとらせ基房には僅に其一部分を領せしむる事とした。茲に於いてか基房は勢ひ清盛に銜まざるを得なかつた。二人の間は圓滑を缺いた。承安二年基房は太政大臣を経て關白に任せられたが、清盛と合すして、太宰權帥に左遷せられた。翌年更に其怒りに觸れて備前に配流せられた。處が翌年其罪を赦されて京都に召しかへされ、暫く忍んで時機の到るを待つて居る。斯くて治承四年となり、

松殿の女

源三位頼政の擧兵となり、源頼朝の旗上げとなり。松殿基房は再び花咲く春にあうたのであつた。

處が源義仲が京都に入つて驕暴専恣を極むるに至り、彼は其の強壓にあうて掌中の玉と愛ではごくむだ一人の女を奪はるゝの止むを得ざるに至つたのである。北國の征服者は其猿のやうな手を伸べて、織麗風にも得たへぬ上臍を奪い去つたのである。

京都第一  
の美人

松殿の女といへば、當時都に名ある美人であつた。基房之れを鍾愛し女御皇后を以て私に期すとあるから、絶妙の容姿は大かた察するに足る。而もそれが掠奪も同様にして義仲の玩弄物となつたのがやうやく十七歳の時であつたとある。

泣きの涙

義仲は此美人を得た報酬として、其兄師家を内大臣攝政となし、基房と計つて其反對黨四十餘人の免職を斷行した。松殿の女が義仲に嫁ぐことを喜ばなかつたのは勿論のことである。が、女といふものは直に慣れるものと見えて、その後義仲が都を落ちる時には泣の涙で別れた。義仲はなほさらである。二人の郎等が切腹して諫言するのも聽かず、鎌倉方の攻め太鼓を



聞き流してイチヤついて居た。鞆繪と違つて此女だけは九地の下までも連れて行き度かつたのであらう。

(九〇) 白拍子の意氣地

常磐や袈裟のやうに根が浮氣の女房であつたものは別としても、平時忠の女といひ清盛の女(成範の妻)といひ、小督局といひ、松殿の女といひ、何れも堂堂たる貴族の令嬢である。上品といへばこれ位上品な女はもとめて得られないのである。而も男子の暴力に對するかれらの抵抗力は極めて薄弱であつた。勿論、彼等は筋肉の上からいうて最も弱者であつたには相違ないが、貞操といふ點からいへば、最も強者であつても好い譯である。而も上流の貴夫人令嬢の貞操は怒濤にもまるゝ一葉の葦よりはかないものであつた。彼等はその仇敵に奪はれて甚しい汚辱を忍んだ。それも慣れては涙を笑にかへて男をいとしがつたのである。

上流婦人の貞操

涙を笑にかへて

肉に没して肉より解脱す

戦争と賣笑婦

捨てられた平家の女房達

上流の貴夫人、令嬢がかゝる薄弱なる節操の持主であつた間に、かのうかれ女に原を發した白拍子といふものは反つて『女の意氣地』を主張した。彼等は肉慾に没して肉慾から解脱したのである。死を以て其貞操を争ふといふ様な武家の女房氣質は其の源を貴族の社會に發せずして、反つてうかれ女、白拍子の社會に發したのである。此注目すべき現象を研究する爲に私は讀者に、私が前に述べた『地方に於ける娼婦』(六三)『婦人蟄居の風起る』(六四)の兩項を想ひ起して貰ひ度い。其際私は攝津の神崎、蟹島、江口あたりに群をなして、貴顯の酒席に斡旋した所謂『うかれ女』なるものに就いて詳説した。處が世のすゝむに隨つて、其うかれ女が漸次一般的となつて來た。最初は名門の子女が之に投じ、和歌を詠じ、舞を演じて上品に貴族を喜ばせたものが、其後戦争の連續と共にそれが餓虎のやうな軍兵どもの要求にも應ずることとなり。漸次平民的となつて來たのである。殊に西海の波に捨てられ、源兵の慰みものになつた平家の女房達は何れも室、八島、神崎あたりにさすらふて私娼の群に投じ、萬客の求めに應じて其笑を賣ることとなつたのである。



うかれ  
女妙

過渡時代

三三

西行法師が攝津の江口を過ぎた時、雨に遇つて、うかれ女、妙といふものゝ家に宿を乞うた。西行といふ坊さんも餘程面白い男である。當節ならば先づ新橋の板新道といふやうな所へ行つて、破れ衣に破れ笠、一夜の宿をとやらかしたのである。これは妙の方で聴く譯がない。西行其處で、

世の中を厭ふまでこそ難からめ

假のやどりををしむきみかな

とやつた。すると妙は直ぐそれに和して

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に

心とむなとおもふばかりぞ

と詠じた。西行も其歌才に感じ、強て宿を求め、終夜閑談して去つたとある。うかれ女は多く和歌が上手であつた。

處が、世の推移と共にうかれ女も和歌ばかりでは通らなくなつた。ちやうど之は伊達と意氣地とで立て通して來た江戸の藝妓が明治となつて薩長の男の意を迎へるよ

西行法師  
と妙

和歌ばかり  
けりで行

座持若し  
くは氣前

富士川の  
合戦

範頼と高  
砂の遊君

うにしなければならなくなつたと同じことである。初めは和歌と舞とで色の蒼白い公卿さん達の鼻毛をよんだものが、武士の跋扈と共に、其要求にも應じなければならなくなつて來た。茲に於いてか、うかれ女に次いで起つた白拍子には、當節の所謂『座持』『氣前』といふやうなものが必要となつて來た。

戦争と私娼とは常について離れぬものである。日露戦争の當時に風俗壞亂の繪畫が盛んに行はれたことは、蔽ふ可からざる事實である。妻子に別れ、家を捨て、山野に露宿する多くの軍兵に、何等かの方法を以て其鬱々の情を散せしめなかつたならば、それこそ大變が起る。義仲の兵が京都を荒したのもそれである。富士川の合戦に、維盛の軍が近き驛の遊君遊女どもを召し集め、酒盛りして騒いだといふのは、強ち平家の不規律とばかりもいはいはれまい。三河守範頼が續いて攻めかゝれば、平家は其處で難なく、亡ぶべかりしを、室、高砂の遊君、遊女どもを召し集め、遊び戯れて居た爲に、平家を屋島に逸したとある。之も軍兵の英氣を養ふ方法としては止むを得ないことであつたかも知れない。

白拍子の意氣地

三三



田舎武士の要求

之を要するに、時代の推移はうかれ女に新しい資格を要求して来た。それは殺伐な田舎武士の酒席に斡旋すべき度胸である。辯才である。頓智である。更に意氣地である。

(九二) 關白でも大臣でも

礪の禪師

白拍子の名は何によつて起つたか。一説によれば、『白拍子』といふのはもと舞の拍子の名であつたが、此頃に至つて一種の舞曲となつた。はじめ藤原通憲が舞の中で最も興あるものを選んで礪の禪師(靜御前の母)に舞はせたのが其起原で、白き水干に長袴を穿ち烏帽子を引入れ、太刀を佩いて舞ふたので白拍子とは名づけたとある。

島和歌の前の

又『平家物語』には、『抑我朝に白拍子の始まりける事は、昔鳥羽院の御宇に、島の千歳、和歌の前、これら二人が舞ひ出したりけるなり。始めは水干に立烏帽子、白鞘巻をさいて舞ひければ、男舞とぞ申しける。然るを中頃より烏帽子刀をのけられて

白拍子起る

水干ばかりを用ひたり。さてこそ白拍子とは名づけ、れ』と書いてある。其男舞と呼ばれた事といひ、又、刀を佩びた事といひ従来うかれ女が演じた舞よりも、勇ましいものであつたことはいふまでもない。白拍子が武士に歓迎されたのも偶然の事でない。

度胸と辨才と頓智

武士は何事も閑雅にして優長な公卿と違つて粗野亂暴たることは免れない。酒を呑めば、口論もするだらう、殴り合ひもするだらう、盃盤狼籍、白刃ひらめき、鐵拳飛ぶといふ間に處して、靜かに座を持ち、男の心を和げるものは、うかれ女の和歌でなくして白拍子の度胸であつた。辯才であつた。頓智であつた。茲に於いてか白拍子の間には『女の意氣地』といふものが起つて来た。假令關白であれ、大政大臣であれ、いやなものはいやで御座いますといふ意氣地が生れて来た。彼等は肉に没頭して、肉に解脱したのである。貴族の令嬢達が、風のまゝに靡いて強いもの、思ふがまゝになつて居た間に、白拍子は女の達引といふやうなものを覺えた。

女の意氣地

祇王、祇女、佛御前のことは茲に説く可くあまりに知られた話である。

關白でも大臣でも



祇王と  
祇女

清盛は勢ひのまゝに祇王、祇女といふ姉妹の白拍子を併せ寵し、其母とちにもよき屋敷を造らせ、毎月百石百貫を仕送りして、京中の白拍子を驚かした。かくして祇王、祇女は彼等が羨望の中心となつた。

處へ、佛といふ素晴らしい美人が現はれて、我こそ清盛殿の寵にあづからむものと、ひとり西八條殿に推参した。清盛は祇王、祇女のあらん間、佛にもあれ神にもあれ、叶ふまじきぞと追ひかへさんとするを、祇王が白拍子の意氣地を見せて清盛に推薦する。

佛御前

清盛が會つて見ると、年はやつと十六花ならば蓄、而も水のしたゝるやうな北國系の美人であつたので、祇王も祇女も忽ちに見かへられてしまつた。清盛は佛の止むるのも聞かず、トウトウ祇王を追ひ出して仕舞ふ。祇王は、

祇王捨て  
らる

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

いづれか秋にあはではつべき

と一首の歌をのこして西八條殿を去つた。祇王が西八條殿を去つたと聞いて京中の上

祇王の  
母とち

下、文をよせ人を遣はして見参せんといふものも多かつたが、祇王は今更人にあふべきにあらすと、戸をとぎして招きに應じなかつた。

清盛は祇王の心も知らず、強ひて西八條殿に召して佛慰めよとある。佛は死を賭して拒まうとしたが、母とちの頼みもだし難く、泣く／＼清盛の前にまかり堪へがたき辱を忍びつゝ、今様一つ歌ひ出づ、

『佛もむかしは凡夫なり。我等も終には佛なり、いづれも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ』

佛の意氣

人を恨ま  
す

と。一座皆袖を絞つたとある。かくて祇王はまたかゝる憂き目を見む事もやと二十一歳にして尼となり、嵯峨野の奥に世をしのぶ。妹祇女十九、母とち四十五何れも髪を剃つて祇王と共に後世を願ふ。佛もこれを聞いて深く感じ、秋風一夜、嵯峨野の露を分けて柴の折戸を叩き相抱いて人生の無情に泣き、十七にして様をかへ四人一所に籠つて朝夕行ひすましたとある。

清盛が門前拂ひを喰はさうとした佛を推薦した祇王の意氣、嵯峨野に祇王を訪ねて



世を呪はす

共に尼となつた佛の意氣、人を恨みず、世を呪はぬ高潔な精神は、到底之を當時の貴夫人、令嬢に於いて見出し得ざる所であつた。

(九二) 千手の前

平重衡

侮る可か腕らざる手

同じ清盛の子でも重衡といふ男は宗盛などに比べると餘程、出来のよい方であつたものと見える。頼政を宇治川に破り、勢ひに乗じて奈良の東大寺、興福寺を焼いたなどは何處までも、ものごとくに凝滞しない、貴族の坊ちやんらしい遣口であるが、養和元年の三月に源行家を尾張の洲股に破り、壽永二年の二月に義仲の軍を備中の水島に破つたなどは侮る可からざる手腕といはなければならぬ。

一の谷の戦ひには重衡生田の森によつて奮闘し、敗れて走る處を莊家長の手に捕へられた。

京都に護送されて土肥實平の家に拘禁せられ、更に鎌倉に送られる途中、伊豆に於

重衡の人となり

重衡死期の近きを知る

千手の前

いて北條に獵した頼朝の一行と會した、此時重衡はツカツカと頼朝の前に進み神色自若として少しも臆する色が見えなかつたといふ。物に屈托しない貴公子の度胸がこゝにもよく現はれて居る。頼朝は更に工藤宗茂に命じてよく之を待遇せしめた。斯くて鎌倉に着くと、宗茂は重衡のために浴室を設けて、歡待之をつくした。重衡は早くも其死期の近づいたことを知つた。

頼朝は千手といふ美人を重衡のもとに送つて朝夕の面倒を見させた。

千手は駿河手越の遊女、頼朝が深く愛して侍婢としたものである。容貌秀麗、舉止閑雅とあるから後世の宿場女郎の類でなかつたことは明かである。重衡は清盛の子であるからもとより玉のやうな美男であつたに相違ない。それに氣性も頗る潤達と來て居るから、荒くれな鎌倉武士ばかりを相手にして來た千手の前はスツカリ惚れ込んでしまつた。其上、其處には暗いさみしい未來を持つた人といふ同情もある。戀やら情やらで、二人は何事も忘れて刹那の歡樂に酔ふといふ戀仲とはなつてしまつたのである。



生きたい  
生きたい

生きて  
とならむ  
僧

夜更けて  
愁更に新  
なり

過渡時代

三七〇

明日にも首を斬られやうといふ果敢ない運命の持主にも、なほ生きて居る間は其處に戀といふものがあつた。其戀といふものが、生きよう、生きようといふ欲求の變體であるといふことを知つた時、人といふもの、悲しさが沁々思はれるではないか。頼朝は千手にいひふくめて、それとなく重衡の望む所を問はしめた。思ふに其死を諷したのであらうか。重衡は何事も望まず、唯、生きて僧とならんことを欲するのみと答た。

重衡は死にたくなかつた。彼は心から生き延びたかつたのである。其處で頼朝は更に藤原邦道、工藤祐經、千手の前等をして、一夜酒宴を開いて虜中の鬱を慰めしめた。之で重衡の死は全く決まつた譯である。けれども彼はなほ生きたかつた。

夜は更けた。人は去つた。堂上燭滅せんとしてまたあかく。青年貴公子の愁は新に切なるものを加へた。重衡は靜かに盃をとり、千手の膝によつて、

『燭は暗し數行虞氏の涙。夜は深し四面楚歌の聲』

重衡南都  
に斬らる

千手の意  
氣

とほがらかに詠じた。聲はむなしき室内にみちて、聴く人の腸を斷つた。千手の前はよゝとばかり重衡の膝に泣き伏した。

翌年、重衡は南都に護送せられて、木津川のほとりに斬られた。東大寺、興福寺の坊主どもが、ひとく重衡を恨むで居たからである。

千手の前は一樹の蔭、一河の流れも多少の縁、ましてやあけくれかしづきまゐらせし君の御情、何時の世にかは忘るべきとあつて、颯然鎌倉を去り、信濃の善光寺に入つて尼となつたが。文治四年四月二十五日病を得て死んだ。年やうやく二十四とある。これらも後宮の女房や京紳の貴夫人、令嬢達に見られない心中立である。明日にも首を斬られようといふ囚人に情を立て、鎌倉武士の見るまへをも憚らず、女の意氣地を見せたのは、根が遊女の千手であつた。

(九三) 義經の艶福



河越重頼の女

源九郎義經の正妻は、兄頼朝の配によつてめとつた河越重頼の女である。餘程、温良な婦人であつたものと見えて、義經の浮氣を嫉むでもなく、夫が顛沛の後も、終始其傍を離れず、苦樂を共にして果てた。

義經と河越氏

義經が、頼朝の刺客、土佐坊昌俊を殺して九州に落ち延びようとした時には、源有綱、堀景光、辨慶、及び白拍子の静を従へたとある。其後京都から山伏の姿に身をやつして陸奥に落ち延びようとした時には妻河越氏及従者を従へたとある。かくて河越氏は文治五年、義經と共に衣川に自殺して果てたといふのであるから先づ以て義經との仲は睦じかつた者と見てよろしい。唯此人如何にも光彩のない婦人であつたものと見えて更に其言行の傳ふるに足るべきものがない。當節の語でいへば、マア、マア良妻賢母といふ側の女であつたらうと思はれる。

義經の撫で斬り

義經といふ男、色こそ白いが、反齒で、丈が低かつたといふから大した男振りとも思はれない。それが正妻をおいて、淨瑠璃姫、兎一法眼の女、靜御前、平時忠の女といふやうに、天下の美人を撫で斬りにしたのは恐ろしい。が、それは何も不思議はな

先づ征服せよ

い。義經は年若くして京都の實權を掌握した。招かずとも美人が其門に集るのは當然のことである。之によつて見ても男子は女に惚れられむことを思ふ前に、先づ、女を征服することを考ふ可きものかも知れない。

淨瑠璃姫

義經が鞍馬の僧覺日に預けられたのが平治元年、十一歳にして志を立て、十六歳にして奥州に下つた。正に承安四年のことである。途中三州矢作に於いて驛長金高の孫女、淨瑠璃姫と通じたといふ傳説がある。保元年間に伏見中納言師仲が罪あつて下野に配流せられる途中、金高の女と通じて生ませたのが淨瑠璃姫、玉のやうな美人とあつて人が其名を呼んだ。御曹子が薄墨といふ名笛を吹き、姫の彈する琴に合せて月下に嬉曳したといふ。随分浮氣な戀であつた。近松が『源氏十二段』に書いた埒もない醜態、或はそれが實情であつたかも知れない。

戀はかなき

時忠の女は何うしたか。壇の浦で拾はれた平家の女房達は須磨あたりに捨てられた。其後、室、八島、神崎あたりに美しい遊女の増えたのは、其なれのはてでもあつたらうか。何れにしても、戀はかなき水鳥の、砂にのこした足跡のやうなものであつ



静御前

た。  
而も其間にあつて、永遠に人の心の奥深く生きて響くものは彼と白拍子、静との戀である。史家の愛憎はまち／＼である。判官が九天の上に持ち上げられる時でも、九地の下に葬られる時でも、静との戀の一條だけは、必ず人の心に、ある響きを與へるに相違ない。

静の素性

静の母は、磯の禪師といふて、讃岐國大内郡小磯の人である。後鳥羽院の時藤原通憲に従つて白拍子といふ一種の舞曲を始めたといふことは前にも述べて置いた。静は其女であつて源義經の妾となつた。容貌よりも寧ろ其頓才、機智を以て義經に愛せられたものらしい。(第九十一項参照)  
文治元年十月、土佐坊昌俊は頼朝の内命をうけて義經を圖る爲ひそかに上京した。義經は早くもそれと察して一旦昌俊を六條、堀河の館に呼んだ。昌俊は義經の訊問に對し、七大寺詣での爲上洛致しましたと言をつくして辯解したけれども、義經の疑は少しも霽れない。

昌俊の上京

昌俊の夜襲

其處で昌俊は、仕方がないから早速起請文を認めてそれを飲み込んで見せた、義經も纔に疑を晴らした。  
昌俊は漸との思ひで堀河の館を飛び出したが最早これはグズグズして居るべき時でない。先んずれば人を制すといふので、昌俊は其夜直に襲撃といふことに決した。此方は義經、昌俊の歸つた後、何となく胸騒ぎがする。夕ぐれ、其旨を静に告げて昌俊が夜討をしかけるのではあるまいかと相談に及ぶ。其處で静が欄干に倚つて打ちながめると町の方が何となく騒々しい。さてこそ油断がならぬといふので二人の童を走らせて、昌俊の館をうかがはせた。

静欄に寄りて望む

兩童の斥候

(九四) 吉野の雪

物見に遣つた兩人の童は何時まで経つても歸つて來ない。其處でこんどは一人の婢を昌俊の館に遣して見た。

吉野の雪



兩童斬らる

暫くすると婢は息せき切つて歸つて來た。前に遣はされた二人の童は無残にも門前に斬り殺されて、館には鞍を置いた數十の軍馬が首を並べて、出發の命令を今や遅しと待ちうけて居るといふ事である。

義經はさてこそと其用意を命ずる。

夜更けて昌俊の兵は、潮の頽るゝが如き勢ひを以て押し寄せた。豫て期したる義經は、小癩な坊主の舉動かなといふので、刀を執つて起たうとする。側にあつた静が、袖をひかへて、

静甲冑弓矢をす

『小敵とは申せ、油断はし召さるな』といふので、甲冑弓矢をすゝめる。これがよく繪などにある見えである。遁げまどひ、伏し轉んで手籠めにあつた平家の女房達とはテンデ態度が違ふ。これは白拍子といふものが田舎武士の酒席に斡旋して、養成された膽力である。

昌俊敗北

折角の夜討も其裏をかゝれた爲、昌俊散々に敗北して、鞍馬に遁げ込んだのを捕へられて首となつた。義經は同時に法皇にせまつて頼朝征討の院宣を強請した。頼朝は

大物浦の遭難

これを聞く大に怒つて直に義經征討の大軍を發した。文治元年十一月三日、義經は鎌倉の出兵を聞いて京都を出奔した。

攝津河尻に於いて、多田行綱といふものが、兵を率ゐて義經を要撃した。義經は之を破つて、大物浦に至り舟を發して九州に落ち延びようとしたが、暴風に遇つて進むことが出来ない。源有綱、堀景光、辨慶、静と共に海に飄蕩して引きかへし、大和に走つて、吉野山に隠れた。僧覺範といふものが之を覺り、惡僧を率ゐて大搜索を開始した。五日の後、義經主従は遂に吉野を驅り立てられて多武峰に走り十字坊に投じた。

吉野山に隠る

別離の悲歎

此時まで義經に随つて艱難を共にした静は竟に別離の止むを得ざる事情にせまられた。義經は静に金寶を與へ、雜色五人を附して京都に送らせた。淨瑠璃姫を矢作に捨て、平家の女房達を須磨の浦曲に捨て、顧みなかつた義經も、静には五人の雜色を附けた。以て彼が静に對する綿々の情を察すべきである。静はもとより、泣きの涙であつた。無情なる雜色共は、静を途に窘めて其金寶を奪



靜京都に送らる

ひ去つた。靜は戀しい人の大切な片身を奪ひ去られた上に、雪の山路に捨てられた。途方に暮て伏し沈むで居る處をこんどは、荒くれな山僧どもに捕へられて京都に送られた。靜は散々な憂き目を見たのである。

其時京都には北條時政が、頼朝の全權公使として出張し、盛んに朝廷と新制度の協議中であつた。時政は情を具して靜を鎌倉に送致した。

頼朝は靜を召して義經の所在を問うたけれども、靜は唯知らずとのみ、口を緘むて一言も發しなかつた。頼朝といふ人は無情冷酷ともいはれる程に賞罰の厳しい人であつたが一面にはまた非常に優しい心をもつた大將であつた。尋常なれば許すべからざる申したてゝはあつたけれども、靜が妊娠中とあつて、そのままに止め置かれる事となつた。

靜妊娠

例の政子夫人が、靜の前生を聞き、舞の上手と知つて、屢靜を召すけれども、靜は病と稱して、其招きに應じない。泣いて訴ふらく、『妾もとより卑賤の流、夢さら己れを惜むの心にてはなく侍れども、一度伊豫殿の寵

政子夫人の招きに應ぜず

を受けたる身の、衆人稠座の中に恥を忍ばんこと命にかへても堪へがたき所に候』と。政子夫人も苦勞人である。其心根を憐れとは思つたが、なほ其舞を見んことを欲して止まなかつた。

それは靜にとつては、辛い、悲しい一日であつた。頼朝が政子夫人と鶴ヶ岡の八幡宮に參詣した時、靜を舞殿に召して、是非に白拍子の舞を所望とあつた。

(九五) 靜御前

靜再三辭す

靜は再三辭した。今は心も別離のかなしみにとざされて、到底かゝる晴れの座に立舞ふ可くもあらぬ身である。と、ひたすらに哀訴したけれども、頼朝は是非にとあつて聞き入れなかつた。

綺羅星の如くに居並んだ諸大名の手前、靜は此上頼朝の命令を拒む譯にも行かなかつた。



静遂に舞

工藤祐経が鼓、畠山重忠が銅拍子の役を承つた。片唾をのんで控へた鎌倉武士の視線は一齊に静の美しい姿に集まつた。静はやがて一揮して立つた。

吉野山峰の白雪踏み分けて

入りにし人の跡ぞこひしき

と聲に應じて、別離の曲を舞ふ。また唱うて曰く、

賤や賤しづの緒手巻くりかへし

むかしを今になすよしもがな

胸にあまる悲痛の情は、流れて即興の詩となり、即興の曲となり、差す手に雲を呼ばば、引く手に風を招き、哀絶愴絶、流石の鎌倉武士もこれには涙を流して感じ入つた。

悲絶愴絶

別離の悲

頼朝は甚しく不興であつた。

『憎き女子が心根かな、今日は神前の舞樂、應に關東の萬歳を祝すべきに反つて叛人

頼朝不興

を慕ひ別離の曲を歌ふは何の心ぞや』

と。近侍の武士も言なく、一座白けわたつて見えた。

其時政子夫人が側から頼朝の心をなだめた。流石に女は女同士の思ひやりといふものがあつたものと見える。

『わが君、昔流人たるの日、妾密かに終身の約を結びまゐらせしが、父、時政時勢を憚りて之れを妨げ侍りぬ。

されば妾、暗夜に雨を冒して君の御許に奔りぬ。石橋山の御旗上げには妾ひとり伊豆山にありて君の安否を煩ひ、日ねもす夜もすがら思念に心もとざされて侍りしが、静、今若し伊豫殿の恩を忘れて戀慕の情なくんば人にあらず。情中に動きて外に形る、君よろしく矜恕あつて然るべし』

と。頼朝も昔の事をいひだされては一言もない。唯苦笑ひして衣を御簾の外に推し静に遣はせとあつた。衣を脱いで纏頭とする風は、うかれ女時代と少しも變りがなかつたものと見える。

政子の和解

頼朝の意解



祐經と景茂の野心

静の評判はこれから鎌倉武士の間に専らとなつた。工藤祐經と、梶原景茂とが、静の僑居を訪れて、何のかのと長尻を据ゑ込んだ。母磯の禪師が出て、酒を佐けたとあるから静に於いては、大そう迷惑がつたものと見える。當節ならば、先づ筭の五六本も立てられて、穿きものにお灸位は頂戴したに相違ない。

野暮と不粹

處が野暮と不粹は鎌倉武士の特色である。梶原景茂はトウトウ生地を現はした。彼は微酔に乗じ、チヨイと静の袖を引いて見たのである。静はキツと容をあらためて、景茂をたしなめた。

静景茂をたしなむ

『伊豫殿今は罪を得たまへりと雖も、もと鎌倉殿の御連枝、妾は其侍妾、御身は已に其家人にては候はずや。伊豫殿にして若し在さば、御身何とて今宵の推參叶ふべきや。あまりと申せば慮外なる爲され方にて候』  
と、いひさまワツと泣き伏して口惜し涙にかきくれた。景茂は散々な振られやう、赤恥をかいて遁け出した。

静生兒を殺さる

既にして静は玉のやうな男の子を生むだ。妊娠中とあつて静の糺問を中止した頼朝も生れた男の子を赦すことは断じてしなかつた。

頼朝は無情か

安達清經は頼朝の命を受けて、静の僑居に踏み込み、泣き叫ぶ静の手から其嬰兒を奪ひ去つて、之を由井ヶ濱に殺した。此段、頼朝は如何にも無情冷酷な大將のやうに見えるが、頼朝には頼朝で、また天下を統御する一つの尺度があつた。嬰兒は殺されたが静は随分寛大な處置を受けて居る。彼は必ずしも無情冷酷な大將ではなかつた。子を生むで後、静は政子夫人から厚い手當をうけて京都に送りかへされた。白拍子静は、頼朝の天下を治むる尺度の外に量られたのであつた。

(九六) 遊君

遊君の研

白拍子のことは前項を以て預かりとし次には地方の遊君に就いて研究の歩を進める事とする。

遊君



過渡時代

平安朝以來、交通の發達につれて、地方に於ける娼婦はいよゝ其數を増し、鎌倉時代に入つては、各街道の宿々はもとより、津々浦々の末に至るまで、苟くも驛馬、船舶の行かひしげき所は、一として遊君傾城なるもの、影を見ざることもなきに到つた。『更科日記』には、恐ろしく物凄しい足柄山の麓にまで、遊び女が出たと書いてある。『月もなく暗き夜の闇に惑ふやうなるに遊び女三人、何處ともなく出で來り、五十ばかりなるひとり、二十八ばかりなるひとり、十四五なるもあり。庵の前に傘さ、せて据たり』

と。年増でも、肩揚げでもお好み次第といふのであるから却々發達して居たものと見える。同書に美濃國野上の遊女といふことが書いてある。

『美濃國なる境に墨股といふ渡りして野上といふ所に着きぬ。そこに遊び女ども出で來て、秋一夜歌うたふに、足柄なりし憶ひ出られて、哀に戀しきこと限りなし』

と。此野上といふ所からは、班女といふ有名な遊女が出て居る。班女は名を花子といふて、深く吉田某と契り、其別離の後音信の絶えたのを悲しむで發狂し、某がかたみに

にとて殘した扇を挿み、

夏はつる扇と秋の白露と

いづれか先におきふしの床

といふ歌を唱つて市中を徘徊したといふ。事があまりに唐の班女に似て居るので、人が花子を呼んで班女というたとある。

富士川の合戦に、平家の軍が、『其あたり近き宿に寄り遊君遊女どもを召し集め』酒盛りして騒いだといふことは前にも述べた。(第九十項参照)

『増鏡』に、將軍頼朝が、初めて上洛の途次、遠江橋本の宿に着くと、其處の遊君が多うちつれて出迎へたとある。橋本は今の新居である。其處で頼朝もニッコリして

橋本の君に何をか渡すべき  
といふと、例の梶原が意地悪く、

只そま山のくれであらばや

とつけた。けれども結局、彼等は馬や鞍や布を澤山に貫つて大に喜んだとある。貴人の



手越、黄瀬川の遊君

宿には、遊女がうちつれて推参したものと見える。  
建久四年五月、富士の巻狩に際しても手越、黄瀬河あたりの遊君どもが先を争うて諸大名の陣屋に推参し、喧囂を極めたのである。五郎時宗の情婦、手越の少将が、祐經の陣屋にとまり込んで居たといふのも、恐らくは此邊から出た小説家の脚色であらう。

手越少将と大磯の虎

さて、それに就いて思ひ起すのは大磯の虎のことである。虎の母は大磯の長者某の女、父は曾て關東に流謫せられた伏見大納言實基とある。前に述べた淨瑠璃姫とよく似た素性である。

和田義盛を振る虎

曾我十郎祐成と深く相愛して、多くの權貴に鼻をあかせた。就中、和田義盛を振つて振つて振りぬいたことは『大日本史』にも書いてある。母のすゝめに止むを得ず、義盛の酒席を佐けたが、十郎に心中を立て、義盛の盃は受けなかつたといふ。建久四年六月一日、十郎の復讐一件から鎌倉に召喚せられ、一應の訊問をうけたといふことは『東鑑』にも書いてある。彼女は十郎の最期を聞いて、哀慕悲痛の情に堪へず、箱根

十郎死後の虎

山に登り、僧行實に請うて祐成の冥福を修め、其愛馬を以て唱導の施物となし、遂に尼となつて信濃の善光寺に赴いた。時に年漸く十九。

後、裾野を過ぎて愛人復仇の跡を踏み、追懐に堪へずして

浮世ぞと思ひそめにし墨衣

今また露の何とおくらむ

露とのみ消えにし跡を來て見れば

尾花がするゑにあきかせぞふく

と詠んだ。晩年は大磯に歸つて高麗寺に住んだといひ、又寛元三年正月、紀州の熊野に歿したともいふ。年七十一。

裾野の露

(九七) 愛壽と微妙

愛壽

大磯の虎に就いて連想せられるのが愛壽のことである。愛壽も虎と同じく大磯の遊

愛壽と微妙



頼家と愛

君であつたが、朋輩から其美貌を妬まれて、源頼家が、大磯の旅館へ、名ある遊君を召し集めた時、その選に洩れたといふので落飾して尼となつた。頼家之を聞いて、いたく不憫のことに思ひ、夥しい引出ものを贈つて慰めたけれども、愛壽はそれを受け入れようとしめない。悉く高麗寺に施與して何處ともなく去つたとある。

微妙

當時、鎌倉に微妙といふ舞妓があつて比企能員の家いへに寄寓して居た。之は遊君といふよりも寧ろ白拍子といふ方であつたらう。頼家が能員よしかずの家いへに赴いて微妙の舞を見た時、能員が微妙の爲に口添へして此女はもと京都のものであるが、何か、幕府に訴へることがあつて、遙々東へ下つたものであるといふことを申し出た。

微妙頼家  
に父の冤  
を訴ふ

其處で頼家が微妙を近く召して其訴へを聴くと、微妙は涙にくれて身の上話をした。微妙の父は右兵衛尉爲成といふものであつたが、建久中讒に遇つて蝦夷に流され、母もそれを憂へて彼女が七歳の時病死した。微妙は唯一人ひとりのこされて寄るべき親類もなく、長ずるに隨つて哀慕の情堪へ難

政子微妙  
の志に感  
ず

さま、此上はかなはぬまでも幕府に哀訴して父の冤を雪ぐに如かずと、身を賤流に沈めて遙々東へ下つたとある。

微妙尼と  
なる

頼家をはじめ、並み居る武士何れも其孝心に感じて袖を絞らぬはなかつた。殊に、政子夫人は深く微妙の志を多とし、特に使を陸奥に遣はして爲成を搜索させたが、既に其配所に歿した後であつた。微妙は之を聞いて泣き悲しみ、殆ど絶え入らんばかりであつたが、政子夫人の慰めに力を得て、尼となり、持蓮と名乗つて厚く父の後世を弔つたといふ。

妓王、妓女、佛、千手、静、虎、愛壽、微妙と系統を逐うて考へて見ると、女の志操といふものが當時上流の貴夫人、令嬢になくして、反つて下流の白拍子、遊君にあつたといふことがうなづかれる。

田舎の婦  
人の研究

以上の叙述によつて、わが讀者諸君は京都に於ける貴夫人、令嬢の社會と、白拍子、遊君の社會とを比較して考へることが出来たであらうと信ずる。之から私は、筆鋒を轉じて、田舎の女、即ち田舎武士の女や女房に就いて研究の歩をすゝめて見度いと思



松風村

頓狂なる  
繼母

在原行平  
と松風

安部則  
任の妻

ふ。  
朝廷には君、傾城よりも埒のない女房達が、色の蒼白い公卿さん達を捉へてふざけ散らして居る藤原時代でも、足一度江湖駘蕩の境に入れば、『松風村雨』のやうな、やさしい、純朴な物語があつた。松風は讃岐鹽飽の領主、時國の女である。妹村雨と父母につかへて至順至孝の名が高かつた。母歿して後、頓狂なる繼母の手に虐まれ、危く殺害までされようとしたのを、乳母の夫、牟禮兵衛に助けられて須磨に通れ、貧しき漁村の家に養はれて居た。適々こゝに流謫せられた、在原行平が見て、其家を問ふにあひ、松風

白波の寄する渚に世を過す

あまが子なればやども定めず

と應へたといふ。彼女は何處までは其無情なる親を恨まなかつたのである。  
又前九年の戦には京都の搦紳達が、夷々と呼びなして卑しんだ安部則任(貞任の弟)の妻が、夫が捕はれの身となつたのを悲しんで、其子と共に斷崖に身を投じて果てたと

淨瑠璃姫  
の最後

敦厚純朴  
なる精神

驛長の女

いふ悲壯な話もあつた。

淨瑠璃姫が、御曹子に言ひ寄つて一夜の契りを結んだ。其戀は如何にも浮氣であつたが、彼女は其再び會はれぬことを知つては慚恨の情やるせなく、菅根川に身を投げて死んだのである。(第九十三項参照)

采女の墮落をそのまゝにうけついだ後宮の女房、それを見習つた、搦紳の貴夫人、令嬢が唯、色を競ひ、情を銜ふことにのみなれて、其夫に對し、其父母に對して少しも摯實な精神を持たなかつた時、私達は、敦厚純朴な精神がなほ、田舎の婦人によつて保たれたことを見出すのである。田舎の婦人の研究は、やがて北條政子論の前提である。

(九八) 鎌倉女房氣質

宗盛の嬖妾、熊野は遠州池田の驛長湯谷某の女である。淨瑠璃姫に關する傳説とい

鎌倉女房氣質



ひ、虎御前に關する傳説といひ、當時にあつては各驛の驛長が、貴顯の宿をつとめて愛嬢を其枕席に侍らせるのが普通の事であつたものと見える。所謂接待的賣淫の名残であらう。

宗盛の  
嬖妾熊  
野

妾といつても、何も慾の深いお母が長火鉢の前に左團扇でおそばの間食をして居たといふ譯ではない。熊野の里は立派な土地の豪族である。而も熊野は恭謙にして驕慢ならず、常に父母を慕つて寢食を安んぜずとあるから、その心がけのやさしい處は、浮氣ではねつかへりの京女郎とは少し趣を異にして居たものと見える。

春一日、宗盛は熊野と相乗りで東山の花見に出かけた。

花は綺陌  
紅く柳  
に緑深し

花は綺陌にあかく、柳は絲樓に緑深しといふ東山の春、また逢ひ難きの美景に接しながら熊野は何うしたものか浮ばぬ顔色である。

いかにせむ都の春も惜しけれど

なれし東のはなやちるらむ

熊野の母は老の病に臥して、我子の歸省を待ち暮すとあつた。流石に應揚な宗盛も

定省の暇

熊野のやさしい心に感じて定省の暇を與へる。熊野は狂喜措く所を知らず、直に馳せ歸つて老母の枕席に侍したとあるのが、謠曲でよく人の知つて居る條。

其後宗盛が壇の浦に捕へられて鎌倉に押送せらるゝ途中、池田の宿にとまつた時、

熊野は宗盛の爲に歌を詠じて其心を慰めた。

東路の埴生の小屋の愴きに

ふるさといかに戀しかるらむ

熊野は田舎ものであつた。彼女の敦厚純潔な精神は、輕佻浮薄な都會の生活によつて少しも損はれなかつたのである。けれども流石は都の風にしみた上臈である。飽くまでも閑雅優美な所は雄雄しい關東武士の女房とはまた呼吸が違つて居た。

鞆繪と板額の事は再婚の説明に例として述べたから茲には省く。悍馬を御して屍山血河の間を馳驅するといふやうなのは、鎌倉武士の女房としても寧ろ例外であつた。

其處へ行くと、土肥實平の女房などは先づ以て典型的な鎌倉女房といふべきであらう。

東路の埴  
生の宿

土肥實  
平の妻



頼朝石橋  
山の窟厄

兵平の妻  
糧食を運

仁田四  
郎忠常  
の妻

頼朝が石橋山の旗上げに破れて實平と二人杉山に潜んで居た時、其妻が僧と計つて糧食を運んだ。頼朝と實平とは此妻の働きによつて纔に餓を免れ、數日の後、山を脱することを得たのである。されば實平の妻は頼朝にとつて忘る可からざる恩人であるが、其時、彼女が頼朝の匿れて居る處へ糧食を運んだ其方法が頗るおもしろい。實平の妻は一人の坊主としめし合せて飯を閑迦桶の中に盛り其上に糧の葉をかぶせて運ばせた。山僧が毎朝佛前に供へる糧の葉を探りに行くやうに見せかけたのである。其働きといひ、其頓智といひ、街情を生命とした京女郎の到底及びもつかぬ處である。

新田四郎忠常は、富士の卷狩に曾我十郎祐成を討ち取つた勇士として有名である。伊豆の人で、はやく頼朝に仕へて其信任を得た。

此人の妻がまた大そうな夫おもひで、曾て忠常が病氣をした時には、三島神社に祈禱を凝し、其七箇月目の下向道に、江尻の渡で水死した。彼女は身を以て其夫に代つたのである。これらも、平安朝以來曾て見ざる女房の心中立である。

志水冠  
者の妻

頼朝夫婦  
手古摺る

大將とし  
ての天品

義仲が北越から海野幸氏に附して頼朝の許へ質子に出した志水冠者義高は、頼朝の女を妻として鎌倉に雙六を轉ばして遊んで居たが、頼朝は義仲を殺すと同時にこの義高をも殺さうとした。それを義高の妻がき、知つて、幸氏と謀り義高を鎌倉から落した。

義高が入間河に斬られた後は、頼朝の息女、義高の未亡人何とあつても再縁を肯んじない。悲嘆のあまり日に々憔悴して散々に恨みを並べ立てるので流石の頼朝夫婦もこれには手古摺つてしまつたといふ。其執念の強きはげしい處が政子夫人の血を分けた女である。

(九九) 頼朝の初戀

頼朝といふ男は、子供の時から物事に屈託しない人であつた。ツマリ大將としての天品があつた。義朝は多くの子の中で、頼朝を可愛いがつて居た。親の首でも、兄弟



の首でも大根のやうに斬つて捨てる。美濃の青墓では實子の朝長が役に立たぬからと  
いうて斬り殺した。随分サツパリした豪傑であつたが、頼朝だけは心から可愛いがつ  
て居た。

頼朝を偏  
重した義  
朝

平治の戦ひに義朝は源氏の重寶産衣の鎧といふものを頼朝に着せた。これは八幡太  
郎が生れた時、源家が朝廷から産衣として賜はつた鎧であるから、十三歳の頼朝にち  
やうと身丈のあつたのは好いが、をかしいのは髭切りの太刀である。これは源氏累代  
の重寶であるから、何も十三歳の頼朝につけさせる必要はない。自身が差すなり義平  
に差させるなりしたがよい。それを産衣の鎧と一處に頼朝に授けて喜んだ。随分不公  
平な仕打である。

頼朝をた  
よりの命

戦に負けて美濃の青墓に落ちる途中も、頼朝の事ばかり氣に病んで居た。頼朝が馬  
の下でウトウトと眠つて一行におくられると直ぐ鎌田政家を引かへさせて尋ねさせる。  
義平が怒ると側から頼朝の爲に辯護する。それでいよ／＼頼朝を見失つたとなると雪  
の中へドツカと座して最早死なうといひ出す。政家が切諫してやつと美濃の青墓に下

朝長と頼

る。

朝長が横川の僧兵にやられた傷が痛むといへば、「頼朝を見よ」と既に見失つてしま  
つた小伴のことを引合に出してたしなめる。義朝の頼朝頼負と來たら、それこそ話に  
も何にもならなかつたのである。

調子づい  
た小伴

其處で小伴もよほど調子づいて居た。平治の戦に父義朝に向つて、  
『座して待たば敵必ず至らん。如かず進んで機先を制せんには』

髭切の太  
刀

とやつたなどは、其コマチャクレさ加減が分らない。近江の森山驛で父の一行に後れ  
て馬の上でウトウトやつて行くと急に『落人待て』と平家の一味が馬の口をとらへる。  
黄昏の光にすかして見た土地の百姓どもが、小伴と侮つて飛びかゝつたのである。頼  
朝眼をあいで見ると恐ろしい大男が馬の口をとらへて居る。ウヌといひさま髭切の太  
刀を抜き放つと眞向微塵と斬下した。不意を打たれた大男瞬くうちに二人まで脳天  
から梨割にやられてしまつた。

安河まで行くと政家が引かへして『佐殿！佐殿！』と迎へに來た。そこで一度は父に



生死の境  
に馬の上  
で睡眠

池禪尼

暢氣な流  
人生活

關東の豪  
族皆頼朝  
に心を寄

追ひついたが、雪に迷つてトウトウ一行の影を見失つてしまつた。  
頼朝といふ男は生れ落ちての大将であつた。その氣品へ、親父の義朝が愛情といふ  
油をかけたから堪まらない。死ぬるか生きるかといふ境に馬の上で睡眠をする程のノ  
ツポに出来上つてしまつた。

保元二年平宗清に捕へられて池禪尼に救はれ、伊豆の蛭ヶ小島に流されたのがち  
やうと十四歳の時であつた。處が前にいうた通りのノツポであるから、流人といつて  
も決して物事に屈託しない。源家の正統は己れであるといふやうな顔をして、少しも  
氣がね氣苦勞などはしなかつたやうである。其氣品にけおされてか、日を経る程に、  
源家累代の家人にして平家の跋扈を憤るものが、追々彼の配所を訪れるに至つた。

北條の領主、北條時政も決して頼朝を粗末には取り扱はなかつたものと見える、工  
藤茂光、土肥質平、岡崎義實、同與一、同義忠、宇佐美三郎、天野遠景、加藤次景廉  
などいふ伊豆、相模の豪族どもは何れも此頃から頼朝に心を寄せて居た。されば頼朝  
は流人と雖も少しも物事に屈託する所はなかつたのである。

伊東祐  
親の女

繼母の  
諷にあふ

祐親頼朝  
を殺さんとす

斯くの如くにして人となつた頼朝の前に先づ起つて來るものは、趣味ある初戀の物  
語でなければならぬ。

頼朝の初戀の相手は誰であつたか。『曾我物語』には、伊東祐親の女とある。『大日本  
史』も此説を信じて居るやうである。其説く所によると、頼朝は初め祐親の家に居て  
其三女に通じ一子を生せたけれども、其母といふのが繼母であつた爲にひどく女を惡  
んで祐親に讒訴した。祐親は初めて女と頼朝との仲を知ると共に平家の思はくを憚り、  
大に當惑した揚句、茲にいよいよ頼朝殺害の意を決するに至つた。時に安元元年とあ  
る。

(100) 伊東の頼朝

祐親は先づ頼朝の生せた子を水に沈め、女を江間小四郎に嫁し、其上で頼朝までも  
殺さうとしたのである。其處で頼朝もこれは堪らないといふので、北條に走つて時政



を待んだ。時に頼朝二十七歳とある。

若し頼朝が時政の女、政子と通ずる前に伊藤祐親の女と關係したといふ事を事實とすれば、頼朝の居は始終蛭ヶ小島にはなかつたのである。何となれば、蛭ヶ小島から伊東までは大それた道程で、而も峻阻な山路である。

蛭ヶ小島といふのは三島から下田街道を大場、原木、北條と行つた所で、葦山城址の北五丁の田圃の中にある。豆相線で修善寺に行けば左手の山際に見える。今では唯小さな石碑が建つて居るのみであるが、頼朝時代には其處が狩野川の川の中にあつたといふ。それが今では鐵道線路の右手を流れて居る。

頼朝が此處から伊東へ通つたものとすれば、浮橋にかゝつて龜石峠を越え、宇佐美に下つたものであらう。

大仁から伊東へ越す柏峠の路も其倍はある。先づ越したとすれば龜石峠でなくてはならぬ。さすれば北條から五里の道程である。如何に戀の爲めとはいへ五里の道を通つたとは思はれない。

蛭ヶ小島から伊東まで

狩野川の中洲

龜石峠が願路

伊東時代の頼朝

祐親の邸

隨分押し強く

番役の留守中

其處で、頼朝は伊東に居た事もあつたと見るのが至當であらう。初め清盛が頼朝を伊豆に流した時、北條時政、伊東祐親の二人に其監視を命じたとあるから、頼朝が東海岸の伊東に居つたといふ事に不思議はない。

伊東は、西に柏峠を負ひ、南に天城山脈の大室山、矢筈山などを控へ、東は相模灣に面し、北は海岸を熱海に通ずる。祐親の屋敷は山手に近き鎌田といふ處にあつたといふ。

頼朝の謫居は、それより南に當つて日暮の森といふのがあつたといふ事である。其處から鳴らすの瀬といふ川を越えて祐親の女の處へ通つたと云ひ傳へられて居る。ノツボの頼朝であるから隨分押し強くやつたであらうと想像される。

殊に頼朝が祐親の女と通じたのは、祐親が京都に祇候して居る其留守中であつた。其頃の番役と言ふのでいもあつたらうか、處が平生仲の悪い繼母が祐親に告げて女と頼朝との關係をあしざまに云ひ罵つた。『ほんとにズウズウしいぢやありませんか』といふやうな事であつたらうと思はれる。



平政子

分別臭い  
戀か

やさしい  
初戀

祐親が頼朝を殺さうと企てた時には其子の祐清がそれを頼朝に告げて北條に落した。時政は早くから頼朝を大器と踏んで心をかけたものと見える。流石の頼朝も伊東の失敗に懲りて一年ばかりは神妙にして居たが、それから三年目といふに、又ぞろ時政の女、政子を手に入れた。尤も伊東の騒ぎが二十七歳といふのであるから、情慾の燃えるやうな時であつたには違ひない。そこへ以て來て例の氣性と來て居るから堪らない。頼朝が政子と通じたのは、北條氏を手に入れて、他日事を擧げるの素地としたものであるといふ人もある。成る程頼朝が此時二十九歳、政子が二十一歳とあつて見れば、相當に思慮分別のついた年頃である。けれども人間の情事は爾う分別ばかりでは行かぬ。後年熊野詣でと稱して京都を威壓した尼將軍も戀といふものは此時が初めてある。唯ハラハラとして胸をといろかすといふやうな可愛らしい處もあつたに相違ない。

頼朝と政子との戀に就いて、安達盛長が艶書をすりかへたといふ話がある。何うも受取れぬ説であるが參考までに述べて置く。

(101) 政子夢を購ふ

平時子

安達盛長  
戀の使に  
立つ

艶書の作  
りかへ

初め頼朝は政子の美貌を知つて之を挑まうとしたけれども伊東の一件を思ひ出して更に其妹の時に戀の鏃を向けた。政子は可なりの美人であつたけれども先妻の子で今の時政夫人とはなさぬ仲であつた。其處で彼は、又ぞろ繼母の嫉妬を買つては大變である。これは標緻はよくないが妹に通じて、時政夫人の怒りを避くるに如かずといふので、餘りどつとはしなかつたが、時子の方に艶書を送つた。

此戀の使に立つたのが安達盛長といふ苦勞人、途中で考へた。佐殿はもともと政子さんの方に覺召があるのだ。それを時子さんの方に言ひ寄るといふのは、伊東の一件から時政夫人の思はくを憚つたものに違ひない。けれどもこれは甚だ不健全なる戀である。今、二人の戀が成立した處で、佐殿に眞情がなければ、到底永くは續くまい。さすればそれが原因となつて何んな騒ぎが初まらないものでも無い。これは一つ考へものだといふので思案の末トウトウ其艶書を作りかへてしまつた。

政子夢を購ふ



時子の夢

即ち時子に宛てたものを、姉の政子に宛てたもの、やうに書きかへてしまつたのである。

話變つて此方は時子、或る夜夢に身峻嶺に登り、日月を袖にし、手に橋の枝もたわ

わに實つたのを携へたと見て覺めた。

あまり不思議な夢であるといふので時子がそれを姉の政子に語る。政子は女ながらも却々の學者で、故事に精しかつたものと見えて直にそれと覺つた。昔、日葉酸媛命は桶を噉ふと夢みて景行天皇を生み奉つた。妹の夢は大層な吉夢である。これは一つ欺いて自分の夢にして仕舞はなければならぬと思つたので、政子は如何にも親切らしく説き出した。

政子夢を占ふ

凶夢は七月人に語らず

『それはまことに恐る可きの凶夢とこそ存じ候へ。われら曾て吉夢は三年人に告げず、凶夢は七月人に語るなと聞き及び侍りぬ。然るに御身既にわれらに語り給へり。神罰立處に至るべし。恐るべき事にこそ』

と。時子は驚いて了つた。それは大變である。大祓をしなければならぬといふので

夢に移轉の法あり

騒ぎ立てるのを徐ろに止めて、

『さらばよ、夢に移轉の法といふものあり。人に賣り給へや』

と。妹は欺かるゝとは知らず、

『夢を賣れとや。目に観る可からず、手に取る可からず、何人が肯んじて之を買ひ申す可き』

と途方に暮れて歎息する。政子は妹の顔をヂツと眺めて居たが、やゝありていふうや、

『妹よ、さな心をなやまし給ひそ。御身の夢はわれら身に引きうけて買ひ取り參らせん』

と。妹は大にあやぶんだ。

『姉君、禍の御身に及ぶを、如何にし給ふぞ』

『買ふ者に咎なくして賣る者禍を免る。これを移轉の法とは申し侍るなり。さな心にな掛け給ひそ』

買ふ者に咎なく賣る者禍を免る



といふので妹の前に取り出したのが唐鏡一枚に衣一襲。唐鏡は北條家に傳はる重寶で、時政が政子を愛するの餘り與へたものである。

時子は意外の収入に雀躍して喜んだ。今夜も悪い夢を見たいものだと思つたか何うかは知らないが、鏡一つと衣一襲で征夷大將軍の御臺所といふ大そうな地位を譲つてしまつた譯である。

夢を買つた其晩政子は又夢に白鳩が黄金の文函を銜へ來ると見てさめた。見ると枕頭に安達盛長の届けた頼朝の艶書がある。政子もかねて意中に描いた事のある人であるから嬉しい返事を認める。頼朝は意外なる姉の返書に驚いたがもとより悪からぬ政子の事であるから其ままして情を通ずるに至つたといふのが傳説の概略である。

此話は勿論あまり深く信ずる譯には行かない、唯、これによつて政子の處女時代が窺はれる。彼女が、北條の片田舎に育ちながら、書を読み文を習うて種々な故事に通じて居たこと。其思慮分別がすでに尋常婦人の域を脱した居たことなどを思ふには屈強の材料である。

大それた地位

枕頭に艶書

政子故事に通ず

(1011) 心からのハイカラ女

支那の學問が流行した當初に於いては婦人も争うて、書を読み、文を綴り、私に當世の新知識を以て自ら持するものが多かつたのである。婦人の癖に學問を鼻にかけるのは生意氣であるなどといふ考は大化の新制以後、平安朝を通じてまだ社會に行はれて居なかつた。

紫式部が兄の側に座して史記を習つたといふこと。爲義の妻が九つから十五になるまで十八日毎に三十卷の普門品を読み、それから毎月法華經三部を讀んだなどいふことは、此時代、『女の學問』に障壁のなかつた事を證し得てあまりあるものである。

伊豆は田舎であるといつても、三島から北條あたりまでは、狩野川の平野が開けて、東海道との交通も極めて自由である。先年、天城山を越えて下田に旅した事があるが、山の南と北ではまるで人情風俗が違つて居る。政子は時政の長女として京都の事情にも通じ、學問もよく出來て先づは其頃のハイカラといふ方であつたに違ひない。たと

女の學問に障壁なし

爲義の妻

當時のハイカラ娘



平兼隆と  
婚約

へ流人とはいへ、頼朝は源氏の正統である。其人物を察し、其將來を推し量つて、それと百年を契つたのは無學な田舎娘のよくなし得る所でない。  
頼朝が政子と通じた時、時政はヤハリ京都の番役に出勤して留居中であつた。處が任期満ちて伊豆に歸る途中、時政は目代平兼隆と行をともしして、政子を兼隆に嫁する約束を結んでしまつた。平兼隆は清盛と遠縁の親類であつたので、田舎では却勢力があつた。

留守中の  
出来事

當節でいへば、富豪の親類に女を嫁して、自分の地位を固めようとしたやうな譯である。處が歸つて事情を聴いて見ると政子は自分の留守中に流人の頼朝と通じて却々熱い仲との事である。

世が世な  
れば

時政も頼朝の人物は豫て見抜いて居る。世が世なれば喜んで添はせてもやるべき仲間れど、如何にせん兼隆と固い約束をした後である。若し此事が兼隆の耳に入つたらばそれこそ大變である。彼は女をとられた遺恨と、約束を破られた口惜しまぎれにキツと此事を京都に密告するに相違ない。

政子の出  
奔

告訴されては北條家の破滅である。これは何でも知らぬ振で縁談をすゝめるに限ると決心した父の時政、政子の煩悶を知りながら、それに構はず結婚の事を運んだ。  
處が此方は政子、進退谷まつて、一夜ひそかに家を出で、雨を冒して山中に遁れ其由を頼朝に通じた。頼朝が靜の舞を見て大に不興であつて時、御簾の中で政子が昔の話を持ち出した。『暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎて君の所に至る』というたのは此時の事であらう。彼女は心からの大ハイカラであつた。

京都のお  
嬢さん  
田舎のお  
嬢さん

第八十四項に述べた櫻町中納言成範の妻(清盛の女)は左大臣兼雅に横取りをされたのであるが、成範とは泣きの涙で別れる程に飽きも飽かれもせぬ仲であつた。而も夫成範が『人の戀を果さねば、繫念無量劫の罪を受ける』と御經の文句を引いて慰めたのでトウトウ承諾して別れたのである。これとかれとを比較すると京女と鎌倉女との差別がよく分る。

兼隆政子  
を捜索す

其處で頼朝も政子を訪ねて俱に山中に潜んで居た。平兼隆は政子が出して行衛知れずになつたと聞いて人を派して大に捜索したけれども更に分らない。時政も人を派



政子伊豆  
止に潜む

して政子の行衛を捜した。然しこれは、兼隆への申譯ばかりで、實は時政が承知で落してやつたのかも知れない。前後の事情を考へると何うも爾うらしい。治承四年、頼朝が兵を石橋山にあげた時、政子は伊豆山に走つてひそかに其情人の安否を案じ暮して居た。『東鑑』に走湯山(伊豆山)伊豆權現の尼、法音は政子の經師なりとあるのは、此時の關係であらうか。

政子の長  
女

頼朝との間に、頼家、實朝の二子と他に二女が生れた。義仲の子義高に嫁したのは其内の長女であつたらうか。それとも庶出であつたらうか、義高が殺されて後、政子が女のヒステリーに手古摺つたとあるから、先づ其長女と見るべきであらう。

(一〇三) 政子の嫉妬

嫉妬の辯

『大日本史』には、『政子性妬忌なり、頼朝之を畏憚す』とある。嫉妬といふと徳川時代の習慣から何となく私達の耳に異様な響を齎すが、大化の新制以前にあつては女とし

平安朝婦  
人の嫉妬

て嫉妬の情を現はさないものはなかつたやうである。

平安朝に入つては、餘り、嫉妬といふことを聞かなかつた。訛傳ではあらうが、業平の妻は胸の上に水瓶を載せて嫉妬の情を忍んだといふ。これは、それだけ平安朝の女が、物件扱ひをされて、人格を認められなかつたといふ事を證するものである。

嫉妬は悪  
徳に非ず

平安朝の女は父權の命ずるがまゝに嫁して其境遇に甘んじた。風のまゝに靡いて強者に其操をまかせた。彼等は既に守る可き操を持たなかつた。守る可き操を持たない女に、夫の浮氣を嫉妬すべき力があるであらうか。(第六十七項参照)斯く觀來れば嫉妬必ずしも悪徳ではない。嫉妬は女が自分の操を主張するのである。敦厚なる田舎の婦人には、大化の新制以前に日本の婦人が所有した激しい氣質がまだ其まゝに存在したのである。猛烈なる政子の嫉妬は彼女の生涯に幾段の光彩を添へて居る。

義經の妻  
と政子

同じ兄弟でも義經の妻、河越氏は義經の浮氣をちつとも嫉妬しなかつたやうである。頼朝も義經に負けず、劣らずの好色家であつたが、其浮氣が義經ほど人の目に立たな



龜の前

いのは政子の嫉妬が激しかつた結果であらう。頼朝の嬖妾數ある中に、良橋太郎の息女、龜の前は美人にして心ばへも温良であつたとある。養和元年、頼朝三十三歳の春から出来あつて、大分政子に氣をもませた者である。女は勿論十八九の花盛りといふ時であつたらうと思はれる。

頼朝は龜の前を其寵臣、伏見冠者廣綱の宅に忍ばせ、時々通つては楽しんで居たが、此事いつしか、政子夫人の知る所となつて大騒ぎとなつた。

牧三郎の夜襲  
高師直の焼打

政子夫人は牧三郎宗親といふものに云ひつけ、廣綱の宅を破却させた。最もこの廣綱といふ男は心さまのよくない奴であつたから、政子が廣綱の宅を打毀させたのは、強ち、焼餅沙汰ばかりでもあるまい。如何に鎌倉が女房天下であつたかは知らないが、嫉妬から自分の亭主が匿まつて置く妾の家を打毀させるといふやうな事もあるまい。高師直は、大納言藤原冬信が自分の女を挑んだといふ口惜しまぎれに冬信の家を焼拂つた。政子と師直と一處にするのは酷い。其後、頼朝が、廣綱を遠江に配流した處を見ると何うも嫉妬ばかりではない。政子が何かで廣綱を憎んで居たものと見える。

廣綱遁走

伏見冠者廣綱も不意の打毀しに狼狽し龜の前を伴うて、大和多五郎義久の鎧摺の宅に逃げ込んだ。これが壽永元年十一月十日の事である。

牧三郎を供に

同月十二日、頼朝は、遊興に事よせて鎧摺まで出かけ、義久の亭を訪ねて龜の前と逢うた。其時頼朝が供に召し連れたのが前夜打毀しの大將をつとめた牧三郎であつた。頼朝も随分罪な事をする。

敵同志の對決

頼朝は龜の前と暫くは型の如く人を遠ざけ何やら秘密の談合に及んだ。思ふに茲では頼朝も一昨夜の事で散々に油を絞られたものであらう。泣いたり、笑つたりして用件が済むと、それでは一つ牧を苛めてやらうといふので改めて供につれた三郎と、伏見冠者とを一室に招き顔を突き合はさせた。

一人は前夜の打毀しの大將、一人は打毀されの大將である。暫らくは兩人とも眼と眼を合せて睨み合ひの姿であつたが、やがて頼朝口を開き。  
『いかに兩人、一昨夜の騒動は何事なりしぞ、余が面前に於いて對決致せ』  
と云はれて三郎、冷汗をビッシヨリ、頭を大地にすり着けて何ともハヤ、何ともハヤ



三郎閉口  
頼首

といふ始末であつた。

此時頼朝が三郎にいうた言が面白い。

(一〇四) 三郎取締めらる

朝頼は牧三郎が頭を大地に摺りつけて詫び入るさまを見て、

『いかに三郎、其方が御臺の命を重んじたるは、寔に以て神妙の至り、常には何事もかくありたきものぞ、去りながら一昨夜の件は、事余が體面にかゝれり。一應余も告げて内意を問ふ可きに突然恥辱を與へたるは奇怪千萬なり』

と、眞綿で首を締めるやうな理窟せめに三郎一言の答へもなく、唯冷汗をかいてうづくまる。頼朝も茲に至つては堪へ堪へし鬱憤が一時に發したものと見え、ツカツカと三郎の側へ寄ると手づから三郎の髻を執つてブツツリと切り放つた。

頼朝といふ人は常に、君臣の序といふことを重んじた。義經が鎌倉の許可を得ずし

頼朝大に  
三郎をた  
しなむ

三郎髻を  
切らる

頼朝の筆  
法

何處まで  
も理窟ぞ

證據に  
泊

て朝廷の叙任を受けた時も同じ筆法で行つた。法皇が義經に位階を授け給ふのは、もとより大權の存する所であるが、義經が鎌倉に一應の相談もなく之を受けるといふのは順序が違ふといふのである。

政子が嫉妬するのは女として當りまへである。又、三郎が御臺所の命令を遵奉したのも神妙である。唯、事が頼朝の名譽に關する以上、一應頼朝に相談すべき筈であるといふのであるから何處までも理窟せめである。頼朝といふ人は始終此手で群臣を統御した。

政子の嫉妬は天下晴れての嫉妬であつた。頼朝も政子の嫉妬をかれこれとは云はなかつた。政子も自分の權利の如くにして頼朝の浮氣を嫉妬した。

牧三郎は散々油を絞られて、面目なしと其場から遁走して仕舞つた。頼朝は政子の怒の只ならぬを知りつゝ、も其夜は鏡摺の亭に一泊して、龜の前と長き冬の夜を語りあかした。『妾ほんとに驚いてよ』と一昨夜の打毀しは、繰り返し繰返し寐物語の種となつた事であらう。

三郎取締めらる



取し悪い  
荒馬

時政の憤  
怒

龜の前小  
坪に匿は  
る

政子が廣綱の邸を打毀した翌々日、落付き拂つて笠摺に一泊した頼朝の度胸は大したもののである、此呼吸があつたればこそ、彼は政子といふ却々の荒馬をたやすく馭して、兎にも角にも閨房の醜態を現はさずに行く事が出来たのである。

處がこれによつて、騒ぎは益々火の手を高めて來た。政子の父北條時政は、三郎の御勘氣は以ての外のことなり。彼は御臺所の命をそのまゝに奉じたるものなりとあつて俄に豆州に進發した。

龜の前は之を聞いて氣が氣でない。妾の事から、天下の騒動が起つてはといふので頼朝に別れ話を持ち出した。之も或は口説の方略であつたかは知らないか、頼朝は笑つて取り合はなかつた。爾うしてこんどは龜の前を小中太光家の小坪の邸に住まはせ、寵幸日に増し盛んであつたとある。

頼朝は斯くの如くにして、亭主の亭主たる權威を示すと同時に政子と仲の悪い伏見冠者廣綱を遠江に配流したので漸と政子の怒もとけ一件も先づは無事に落着いたといふ。喧嘩兩成敗といふが、馬鹿を見たのが三郎と廣綱とである。此時政子正に二十六

時長の  
女の

歳。

此外に常陸介時長の女も頼朝の寵愛を受けて居た。これは時長の女が鎌倉の殿中に祇候したのを、頼朝が例の癖で其初々しい姿にムラムラと野心を起し、トウトウ物にしてしまつた。

龜の前と同じく長門江七景遠が濱の邸に忍ばせて時々通つたものである。文治元年二月二十六日に男子を生せた。これも政子夫人には大の内證事であつたが、間もなく覺られて大騒動となつたとある。

其他大進局、これは伊達念西の息女であつて、京都に住ひ、伊勢國に采邑を給せられて居た。大進局も頼朝の子を生むで居る。なほ此ほかに頼朝が政子の眼を忍んで密通した女は幾らもある。就中、甚しいのが新田義重の女を挑むたことである。

新田義重の女は、即ち朝頼の兄悪源太義平の後室である。頼朝が其美貌に思ひを焦して、屢艷書を送つたけれども義重の女は頑として應じなかつた。父義重も政子の思はくを憚つて、急に之を帥六郎に嫁したといふ。政子夫人の嫉妬が如何に甚しかつ

兄義平  
の後室  
と通ず

大進局



たかといふことはこれで分る。

(一〇五) 頼家と政子

人間として偉らかし  
つた平政子

母として  
の政子

これからが、彌政子活躍の舞臺である。  
抑も嫉妬の如きは、東國婦人の男まさりな氣象が一端に現はれたものであつて、政子の特色は、婦人として寧ろ街情の事以外にあつた。政子は日本の婦人史に於いて神功皇后の後に坐する人格である。彼女の能力は婦人といふよりも寧ろ人間として發達して居た。平安朝の所謂才媛なるもの、能力が、畸形的に發達して居たのとは少しく其選を異にして居る。

頼家が幼少の頃、頼朝に隨つて、富士の裾野に獵し、見事に一疋の鹿を射殺した事がある。すると頼朝は大に喜んで裾原景高を鎌倉に遣し政子に此旨を傳へよとあつた。其處で景高は急ぎ鎌倉に赴いて政子に頼家の手柄話を傳へた。御臺所御機嫌斜なりと

景高大に  
愧づ

平民的な  
る教育

尼將軍の  
名茲に始

當て込んだ景高其以ての外の氣色に少からず驚いた。

『いかに景高、頼家いとけなしと雖、將家の子なり。野外に獵して一つの鹿を獲たりといふに何程の事あらんや。さばかりの事に態々使を立て給ふとは心得難き君の御心かな』

と。政子は征夷大將軍の御臺所となつてなほ、伊豆の田舎女の心を失はなかつたのである。彼は良き妻であつたと同時にまたよき母であつた。

彼は其實子頼家を將軍家の坊ちやんとして育て上げる事を欲しなかつたのである。彼の教育は飽くまでも平民的であつた。政子の言に接して景高大に愧ぢたとあるが愧ぢたものは景高よりも巨頭將軍其人ではなかつたらうか。

正治元年正月頼朝病を以て薨じ、長子頼家將軍の職を襲ぐ、時に年十八。畠山重忠が頼朝の遺命を承けて之を輔衛した。政子は同時に薙髮して尼となり、子頼家に代つて自ら政を行ふた。

政子の父時政は源家の元勳なれば頼朝の信任も篤く人も之を尊重した。政子が幕政

頼家と政子



幕府の参  
政官十三  
人

頼家狂噪

將軍の職  
權を二分  
せんとす

を司るに及んでは、其權勢を振つて專恣橫暴を極めた。時政の外に幕府の政治に參與したものが、其子義時、大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企義員、安達盛長、足立遠元、梶原景時、藤原行政の十三人であつたが、大小の事、一に時政と政子とによつて決した。時政に專横を許して果ては源家を亡ぼすに至つたのは如何にも政子の罪のやうではあるが、又一方から考へると、頼朝の死後幼弱な頼家を擁して、餓虎のやうな諸大名を押へたものは一に政子の力である。頼家は狂噪の性であつた。職に在りながら逸樂を事として政事を観ない。建仁三年八月、其病篤きに際し、政子は時政と謀つて、頼朝の遺命を矯め、頼家の職を解いて之を退隱せしめた。

頼家の職を解くと同時に政子は征夷大將軍の職權を二分して、關西三十八箇國の地頭職を頼朝の次男實朝に譲り總守護職と關東二十八箇國の地頭職とを頼家の一子一幡に譲らうとした。此時に一幡が六歳、實朝が十歳であつた。處が此案は一幡の外祖たる比企能員が大反對であつた。茲に於いてか、比企氏と北

比企能  
員の女

條氏との争ひが起つた。能員は職權二分の事を耳にすると同時に、其女、即ち一幡の母をして、頼家に云はしめた。

『今、地頭の職を割きて千幡(實朝)に傳ふるは、叔姪相並びて磐石の固きに似たれども、威權兩屬し、地日一門の争亂を招くこと必せり。其機に乗じて家督を奪はんものは必ず北條氏ならむ。之を除くに非ずむば、君安んぞ枕を高くして臥するを得む』

と。頼家も大に驚いて能員を病床に召し北條氏を滅ぼさんことを謀つた。處が政子はこれを聞き知つて早くも時政に告げたので時政は之を大江廣元に告げ天野遠景等に命じて能員を誘殺せしめた。

能員の  
族滅ぶ

能員の子宗員は一族郎等を驅り集めて一幡を擁し、小御所によつて北條氏に叛いた。

建仁八年九月政子は義時と、畠山重忠とに命じて宗員を小御所に誅し、頼家を伊豆の修善寺に幽閉した。宗員の陣中にあつた一幡は、宗員と共に死んで茲に頼家の血統



は絶えた。

(一〇六) 牧の方と政子

頼家修善寺に幽せらる

恐ろしい運命の暗示

初め、比企宗員と一幡とが小御所で自殺したと聞いた、頼家は、急に和田義盛と、仁田忠常とを召して事を挙げようとしたが、此時遅く時政の兵は頼家を取りまいてゐた。頼家は政子の命により、髪を剃つて修善寺に隠退しなければならなかつた。修善寺は頼家にとつて決して縁起の好い所ではなかつた。母の政子と仲の悪かつた叔父の範頼も此處で無念の最後を遂げた。其桂川の溪に流した血が未だ乾かない修善寺、其處に幽閉せられた頼家は或る暗い、恐ろしい運命を暗示せられたのも同じことである。

果然、元久元年の七月、鎌倉の兵は桂川の溪をさはがして、源家の血は再び修善寺の地を染めた。

十二歳の征夷大將軍

時政の後妻牧氏

憎む可き罪惡

茲に於いてか頼朝の子としては、唯一人の實朝が残つた。之より先實朝は建仁三年の八月を以て征夷大將軍に補せられた。年甫めて十二歳とある。

時政の勢力は此時が正に其絶頂であつた。

時政は幾度か其妻をかへた。最後に妻つたのが牧氏といふので、時政とは父子程に年が違ふ。頗るの美人であつた。時政も可なり先の見える男であつたが、老ては麒麟も驚馬の如しで、女のやうな女房には散々小突き廻されたものと見える。

時政の後妻牧氏性奸黠なりとあるが、奸黠といふ程の女であつたとは思はれぬ。ただ成り上り者の根性をよく現はした、世間並の養ひ難き女であつたに相違ない。時政の皺面を下から覗いて、『もし貴方や』といふやうな事でチヨイチヨイ小細工をした。が、唯、畠山重忠を殺させた事だけは憎みてもあまりある所爲であつた。

平賀朝雅と、畠山重忠とは、同じく時政の女婿であつたけれども、重忠の妻は時政の先妻の女で、牧氏の出ではなかつた。處が平賀朝雅の方は、牧の方の女であつた。然るに重忠の一子重保と平賀朝雅とが京都在番の時一杯機嫌で喧嘩をした。朝雅は

牧の方と政子



牧氏重忠を諷す

義時父を諷す

これを根に持つて、女房の手から重忠父子の事を牧の方に讒した。牧の方も可愛い女のいふことであるから、おのれ悪き畠山父子といふので、時政に大變なことを吹き込んだ。

時政も重忠の實力を煙たく思ふて居る矢先、牧氏の讒言をよき機會として重忠を除かうと決心した。彼の一子義時、父を諷めて、

『重忠は故右大將に仕へて忠直の聞え高く、嗣君を補佐して衆望あり。能員の亂には我に屬して彼を攻む。今何の怨みありて我に背かんや。其舊功を捨て、彼を殺さば天下大人を何とか云はん、其虚實を審かにして後之を圖るも未だ遲きに非ざる可し』

といふ。流石の時政も重忠の誠忠は之を認めて居たので、答ふるに言もなく唯默然と決し兼ねて居た。

牧氏義時を壓す

すると義時には繼母の牧の方が側から口を出した。『いかに義時、重忠に異圖ある事は母よくこれを知れり。今汝の重忠を庇ふはなさぬ』

重忠殺さる

仲として此母を輕んずるか』

と。恐ろしい權幕で義時を睨みつけた。義時も今此女にさからふては何んな事になるかも知れぬと思つたので、其儘重忠誅討の議に同意した。

元久二年八月、誠忠無二の重忠は、武藏二股川の戦に、恨を吞んで悲壯なる最後を遂げた。

女の舌一枚

牧の方は、舌一枚で關東第一の豪傑と呼ばれた畠山重忠を滅ぼしたが、それは唯、時政の膝にもたれてした小さい悪戯である。若し時政に重忠の威望實力を嫉むの心になかつたなれば事は成就しなかつたのである。何となれば重忠に二心のないことは、時政も初めから認めて居た。

流石は巨頭將軍の未亡人

其處へ行くと同じ女でも政子の方は偉かつた。牧の方など、比べるとテンデ役者が違つて居た。政子が牧氏のすることを凝然と見て居て、最後にボンと一つ大鐵槌を喰はした手際、再び、女の淺はかな小智慧を振り廻すことの出来ないようにして退けた手際などは、流石に巨頭將軍の未亡人、天下の尼將軍たるに耻ぢなかつた。



(一〇七) 政子京都を脅威す

女の通癖

政子は牧氏のする事を黙つて見て居た。牧氏は重忠を亡ぼして増長した。時政を煽りさへすれば何事でも出来ると、牧氏は時政の力を過信して、政子の存在を忘れた。自分の夫の力を大きく見過ぎるのが世間並の女の通癖である。

牧氏は圖に乗つて實朝の弑逆を企てた。

時政は再び牧氏の言に魅せられた。彼は其邸内に養つて置いた實朝を弑して、女婿平賀朝雅を立てんとしたのである。朝雅は源氏の遠縁であつた。

牧氏の野心

政子の一撃

然しながら政子は早くも此事を聞き出した。小山宗政、三浦義村は政子の命を受けて直に實朝を義時の家に迎へた。時政が聚めた兵士は皆去つて實朝に附いた。疾風迅雷耳朶を蔽ふに暇なき政子の早業に時政は唯茫然として策の出づる所を知らざる有様であつた。

時政は窘蹙して剃髪した。政子は一撃の下に牧氏の小策を粉碎した。時政と牧氏と

時政再び起つ能は

は再び起つ能はざる迄に窘迫されて伊豆に幽閉された。

牧氏の夢は醒めた。彼女は初めて政子の實力を知ると同時に、時政の權勢が政子の陰影に過ぎなかつた事を知つた。

牧氏の手が、自分の利害圏内に達するや今まで黙して傍觀的態度を執つて居た政子は猛然として一撃を時政と牧氏の頭上に加へたのである。時に元久二年、閏七月とある。

朝雅殺さ

義時が執權となつて、朝雅は京都に殺された。

重忠の殺されるのを冷然として見流した政子はまた、和田合戦をも冷然として見流した。重忠死し、義盛斃れて、故右大將の恩顧を思ふ大名は全く鎌倉に其跡を絶つた。天下は靡然として北條氏の前に俯伏せざるを得なかつた。

鎌倉の陸軍大臣殺さる

義盛は鎌倉の陸軍大臣であつた。義盛死して義時は鎌倉の總理大臣兼陸軍大臣となつた。

實朝は長じて和歌を善くし、温良閑雅の性、衆望自ら此人に歸した。私に北條氏

政子京都を脅威す



實朝孤立

が權力を恣にして朝廷を輕んじ幕府を亂るのを憤つたけれども、此時源氏の忠臣は悉く死し、血統も己れ一人となつてまた如何ともする事が出来なかつた。建保四年六月、實朝中納言に任せられ七月、左近衛中將をかね、越えて六年正月更に權大納言に任せられた。

政子の熊野詣で

此年の二月、政子は霞の中に鎌倉を立ち出で、熊野詣の道を急いだ。此時彼女既に六十三歳の高齢であつた。其頑健察すべきである。思ふに此頃、京都に於いては、上皇、主上ともに北條氏の專横を惡ませ給ひ、機會にあらば事を擧げんとすの御企てもあり。不穩の狀は早くも鎌倉の耳に達したものと見える。

政子拜謁を辭す

政子の熊野詣では何か其邊の政治的意味を含むで居たものに相違ない。先づ以て今日の示威運動とでもいふのであらうか。戰鬪準備の爲に鎌倉の尼御臺が熊野詣でと稱して京都の地勢探查に來たといふやうな評判も高まつたものであらう。四月、政子が京都に入ると、朝廷は迎へて從三位を授け、次いで上皇はこれを仙洞に召されたけれども、政子は固く辭み奉つた。

尼將軍先見の明

『邊鄙の老尼、禮にならず。龍顏に咫尺するは恐れ多し』  
といふて參内しない。これ明かに政子が京都を脅威したものであつた。彼女の眼には既に承久の亂が映じて居たのである。六十三歳の老軀を提げて天下の大亂を未然に防がうとした尼將軍の見識と氣力とは眞に驚くべきものである。

實朝京都に親しむ

建保六年三月、實朝は左大將に任せられ、十月内大臣となり、十二月更に右大臣に進んだ。同時に上皇は車服を實朝に賜ひ、寵遇大に北條氏の眼を聳動せしむるものがあつた。

實朝公曉に刺殺せらる

翌年、承久と改元した。正月、實朝拜賀の式を行はんとして、八幡宮に詣で、頼家の遺孤、公曉の手に刺し殺されて果てた。二十七日の午後五時頃であつた。公曉は實朝を父頼家の仇として付け覗つて居たのである。此時政子は何んな心持であつたか。豪傑とはいへながら、女として、現在血を分けた我が子が一人、二人と滅んで行くのを何と見たか。

政子京都を脅威す



(一〇八) 實朝と政子

政治家としての政子

政子は流石に頼朝の御臺所であつた。女ながらも、彼女には彼女で天下を治むる一定の標準器があつた。其標準器をもつて天下に臨む上に於いて彼女は其間に決して一點の私情をも挟まなかつた。

鎌倉時代の武士道

義朝でも頼朝でも天下の爲には骨肉の血を見る事は何とも思はない大將であつた。それがまた彼等の時代に於ける武士道の精髓であつた。政子がかゝる時代に人となつて、斯かる教育の下に鍛錬された女傑である。然しながら彼女は何といふても女である。現在我子が人の手にかゝつて殺されるのを座視することは如何にも苦痛であつたに相違ない。而も、彼女は冷然として頼家の滅亡を座視し、今また實朝の横死を黙視した。頼朝が偏狭にして人の功を妬むだといふ世間の評を當れりとすれば、政子は無情冷酷自家の權勢の爲には現在我子の殺されるのをも座視して顧みなかつたといふことも出来る。

政子は無情冷酷の女

情深い政子の半面

然しながら私を以て見れば、政子は決して無情冷酷な人ではない。静御前をいたはつて厚く待遇したのも政子である。微妙の孝心に動かされて、奥州の果てまで人を派したのも政子である。政子が頼朝の心をなだめて、弱き者をいたはつた例は外にまだ幾らもある。

政子の實朝に對する情愛

頼家が殺されたのは仕方がない。狂噪にして逸樂に耽り、諸大名の心を失つた上に尼御臺の政策に反對して和田、仁田の諸將を招いたのは彼を殺さなければならぬ十分の理由であつた。彼は實朝を惡むで居なかつた。頼家の職を解いた時に、關西三十八箇國の地頭職を實朝に割譲しようとしたのも、母としての政子の情であつた。

烏山重忠の滅亡は黙つて見て見たが牧の方の手が實朝の上に加へられんとするや政子は奮然として起つた。時政と牧の方とは政子の一撃に遇つて伊豆に蟄居しなければならぬ事となつた。政子は飽くまでも實朝の母であつた。

其情深い母が何うして實朝の殺されるのを坐視したか。彼女は全く實朝の殺されるのを知らなかつたか。實朝が八幡宮參拜のかどでに詠じた歌といふのが世に傳はつて

何故に實朝の死を坐視したか



主な宿

居る。

出ていなば主な宿となりぬとも

軒端の梅よはるをわするな

これによつて見ると實朝は既に死を覚悟して居たもの、如く見える。實朝暗殺の陰謀が當人の耳に達する程、周圍の情勢が動いて居たものとすれば、それが政子の耳に入らないといふ理由はない。政子と義時と同心であつたかは疑問とするも、政子は、明かに實朝の死を座視したのである。

實朝と義時の反目

よつて當時の事情を考へて見るに實朝と政子との間には十分に母子の情愛があつたらしい。又政子が弟義時を信用したことはこれも夥しいものであつたらしい。處が實朝は時政、義時ともに北條氏が大嫌ひであつた。實朝と義時との反目に就いては政子が板ばさみといふ苦しい地位にあつた。

和田合戦

實朝と義時との軋轢は既に和田合戦に於いてよく現はれて居る。泉親衡が建保元年の二月、頼家の子千壽丸を擁して信濃に兵を擧げた。和田義盛の子、義直義重及び姪

實朝義盛の二子を釋す

の胤長がこれに加擔した。これが和田合戦の起りであつた。

處が事露現に及んで一味徒黨のものが悉く捕縛となつた時和田義盛の二子義直、義重を赦したものは實朝であつた。更に義盛が同族九十餘人と共に胤長の赦免を幕府に強請した時、極力之を妨げたものは義時であつた。

義盛が激怒して將に兵を擧げんとした時、實朝が徐に慰諭すると義盛がいうた。

『吾、何ぞ君を怨み奉るものならんや。唯義時の專横を憤るのみ』

義盛義時を怨む

と。和田合戦に於いて實朝は寧ろ和田黨であつた。和田氏が滅亡して、義時が兵馬の權を掌握するに至り、實朝は全く鎌倉の政治に絶望した。

建保九年、實朝が宋の佛工、陳和卿に従つて彼の地に赴かんとし、従行六十餘人を

實朝の不平

定め由井ヶ濱に巨船を動かしたのも、實は北條氏に對する不平のあまりであつたらうと思はれる。此頃から義時と實朝との仲は益々悪くなつて行つた。



實朝京都に接近す

實朝は其義時に對する憎惡の念が高まると同時に京都に接近した。

山はさけ海はあせなん世なりとも

きみに二心われあらめやも

彼は義時の專横を惡むのあまり、父、頼朝が遺した鎌倉幕府の憲法に抵觸することを顧みなかつたのである。更に其憲法の前には何もの犠牲をも惜まざる女傑政子の存在を忘れたのである。

頼朝の大禁物

建保四年六月實朝が中納言に任せられ、七月次いで左近衛中將を兼ねた時、政子と義時の眼は異様にかゝやいた。朝官を受ける事は頼朝の大禁物とした所で、幕府の憲法の最も主要なる事項であつた。大江廣元は、政子と義時との意を代表して實朝に其辭任をすゝめた。

『先將軍官爵を進めらるゝ毎に必ず之を固辭し給へり。其子孫の爲に慮り給ふ

鎌倉の憲法に抵觸した實朝

皮肉に酬ゆるに皮肉

こと亦深かりき。今將軍年少にして輒ち顯官に躋らるゝは盛滿の懼なきを得んや』と。盛滿の懼れなきを得んやなどは随分手強い談判であつた。處が實朝のこれに對する答といふのが、又頗る皮肉タツブリなものであつた。

『誠に然り。但し方今源氏の統流絶ゆるに垂んとせり。故に我顯榮を極めて家名を揚げんと欲するのみ』

政子と實朝との情誼絶ゆ

などは之も随分きびしい挨拶であつた。『何うせ頼家兄さんのやうに遠からず其邊の人にやられるのだ』というたも同じことである。

茲に於いてか、政子と實朝との愛情は斷絶した。二人の間にはもう近寄つて握手する事の出来ない溝が作られた。政子は決して無情冷酷な女ではなかつた。然しながら彼女は詩人實朝よりも更に大なる政治家であつた。彼女は故將軍の政治の大本を最もよく飲み込んだものである。故將軍が其政治の大本に觸れた義經、範頼を殺すに躊躇しなかつた如く、彼女はまた鎌倉の憲法を擁護せんが爲に其子頼家、實朝の滅亡を坐視したのである。政子は立派な政治家であつた。

鎌倉の憲法を擁護した政子



公曉と義時

公曉は頼家の子であつて、其時八幡宮の別當を勤めて居た。其實朝を殺したのは義時の使喉に出でたといふ。義時と政子との間に或る秘密の交渉があつたか、否かは賢明なる讀者諸君の判断に任せる事とする。

頼經を迎へて將軍とす

源氏の正統は茲に絶えたけれども北條氏はもと陪臣の身であるから、將軍の職を繼ぐ可きでない。承久元年二月義時政子協議の上、諸將と連署して皇子を鎌倉に迎へ奉らんとしたけれども御鳥羽上皇の反對にあつて果さなかつた。其處で止むを得ず、攝政藤原道家の三子頼經を迎へて將軍とした。頼經は頼朝の遠縁であつて、此時二歳とある。政子此時六十三、幕府の庶務盡く其手によつて決す。時人稱して尼將軍といつた。

菊龜姫

承久の亂は幕府と朝廷とが、天下の莊園私領を支配するの權利を争つたものであつた。爾うして其破裂の導火は鎌倉幕府が後鳥羽上皇の召に應じたる信濃の武士仁科盛遠の食邑を沒收したこと、上皇の寵姫龜菊の領家を鎌倉の地頭が忽諸にしたことなどであつた。

政子諸將を召集す

朝廷は承久三年五月を以て關東に對する宣戰を布告した。これと同時に鎌倉に於いては尼將軍政子が諸將を幕府に召集し、安達景盛を以て其命を傳へしめた。

政子の宣戰

『故右大將、平氏を滅し給ひしより關東の將士、其恩澤を蒙らざる者なし。往昔諸國の武士、京都勤番を畢へて歸國する時は、皆其用度を費やし盡して何れも窮乏に陥らざるものなかりき。故右大將之を憐み、三年の期限を縮めて六ヶ月とし給ひき。これより諸國の武士再生の恩に感せざるものなし。凡そこれらの恩澤は今日の如き危急の日あるを慮りて施されし所なり。然れども院宣を承はりて京方に參らんと欲する輩は宜しく其意に任ず可し』

巧に利害を説く

と。味うて見ると却々面白い諭告である。頼朝の舊恩を述べたのは諸將の情義に懇へて彼等をホロリとさせたのである。京都勤番の例を引いたのは事の利害を説いたので、武士は何うしても鎌倉幕府をもちたてなければ損であるといふことを論じたものである。



政子巧に  
群雄を駕  
御す

諸將何れも死を以て故右大將の恩に報い奉る可しと誓つた。政子は立派な政治家であつた。彼女は巧に經濟問題を提げて武將を説き伏せたのである。

### (一一〇) 承久の亂と政子

軍議二に  
分る

鎌倉の軍議が二つに分れた。即ち一派は足柄、箱根に要して京軍を待たんといひ、一派は進んで京都を占領すべしと説いた。これを裁決して十九萬の大兵を京都に進發せしめたものはわが尼將軍政子其人であつた。

箱根要撃  
の是非

箱根要撃の議を提出したものは、三浦義村、安達景盛の諸將であつた、之に反對したものは大江廣元である。『衆心一ならずば險に據るも何の益かあらむ、空しく時日を費さば師老い衆沮み、適以て敗を取るべきのみ、今日の策成敗を天に委せ、兵を進めて直に京師を犯すに

政子決を  
とる

如かず』

と。政子がこれを裁決していうた。

『廣元の議可なり、宜しく武藏の兵を待ちて途に上る可し』

と。直に兵を諸國に徴した。政子は往年熊野詣でと稱して京都の情勢を察して居る勝利は既に彼女の胸中にあつて存したのである。處が、異論は再び諸將の間に紛々として起つた。更に廣元のいふやう、

政子の胸  
中既に勝  
算あり

『異論の起るは徒に武藏の兵を待てるが故なり。今夜武州殿（北條泰時）單騎にて途に上る可し。衆必ず争うて後に従はん』

と。政子も些か感うた。三善康信を召して、即刻進發の議如何を問へば、康信申すやう

關東の安  
危此一舉  
に在り

『關東の安危此一舉に在り、請ふ速かに發せよ』

と。政子も意を決して之に従つた。其夜泰時は十八騎を率ゐて先づ鎌倉を發した。諸將士何れも先を争うて之に従ふ。總勢十九萬人、泰時の弟時房を副として軍を東海、



關東勢京  
都に侵入

東山、北陸の三道に分ち、ひた押しに押し京都に迫つた。

宇治、勢多の守備は一とたまりもなく關東の兵に破られた。鎌倉勢は潮の頰るゝが如き勢ひを以て京都に侵入した。

義時帝を  
流し奉る

中恭天皇は幼く坐して何事も知り給はざりしと雖も、順徳天皇の皇子として泰時之を九條殿に幽閉し奉り、後堀河天皇を立てて、後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に流し奉り、土御門上皇は別に之を土佐に、(後阿波)に移し奉り公卿の主謀者を斬り官軍の逃亡者を求めて其食邑を没し畿内、西海の守護を置いて一件盡く落着に及んだ。

政子武門  
政治を大成す

斯くの如くにして遂に武力は京都を壓した。頼朝の政治は茲に至つて徹底した。而も頼朝の政治を此極點に持運んだものは尼將軍政子であつた。それが爲に彼女は、女として血を吐くよりも苦しい思ひを忍んだのである。現在我子が二人までも殺されるのを坐視して、故右大將の遺した憲法を遵守した政子を思ふ時、私は鎌倉時代の武士道が此の女性一人によつて遺憾なく體現されたことを思はざるを得ないのである。茲に於いてか、頼朝は武門政治を創設し、政子はそれを大成したといつても未だ甚

民政官と  
しての政子

しき過言ではないのである。  
政子が菅原爲長に命じて貞觀政要を國字に翻譯せしめた一事の如き彼女が其晩年に至るまで如何に熱心なる民政官であつたかを證し得てあまりあるものである。

當時の婦  
人の比較  
的良好的  
地位に在

鎌倉時代の女は、平安朝の女よりも男子に壓迫せられて居たなどといふ人もあるがそれは大なる見當違ひである。成る程男尊女卑の風は時代の推移に隨つて甚しくなつたには相違ないが、婦人を奴隸若しくは物件視する平安朝の風俗は、此頃未だ田舎にまで及んで居なかつたのである。

京女のな  
し得ざる  
所

だから此問題は時代の相違ぢやなくて寧ろ場所の相違である。歴史家は平安朝の女が情を街つて男子を翻弄したこと、如何にも心ありげな風情を見せて置いて土俵際で背負ひ投げを喰はすといふやうな遣り口を見て、女権が大であつたなどいふかも知れないが、そんな事は女権でも何でもない。たとへば弱者が弱者たることを標榜して強者を困らせて行くのも同じことである。鎌倉の女は成程そんな事にかけては大の下手



であつた。けれどもまた京女のなし得ない事を敢てした。

(一一一) 婦人の訴訟沙汰

市河見西の妻

物々しい結婚の條件

北條經時が執權で居る頃を寛元といふ。此時面白い婦人の訴訟沙汰が起つた。それは市河掃部助見西の舊妻が、契約違犯の賠償として信濃、伊勢、甲斐其他の領地を交附すべしと要求し、見西が之に應じなかつたので、終に訴訟沙汰となつた。此頃鎌倉の婦人は其嫁するに當つて夫に不離婚の契約書を要求したものである。中には見西の妻のやうに條件つきの契約をするものさへあつた。即ち若し此契約を破却して妾を捨て給はば、其賠償として某々の地を申受く可しといふのである。諸君は文藝協會のマガダに驚くことはない。鎌倉時代にも關東武士の女房は却々その權利を主張したものである。之に對する見西の抗辯がおもしろい。舊妻は落合藏人泰宗といふものと姦通したか

見西の妻に勝訴つ

見西妻の爲に邸を逐はる

男子を相手取つて訴訟

ら離婚したのである。従つて不離婚の契約も無効と認めるといふのである。處が舊妻藤原氏は飽くまでも其事實を否認した。其處で裁判官は藤原氏に決して落合泰宗と通じないといふ起請文を書かせて七日七夜在柄神社に參籠させて見たが別に神罰もなかつたので訴訟は舊妻藤原氏の勝利に歸した。裁判官は判決と共に藤原氏に含めて自分の死後、市河の屋敷だけはその子孫に譲つやれと申し渡した。それでトウトウ見西は自分の屋敷から逐ひ出されて仕舞つたのである。これ徳川時代の婦人の夢にも知り得ざる所である。なほ婦人の訴訟沙汰は此頃盛んに行はれたもので、彼等はその權利を主張せんが爲に、堂々たる男子を相手取つて、法官の前に飽くまでも其黒白を争うたものである。彼等は草紙を書いたり物語を作つたりすることこそあまり得意ではなかつたが、人間としては、平安朝の婦人よりも遙に多くの權利を許されて居たのであつた。



美人の情話に乏し  
北條氏の時代

過渡時代

藤原時代から源平戦争の頃にかけて日本の歴史は、美人の歴史かとも思はれる程に華やかなものであるが。北條の代に入つてはそれがメッキリ質實なものになつてしまふ。思ふに質素純朴な北條氏の政治がよく時代の風をなしたものであらう。

北條氏は飽くまでも華を去つて實に就き、名を避けて力を求むる田舎ものの心を以て心とした。泰時は政治の權と兵馬の權とを併せて自家の手裡に掌握した事實上の大將軍である。而も彼は政子の政策に従ひ、何處までも將軍を京都から迎へて自分は執權の職を以て甘んじたのである。

事しげき世の習こそ懶けれ

花のちりなむ春もしられず

これ泰時の歌である。終日評定所に立て籠つて机上に山積した政務を、コツコツと處理して倦まない實務家の精神がよく現はれて居る。彼は評定所の庭に櫻の花が一片、二片ハラハラと散るのを見て、噫ことしの春も最早くれて行くのかと一種の感にうたれたのである。

忙中春を  
知らず

評定所の  
庭に

泰時の救  
恤

時頼の節  
儉

酒の肴に  
味増の殘

寛喜二年の大飢饉に泰時が冗費を省き食膳を減じて救恤を行つたことを記して、『明恵上人傳』は次のやうにいうて居る。

『疊を初めとして、一切の替物をも古物を用ひ、衣裳の類も新しきをば着せず、烏帽子の破れたるだにも古きをばつくるひつがせてぞ着給ひける。夜の燈なく、晝の食を停め、酒宴遊覽の儀なくして此費を補ひ給ひける』

と。四代の執權、最明寺時頼も、祖父泰時に負す劣らずの儉約家であつた。或る宵時頼が平宣時を其邸に招じたことがある。宣時も随分貧乏をして居たものと見えて、直垂の用意がなくて困つて居ると又使が来て、

『直垂などの候はぬにや、夜なれば如何やうにても苦しからず、とくく御出ありたし』

とあつた。其處で宣時、皺だらけの直垂をつけて參ると時頼歡び迎へて銚子に土器をとりそへて持ち出し、今、肴をといふので、自ら紙燭をともして既に人の寢靜まつた臺所をあさり、膳棚に味増の殘つた小皿があつたのをとり出して、飲みかはし、政

婦人の訴訟沙汰



松下禪尼

談に夜の更けるのを忘れたといふ。これが堂々たる天下の執権職であつたから驚く可きではないか。艶つばい美人の話が此時代の歴史に絶えたのも無理はない。時頼の母に松下禪尼といふ人があつた。

(一一二) 松下禪尼

飽くまでも番頭氣質で押し通した泰時、時頼の時代を代表する婦人として松下禪尼がある。

番頭氣質  
泰時時頼

禪尼は臺所の小皿にあつた味噌の残りやを嘗めたといふ時頼の母で、北條時氏の室、秋田介安達景盛の女である。

夫時氏は泰時の長子で、承久の亂には父泰時に従つて京都に攻め上つた一人である。大に將士を愛撫して父の風ありと稱せられた。元仁元年北條時盛と六波羅の守護に任

障子の切張

じ、寛喜二年免せられて鎌倉に歸つたが、此年病を以て卒した。年漸く二十八とある。

禪尼が曾て時頼を其宅に招いた時、其兄の義景も來て御馳走のお手傳ひをした。義

景が來てみると、禪尼がしきりに煤け障子の切り張りをして居る。義景は、

『其障子を此方に給へ、心得たる男の候。張らせ申すべし』

といふけれども尼は耳にも入れない。其處で義景が更に語をかへて、

『皆を張り替へ候はんには、遙に容易く候可し。まだらに見え候も見苦しくや』

といへば尼、義景を見ていふやう。

『後にはさはりと張り替へんと思へども、今日ばかりは態とかくあるべきなり。物は、破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと若き人に見習はせて心つけん爲なり』

といふたといふ。今に美談として傳へられて居る。

恁んな風であるから、義時から高時に至る間日本の歴史はさながら荒涼の野を行く

が如きものである。祖先の番頭氣質を捨て、逸樂に耽つたといふ北條高時ですら道樂

は田樂法師に闘犬といふのである。北條といふ家はよく、美人に縁の遠い家柄であ

尼義景を  
誠しむ

田樂法師  
と闘犬



荒涼の野  
花に一輪の

つた。  
次回からは一轉して元弘の世、新田義貞と勾當内侍との情話に入るのであるが讀者は此荒涼たる冬枯れの野に別るゝに際し、其處に唯一輪の野菊の霜にいたむで咲き惱むだ風情を忘れてはならぬ。

龜菊は白  
拍子

『承久記』にかの兵亂を早めたる近因の一として、後鳥羽上皇の寵姫龜菊のことが記してある。

改易の理  
田なし

『攝津國長江、倉橋の兩庄は院中に近く召使はせられける白拍子龜菊にたびたりけるを、其領の地頭、領家を忽諸にしなければ、龜菊憤り、改易すべき由仰せ下さりければ(權太夫)義時申しけるは地頭職の事は上古は無かりしを、故右大將平家を追討のけんじやうに、日本國の總追捕使に補せられ、平家追討六ヶ年が間、國々の地頭人等、或は子を討たせ、或は親を打たれ、或は郎従を損ず、加藤の勳功に隨ひて分ちたびたらんものを、させる罪だにたくしては義時が計ひとして改易すべき様なしとてこれも用ひ奉らず』

寒潮あら  
ぶるる日本  
海の一

と。承久の亂は龜菊の事がなくとも起つたのである。けれども龜菊としては坐して上皇の隱岐に流され給ふのを見るに忍びなかつたもの見え、せめては朝夕の御慰藉にもと寒潮あらぶる日本海を分けて院の配所に從ひ奉つたのである。

途に明石を過ぎて、上皇

都をば闇暗にして出しかど  
月は明石のうらに來にけり

龜菊上皇  
に唱和し  
奉る

龜菊和して  
月影はさこそ明石の浦なれど

くもるの秋ぞなほもこひしき

新島守

噫、十九年の春秋茅茨松縁の皇居、怒濤に殘照の影うすれ行く夕、巖角に弦月の光かすかなる曉、都の空をながめて沈黙と寂寥のはかなき御身に思ひ至つては如何に感慨の御涙しげき事であつたらう。御製に  
我こそは新島守よおきの海の

松下禪尼



あらかき波かせこゝろしてふけ

浪間なき沖の小島の濱びさし

ひさしくなりぬ都へだてて

これ北條氏が、白日の下に眼を閉ぢ、良心の叫びに耳を蔽うてなしたる大罪惡である。泰時が明恵上人に對してなしたる辯解は滔々數萬言にわたつて居るけれども、國民の胸から胸に響いた此御製のこゝろを打消す力はなかつたのである。

此御製を誦する毎に私達は湮滅と沈黙の裡に葬られた。美人龜菊のやさしい心、寂しい生涯に想ひ到らざるを得ないのである。

白晝の大罪

優しい心  
寂しい生涯

### 第五章 婦人道德萌芽の時代 (一一三) 新田義貞の戀

源平時代の武士、殊に鎌倉武士はいざ大事といふ場合に惚れた女と別れることを何とも思はなかつた。それが南北朝時代になると、却々爾うでない。女の爲に戦の大機を逸する、女の爲に死におくれて生き恥をさらすといふので女に關係した武士は大抵男を下げて居る。

これを見て或學者は武士の氣風が變つたのであるというた。處がそれは少し見方が違つて居る。藤原時代でも、平家時代でも武士が女と關係すること、即ち武士の戀愛を罪惡のやうに見ては居なかつた。美人を口説き落すのは寧ろ男の手柄のやうに見なされて居た。

處が南北朝時代になると佛教の戀愛罪惡觀が一般にしみ渡つて、作者は皆女といふものを頭から伍し難きものと見てかゝるやうになつた。女などに心をひかされるもの

女の爲に  
戦機を逸  
した英雄

戀愛罪惡  
觀

佛教思想  
の普及



女を卑下する風

は碌でなしである。女といふものは所詮誘惑の鬼であるとして見てかゝるやうになつた。武士が女にのろくなつたのぢやなくて時代が女といふものを卑下するやうになつたのである。

負けたか難ら起る批

新田義貞が匂宮内侍にイチャ付いて居た爲に南朝は戦争の大機を誤つたと『太平記』の記者はいふけれども、惚れた女にイチャ付いたのは何も新田義貞ばかりではない。頼朝も、義経も皆同じことである。唯、義貞は負けたから爾ういはれるのである。若し義貞が勝利者であつたならば英雄の襟度とか英雄由来多情とかいうてチャホヤ云はれるのである。何でも世の中は力である。力さへあれば理屈は第三者が勝手につけて呉れる。

伊藤公の藝妓買ひ

藝妓買もそうだ。藝妓買をして世間に勝ちさへすれば伊藤公のやうに賞められる。負けた奴は、『それ見ろ、云はないことぢやない。止せといふのに聞かないものだからトウトウ身を誤つてしまつた』と罵られるのである。

新田義貞も匂宮内侍にイチャ付いて居た爲に幾度か戦機を逸したといふ世間の批評

『太平記』の偏見

は、『太平記』の記者の偏見を其まゝ受けついでものである。義貞がいかにも努力しても北朝の勢に勝てなかつた理由はほかに在る。然しながらそれは本書の説かんとする所でない。

新田義貞の家系

新田義貞は上野新田郡世良田の豪族にして、源義家十世の孫とある。足利氏と共に關東の家柄であつたが、其聲望は到底足利氏に及ばなかつた。元弘の亂には高時の命を受けて千早城の包圍軍に参加したが、元弘三年三月十一日護良親王の令旨を得、病と稱して國に歸り、五月中旬、天下の形勢を見て、世良田に錦旗を翻した。之より先、尊氏が鎌倉を出發して正成征伐の途に上つた時、人質として鎌倉の大藏谷に殘して置いた四歳の幼兒千壽王は遁れて義貞に屬し、其家人郎黨と共に鎌倉の攻撃軍に加はつた。

尊氏早く京都の實權を握る

北條高時は五月の二十二日を以て義貞に滅ぼされた。

此時尊氏は既に京都に於いて官軍に屬し六波羅を陥れて其實權を掌握して居たが、一子千壽王が義貞の軍に加はつて鎌倉を陥れたと聞き、時をうつさず、細川和氏に大



尊貞と義貞との拮抗

義貞と護良親王

勾當内侍

軍を附して鎌倉なる千壽のもとに派した。

和氏の大軍は鎌倉に入つた。尊氏の京都に於ける勢ひを傳聞した關東の將士は我も我もと千壽王に附いて義貞を捨てた。足利氏と新田氏との睨み合は茲に始まつたのである。反目の結果、足利氏と新田氏とは今にも一戦に及ばうとまでしたが、細川和氏の奔走によつて辛くも事なきを得た。鎌倉の實權は遂に足利氏に歸した。義貞は犬骨折つて鷹の餌となつたのである。義貞は不平満々として上京した。

處が京都には護良親王といふ王政黨の旗頭が居つて、早くも六波羅の實權を握つた尊氏と睨み合つて居た。義貞は勢ひ親王と握手せざるを得なかつた。親王と義貞とは忽ち同盟して尊氏排斥の火の手をあげた。

尊氏の爲に鎌倉占領の勳功を横取りせられた義貞は、茲に護良親王といふ後援者を得てやゝ其不平を忘れる事を得た。同時に彼は勾當内侍といふ京美人を妻として更に其心を慰むることを得た。

(一一四) 勾當内侍の宛

二條河原の落書

上野國の豪族、新田義貞が京都に入つて勾當内侍といふ水も滴らんばかりの上臈に思ひをかけたのは、さもありさうなことである。

建武中興の頃、二條河原にあつたといふ落書の一節に、

『此頃都にはやる物、夜討強盜謀綸旨、召人早馬虛騷動、生頸還俗自由出家、俄大名迷者、安培恩賞虛軍』

事あたらしき籠出仕  
明眸皓齒の京美人

とある。舊制度、廢れて新秩序未だ起らざる帝都の光景、宛として眼に見るが如くである。昨日まで悍馬を馭して、關東の原野を驅馳した田舎武士が事あたらしき籠出仕閑雅優長なる公卿の間に立交つて「一座そろはぬ似而非連歌」に粗造な頭腦を惱ますといふことになつた時、先づ彼等の眼に映じたものは明眸皓齒の京美人であつたに相違ない。

鼻の小さい、雀斑の多い關東の女にのみなれた彼等が、はじめて鼻條の通つた色の



頭へる位  
では納ま  
たなかつ

白い京美人を見た時、如何に着つけぬ冠、上のきぬを正して氣色ばむだ事であらうか、高師直が鹽治高貞の夫人を垣間見て、ワナワナと顛へたといふが、何うして顛へる位では納まらなかつたに相違ない。

夷心の無  
分別

義貞がぶしつけに句當内侍にいひ寄つたのは、田舎者の不作法を遺憾なく發揮したもので、内侍もこれには些か驚いたに違ひない。主上には『夷心の無分別』とあつて何の御とがめもなく、反つて内侍を義貞の妻に賜はつたのである。

足利尊氏が京都に破れて九州に走つた時、義貞が直ぐに尊氏を追撃さへすれば尊氏は必ず亡びたのである。

それを義貞が病と稱して發せず。内侍の色香に溺れてテレ付いて居た爲に大切な機會を失つたといふのが『太平記』の著者の見解である。

内侍の罪  
か否か

成る程追撃戦は何れの場合に於いても味方の勝利を最も確實にする所以である。然しながら、義貞があの場合、九州までも長驅して尊氏を追撃する事が出来たか、否かは問題である。

諸大名の  
心算に  
歸す

當時日本の諸大名は建武の革命に徴して沁々王政の自家に不利なる所以を覺つて居たのである。自家の利益を擁護して呉れるものは何うしても幕府でなければならぬ。我々大名は何うしても頼朝のやうな偉い大將をもち立て、最早一度武家の世にしなければならぬ。それには尊氏が適當の人である。足利家は關東一の家柄で源氏の正統である。尊氏を擁立して再び武家の政治を起さなければ、我々大名は坐して滅亡を待つより外はないと。恚う思ひ込んで居たのである。

建武革命  
の失敗

折角王政復古の大業を建て、置きながら、全國の諸大名に恚んなことを思はせたのは、全く建武の政治のよくなかつた證據である。

瀬戸内海  
の制海權  
尊氏の  
手裡に  
あり

されば尊氏は命からぐ、京都を落ち延びたけれども、攝津以西に於いては到る處で諸大名の出迎へを受けて居る。戦鬪らしい戦鬪は菊地武敏と延元元年二月二日多々良濱に戦つた事があつたのみで、九州は殆ど草の靡くが如くに其配下に伏し、瀬戸内海の制海權は依然として彼の掌中にあつたのである。

既に天下の大勢がこれである處へ京都に於ける宮方は、源顯家といふ大勢力を失



婦人道德萌芽の時代

四五六

つた。尊氏が京都に破れた主要な原因は何であるかといふに、陸奥の源顯家が大軍を率ゐてうしろざまに攻め掛つたからである。其顯家が奥州の事心もとなしといふので、尊氏が九州へ走ると間もなく、兵を率ゐて歸國して仕舞つた。若し湊川敗戦の重なる原因をいふならば顯家が奥州に歸つたことではあるまいか。

顯家の歸國によつて官軍は大に其兵力の不足を感じた。攝津以西は皆武家方であるといふのに、義貞、正成の兵では到底之に敵すべくもない。況んや瀬戸内海の制海權は敵の掌中に在る。義貞、正成が、尊氏を九州に追撃することの出来なかつたのは之が爲である。遣れといふても所詮出来ない相談である。

義貞が勾當内侍の愛に溺れて暫しの別れを惜むた處から天下の大機を逸した。建武中興の大業は義貞によつて誤られた。勾當内侍は一笑國を傾けたものであるなど云ふのは餘りに酷い見方である。

(一一五) 叡山の義貞

延元元年五月二十五日は湊川の合戦、楠正成戦死、天皇は再び叡山に御幸越えて卅日には尊氏陣を東寺に進め、確實に京都を占領した。

叡山と東寺との對抗は六月五日に始まつて九月の末に及んだのである。

義貞及び官軍の諸將は東坂を守り西坂は之を僧徒に任せた。處が西坂の僧徒は嶮をたのむで備を設けない。武家方は其虚に乗じて不意に攻めかゝつた。僧徒は天嶮に據つて大に武家方と戦ひ、遂に之を走らせた。

武家方は一度退いたけれども、數日の後には又々雲霞の如き大軍を驅り催して攻め寄せた。這回は武家方に十分の用意があつた。天嶮を恃むで心驕れる僧兵は忽ちにして其守を失つた。

大講堂の鐘は轟々般々として叡山の山々谷々を動かした。

東坂に在つた義貞はこの鐘の響に驚いて急に六千の兵を比叡山の嶮處に廻し、武家

叡山の義貞

四五六



義貞大に  
賊軍を破

方を要してドツとうち下した。武家方は思ひもよらぬ義貞の突撃にあつて陣を立直す暇もなく雪崩をうつて崩壊し、轉々して谷に死するもの其數を知らず。其日の戦は遂に宮方の大勝利に歸した。

義貞連戦  
連勝

義貞は更に陣を大嶽に敷き、十餘日の接戦に連戦連勝して大に賊の軍氣を阻喪せしめた。此時武家方は累日の敗戦に兵卒四散して止まるものなく、一度宮方の下撃にあへば到底之を支ふるの力はなかつたのである。

叡山の糧  
道絶ゆ

然るに義貞は大嶽の陣地を出で、賊を追撃しようとはしなかつたのである。『太平記』の著者は此處でも中將が句當内侍の愛に溺れて大切な機會を失つたことをせめて居る。然しながらそれもあまり酷い批評で、此時宮方は賊の爲に全く糧道を絶たれて進むことも退くことも出来なかつたのである。殊に、尊氏が東國山道の兵を率ゐて來會したる小笠原貞宗を近江に止めて、湖舟の往復を杜絶せしめ、近江若狹の糧道を絶つたのは、宮方に對する致命傷であつた。

義貞が叡山包圍の賊軍を追撃して東寺を攻めようとするのは自ら進んで死地に陥る

義貞の下  
撃

のも同じことであつた。果然義貞の下撃は全く失敗に終つた。十月十日には主上も尊氏の歎を納れて東寺と和を講じ給ふの止むを得ざるに至つたのである。

北國の徇  
撫

叡山は事實上陥落したのである。義貞は主上の恩命を承り、春宮を奉じ、感泣して北國の徇撫に赴いたのである。『太平記』の著者から度々酷評を被つた句當内侍も茲に至つては、潔く義貞と別れなければならなかつたのである。

句當内侍は源三位の喜浦前、源義朝の常磐などと同じく、義貞の武功を賞する爲に主上から下し置かれたもので、朝鮮の官妓も同様、一種の物件として取扱はれたものであつたが、義貞に對する愛情は餘程濃厚なもので、別離の後も悲歎の涙にのみ暮て居たが、義貞越前の金崎に出陣すと聞き、安否を煩ふの情に堪えず、一人、北國に向つて旅立つた。

内侍琵琶  
湖に投じ  
て死す

處が近江の堅田に於いて義貞の戦死を聞き悲痛のあまり琵琶湖に投じて死んだといひ、又一説には嵯峨に庵を結んで尼となつたともいふ。琵琶湖で死んだといふ説によれば堅田の里の竹内某なるものが内侍の死骸を納めて、湖中の一小島に葬つたといふ



武辨一片

閑雅優長の尊氏

芝居の義興

ことである。  
新田義貞と匂宮内侍との情話によつて想像すると、義貞といふ人は、面長で色の白い美男の大將であつたやうにも思はれるが、其内侍の袖を引いた手際といひ武將として部下を統御した遣口といひ、すべての事が武辨一片の關東武士を遺憾なく發揮して居るやうである。義貞には風流の逸話といふものが少しも傳はつて居ない。  
旗上げの時から彼の競争者であつた足利尊氏は之と反對に餘程閑雅優長な大將であつたらしく見える。歌もよむ。晝もかく。禪學もやる。流石に義貞よりも人物が大きかつた。人心の服したのも偶然でない。

(一一六) 新田義興

義貞と共に彼の第二子、新田義興も女の爲に身をほろぼしたといふので、あまり評判がよろしくない。芝居でやると『矢口の渡』といふので、敵方の渡守の女が一目見て

義興の母

陸奥守の任務

立後れの出陣

母もない戀に陥るといふ程の優男であるが、之も父義貞と同じく、大した色男であつたとも思はれない。無論匂宮内侍の腹ではない。『母賤しくして義貞に愛せられざるを以て幼にして上野に居る』とあるから、生え抜きの上州ツ兒であつたに相違ない。  
私が前項に湊川敗戦の最大原因としてあげつらふた源顯家は、延元二年陸奥の兵を率ゐて後さまに鎌倉を脅かした。抑も建武中興の砌、顯家を陸奥守として東北に置いたのは、鎌倉に事あるの日後さまに足利氏を壓する計畫であつた。  
新田義貞を竹の下に破つて、疾風の如く京都に攻め上つた尊氏が、一敗地に塗れて命から九州に走らざるを得なかつたのは全く顯家の大軍が後から攻めかゝつた爲であつた。其顯家が尊氏の最後も見届けずに陸奥へ歸つたのは抑も南朝没落の最大原因である。さて陸奥に歸つた顯家は京都の情報に接して再び大軍を驅り催し、鎌倉征伐の途に上つた。之が延元二年の事である。けれども顯家の此時の出陣は全く立後れであつた。

叡山は没落し。名和長年は戦死し、新田義貞も北國に踏躑して既に天下の大勢が定



戦略上無  
意味の大  
行軍

まつた頃、顯家は鎌倉から、京都へかけて、戦略上何等の價値もない。無意味の行軍をやつたのである。顯家の軍は到る處で武家方の兵と衝突した。けれども彼の軍は兎に角東北を代表する大勢力だけあつて、追ひつ、追はれつ畿内に入る事が出来た。けれども彼が畿内に入つたのは全く無意味であつた。自ら死地に陥つたも同じことであつた。果然阿部野の一戦に彼は高師直の手に討ち取られた。

顯家討た  
る

顯家が陸奥から上つて鎌倉に攻めかゝつた時上野にあつて時機の來るのを待つて居た新田義興は三萬の兵を率ゐて顯家の軍に投じた。かくて義興は顯家と共に鎌倉を陥れて共に京都に攻め上る途中遠州に於いて井伊の谷、奥山の南朝方(宗良親王)を合し、延元三年青野原の戦に勝つて奈良に入り、遙に北國の脇屋義助と相應じて京都を脅威した。けれども此進退は毫も大局に眼のない行動であつた。鎌倉を占領して直にそれを捨てたのは抑も何の意味か、私を以て見れば鎌倉の占領を確實にして關東に根據を定め、遙に北國の義貞と相應じ、井伊の谷の宗良親王を助けて徐ろに軍をすゝめた方がよかつたやうに思はれる。

鎌倉を放  
し理由な  
る

遠州灘の  
難船

顯家戦死の後、義興は吉野に參つて帝に謁し、御前に加冠して左兵衛佐を授けられた。諸將と東國征定の勅命を承つて伊勢の大湊から海路を武藏に向ふ途中、遠州灘の風波に遇つて諸軍相失ひ義興の船は武藏の石濱(淺草邊)に漂着した。彼は止むを得ず東國に隠れてひそかに時機の到來を待つて居た。

新田義興  
起つ

世は正平七年の春となつた。後村上天皇が中院顯能の兵を併せて天王寺より男山に進み、將に京師を計らむとし給ふ由を聞き、東國に在つては、かねて潜むで時機の到來を待つて居た新田義興の一族が奮然と蹴起した。

武藏野に  
進撃

新田義興は弟義宗、従弟脇屋義治等と征東將軍宗良親王を奉じ、手兵八百を率ゐて西上野に打つて出で、行く／＼同志を糾合し、信越の宮方と會して總勢十萬餘、潮の瀬るゝが如き勢ひを以て武藏野に進撃した。此時には北條時行もまた一方の大將であつた。

之から、戦術上最も興味深い武藏國小金井ヶ原の合戦を述べる。此時、足利尊氏は鎌倉にあつて麾下千騎に満たず、部將等皆退いて再舉の策を講せ



尊氏鎌倉を捨てず

本營は小手指ヶ原

春淺き平原

むことを勧めたが、尊氏は頑として聽かなかつた。  
 『今、尊氏鎌倉を捨てなば、關八州の中、味方も屈して敵となるもの多かる可し。小勢なりとも進んで戦はんには如かず』  
 と、基氏を留めて鎌倉を守らしめ自ら五百餘騎を率ゐて先づ進發した。畠山仁木、岩松、今川以下の諸將之に勵まされ。皆後れ走せに相隨ふて、神奈川驛に次した。  
 さて武藏野に攻め入つた宮方はといへば、此時新田氏の諸軍は進むで小金井ヶ原に陣し、宗良親王の本營は小手指ヶ原にあつた。

(一一七) 小金井ヶ原の戦

正平七年閏二月廿日、春淺き武藏野の平原は軍馬の嘶く聲にあけた。  
 旌旗は翻翻として遠く榛莽の末に連り、甲冑劔戟はかすかなる黎明の光に映じて、十萬の宮方、意氣將に天をも衝かむ勢ひである。宗良親王は願望して踴躍禁せず、

捨て甲斐ある命

花一揆の敗北

官軍總攻撃

左右を顧みて一首の歌を詠し給ふ。

君がため世のため何か惜からむ

捨て、かひあるいのちなりせば

官軍の士氣はために一層の旺盛を加へた。戦鬪は拂曉を以て開始せられた。先づ新田義興の二萬餘と平一揆の三萬餘とが、半刻あまり鋒を交へて互ひに勢をひけば、脇屋義治の手兵二萬と白旗一揆の二萬七千と入り亂れ、激戦數合にして之も勢を東西に退く、第三番には武家方の饗庭命鶴丸、當年十八歳の美少年にして、率ゆる處の花一揆六千餘、皆一枝の梅花を翳して進む。宮方にあつては勇武絶倫の兒玉黨之にかけ向ひ奮撃猛進、遂に花一揆を蹂躪し、狂瀾の頽るゝが如き勢ひを以て尊氏の本營に突きかゝる。

官軍は總攻撃に遷つた。

新田義宗は此處ぞと手兵を塵き馬上に大呼して曰く、

『天下の爲には朝敵なり。われらの爲には父の讐なり。今にして尊氏の首を獲ずむば、



義宗尊氏  
を追ふ

また何時の世をか期すべし』  
と、二引兩の大旗を眞先に尊氏の本營目にかけて殺到す。其勢ひには流石の尊氏も敵し兼ね、總崩れとなつて東に走る。

尊氏自殺  
せんとす

野は茫茫たり、路は悠悠たり。逃げる者も夢中、追ふ者も夢中。日黄昏にして尊氏は武藏の石濱にかけつけた。石濱は今の東京淺草、今戸あたりである。見れば、義宗の追撃はなほ急である。前には漫々たる大河、尊氏も今はこれまでと覺悟はきはめたが、近侍の武士が何うしても自殺を許さない。辛うじて彼岸に渡つてホツと一息つく事を得たのである。

義宗遂に  
及ばず

此方は義宗、疾風の如くに追撃して石濱まで来て見ると、尊氏はホンの今水を渡つたらしい様子である。が、河は廣い舟はない。日はトツブリと暮れて方角さへも定まらぬ。見れば手兵の續くもの僅に五百騎に過ぎず、それも長途の追撃に綿の如く疲れて居る。

義宗は切齒扼腕して口惜がつたが仕方がない。

義興白旗  
一揆を追

扱てまた義興と義治とは、北條時行の一隊と合して白旗一揆を北に追ひかけた。勿

論尊氏の麾下と間違へたのである。

武藏國關  
戸村

小金井から北に、府中を越えて多摩川を涉ると關戸といふ村がある。今日でこそ知る人もない一寒村であるけれども、當時は此關戸といふ村から山へかゝつて原町田といふ處に出で、鶴間を経て鎌倉に通つたものである。茫茫たる武藏野の平原が北に盡きて之から山へかゝらうといふ麓の村である。

日露戦争  
と追撃戦  
の教訓

白旗一揆は此關戸にかゝつて鎌倉に落ちたものと見える。隅田川の方面へ追ひかけた義宗とは全く反對の方向へ走つたのである。統一のない軍隊が追撃をすると間々こんな羽目に陥るものである日露戦争の経験では追撃は出来るだけやれ。追撃が足りないと勝つた戦が負けになるといふ事になつたさうであるが、それは當節の規律ある軍のこと。昔のやうに統一のない軍では追撃の爲に折角勝つたものが大敗北となつた例は少くない。『長追無用』などいふ昔の兵語も恁んな経験から生れたものであらう。

義興と義治とは追撃の途中降兵に會つて、一々會釋をして居る間に何時しか本隊と



義興包圍せらる

大勝利の結果が北

離れて左右僅に三百餘騎となつて仕舞つた。處へ、亂軍の事であるから武家方の遊軍、仁木頼章、同義長の一隊三千餘騎が不意に攻めかゝつて、味方を包圍する。義興、義治は大に驚いて縦横に奮闘したけれども衆寡敵す可くもない。義興は兜の鏝と、袖の三の板とを切り落され薄手を三ヶ所まで負ひ、義治は鍬形兩方とも打ち落され、草摺は威毛ばかり續き、太刀は鐺元から折られ、代りに持った薙刀の峰はさゝらの如く、及は鋸に似たとある。これが大勝利を得た宮方の大將であるといふに至つては何の事やら狐につまゝれたやうな話である。

(一一八) 義興の漂泊

宮方關戸に集る

小金井ヶ原の一戦に大勝利を博しながら追撃戦に度を失して收拾すべからざる勢に陥つた官軍は、夜更けて關戸の宿に勢を集めた。大將には義興、義治及び北條時行、従ふもの僅に二百餘騎、宮の御安否や如何義宗

内應軍の來會

の行衛や如何と打ち案じつゝある處へ、忽ち暗中に騷然たる人馬の音。敵か味方か、敵ならばはやこれまでぞと斥候を放ちて偵察せしむれば、こはそも如何、これは曩に内應を約したる石堂義房、三浦高通以下輩名、二階堂、小俣の諸將が五千餘騎を率ゐて來會したものであつた。

兩執事の抗争

尊氏弟直義を殺す

之より先、武家方には尊氏の執事高師直と副將軍直義の執事上杉重能との間に權力争ひがあり、延いて尊氏對直義の争ひとなり、正平七年の春、直義は遂に兄尊氏の爲に鎌倉に亡ぼされた。其時直義方に附いて尊氏と戦つたのが、茲に宮方と内應を約した石堂、三浦、輩名、二階堂、小俣の諸將で、直義の死後一旦尊氏に降参したものの、師直時代からの宿意があつて、尊氏直參の諸大名とは何うしても馬が合はなかつたものと見え、義興の舉兵を聞くと共に豫て内應を約したものであつた。兩軍の諸將士、何れも奇遇に驚き乃ち合して一隊となり、虚に乗じて鎌倉を襲ひ、左馬頭基氏を討ち取るべしと勇氣百倍し、其夜直に神奈川に至り、翌日進んで鎌倉に迫つた。



鎌倉再び官軍の手に落つ

鎌倉は此時尊氏小金井ヶ原に出陣の留守、左馬頭基氏南遠江守に命じ總房二州の兵三千を以て拒ぎ戦つたが、敵の鋭鋒に一とたまりもなく陥落した。

南遠江守は基氏を擁して石濱に走り尊氏の軍に合した。

さて尊氏を追ふて石濱に至り、士卒の續くものなきに手を空しうして引きかへしたる義宗は宮を奉じて笛吹峠に據り、鎌倉を占領した宮方と相呼應して尊氏挾撃の計をめぐらした。

尊氏石濱に據る

尊氏は流石に一代の人氣ものであつた。石濱では既に自殺とまで覺悟をきめたものが、河を渡つて下總の地に入れば江東の子弟來り會するもの引きも切らず、忽ちにして其頽勢を挽回した。

笛吹峠の激戦

二月二十八日には尊氏早くも守勢を攻勢に轉じて先づ笛吹峠に攻め寄せた。戦は其日の午の刻に始まつて、翌曉に至り全く武家方の勝利に歸した。

笛吹峠の敗報に接したる鎌倉の義興は時行、義治と共に石堂、三浦以下の諸將を率ゐ酒匂川の上流河村城に入つて尊氏の大軍を擁した。時に三月四日。

尊氏旬日を復す

尊氏の踵の向ふ所には招かずして兵が集まつた。彼は其石濱に自殺せんとした後、旬日にして關東の大權威となつた。小金井ヶ原の戦鬪以來殆ど勝ち續けた宮方は却つて日に日に其勢ひを失つた。河村城は正平七年、三月十五日から武家方の包圍を受け翌年の春に至つて遂に陥落した。

十萬の宮方雲霧散

宮方の諸將は離散した。義興は義治と山越して甲州に落ち、越後に走つたが、時行は大膽にも相摸に潜むで再舉をはかり、五月尊氏の手に乗へられて龍の口に斬られた。正平七年小金井ヶ原を震撼した十萬の宮方は何處から起つて、今、何處に消えたのかやがて消えなむ燈火の一度あかきにも似たるはかなき運命であつた。

義興漂泊す

義興はさすらひの身となつた。武藏、上野の間には流石に新田氏の舊恩を思つてひそかに心を寄せるものもあつた。鎌倉に於いては、基氏、畠山國清に命じて數々義興の逮捕を促すと雖も、義興、上武二州の間に轉客して、出沒測る可らず。尊氏は未だ枕を高くして、安き眼を貪る事が出来なかつたのである。其處で畠山國清も大に考へた。これは幾ら焦つても正面から向つたのでは駄目であ



竹澤良衡の奸策

る。苦肉の計略を以て逮捕すべしといふので、竹澤良衡といふものに其意を銜めた。竹澤良衡といふ男はもと義興の部下であつたが、小金井ヶ原の合戦に武家方に降参し義詮の配下にあつたものである。國清此男に利を啗はせて義興を圖るべく命じた。扱て此良衡といふ男が怪しからむ奴で義興に一人の美人をすゝめる。

(一一九) 義興と少將

京美人少將

竹澤良衡は罪を得て、其領邑を奪はれたものゝ如くに装うて、義興と慇懃を通じた。けれども、義興は深く疑うて良衡を近づけない。其處で良衡一計を案じた。彼は京都から少將といふ妙齡の美人を迎へた。關東武士の心を蕩すには何うしても色の白い、肌の滑かな京都の女が必要であつたものと見える。良衡は此少將に盛飾させて、我子と偽り、二心なきしるしとして義興にすすめた。もとより好色の義興であるから、色氣盛りの美人を傍へ置いて眺めてばかり居る譯

義興少將に溺る

には行かぬ。

暫くするうちに少將でなくては夜も日もあけぬといふ事になつてしまつた。良衡は得たりと、其虚に乘じ、人を廻して義興に油をかけたから堪らない。やがて良衡は二なき忠臣として義興の信任を得るに至つたのである。

良衡義興を誘殺せんとす

居ること半歳にして良衡は、軍謀作戦悉く義興の機密に參與することゝなつた。時分はよしと良衡九月十三夜の宴に事よせて、義興を誘殺しようとして企てた。義興は信任あつき良衡の招待であるから快くうけて將に其隠家を出やうとする處へ、寵愛深き少將からの便り、早速披いて見ると、昨夜の夢見がわるい、凶事の知らせではあるまいか。若しもの事があつてはならぬから、今日のお出ましは御見合せになつては何うかといふ文面である。

少將義興の危難を救ふ

義興もさてはといふので大に躊躇して居る處へ、家臣、井伊直秀も來合はせて切に其外出を止める、義興いよく氣味を悪くしてトウトウ思ひ止まつてしまつた。爾うして良衡の方へは急に病氣と通知した。



情なれては  
常の女を知る

此方は少將、田舎ものの義興であるから我から進んだ戀ではない、併し、なれては情を知るのが女の常と見えて、良衡の謀を知つては、流石に黙つて義興の殺されるのを見て居る事もならず。夢にことよせて義興の外出をとめたのである。けれどもまた一方には良衡への情誼もある。彼女は恩願を受けた足利方の秘密をうらあけるにも忍びなかつたのものと見える。

少將殺さる

處が良衡の方では其處までは思つて居ない。少將が義興に情をうつして、大事を洩したものと踏むだから、最早生かして置くべき奴でない。可憐そうに即刻其美しいものゝ息の根をとめてしまつた。

義興未だ覺らず

義興は少將に未練が十分である。其後も数々文を少將に送つて其安否を問ふけれどもサツパリ返事がない。訝しいと思つて居る處へ、良衡から手紙が届いて少將は枕も上らぬ大病といふことである。良衡は、義興がまだ少將にうつゝを抜かして居る事によつて始めて彼が深い秘密を知つて居ないといふことを確め得た。其處で少將は病氣であると一時は糊塗したものゝ今は猶豫すべき時でない一刻も早くといふので畠山國

江戸高重  
義興を詐

清に使を遣して義興誘殺の打ち合せをした。

國清は良衡としめし合せて江戸高重の邑を奪ひ、別に守吏を置いて、高重を國外に放逐した。高重は大に怒つて守吏をしりぞけ、城を回復して叛旗を翻へした。高重と良衡とは義兄弟である。高重は良衡を通じて義興にいはしめた。

義興欺か

『道誓故なくして邑を奪ひ臣をして居るに所なからしむ。之が怨みを報いんと欲すれども、大將なければ士卒附かず。希くば公を奉じて事を舉げん。臣が族鎌倉に在るもの亦數千人、率ゐて以て相摸を定め、八州を徇へば、天下は則ち定むるに難からず』

矢口の渡

と。義興も此大仕掛の演劇にはウツカリのせられて仕舞つた。豫て思ひ設けたる機至れりと、直に兵を催して鎌倉に發向の準備をする。高重、良衡は此處ぞと、兵士を従へんか、恐らくは人の爲に怪まれん』と、巧に義興を欺いて近侍十餘人と曉に乘じて鎌倉に向はしめた。時に正平十三年十月、武藏野はこれから霜枯れといふ時であつた矢口の渡には甲冑に身を固めた一隊の兵が岸側に伏して義興の來るを今や遅しと待



舟中流に  
浮ぶ

ち構へて居る。岸には底を鑿つて、栓をはめた恐ろしい舟が繋いである。義興はやがて矢口の渡に着いた。待ち構へた舟人は主従十餘人を載せて、中流に漕ぎ出した。

(一一〇) 矢口の渡

河水舟中  
に奔濁す

義興と其従者十餘人とを載せた舟は今しも川の中程まで漕ぎ出した。かねて機密を授けられた不敵の舟人は、急に舟底の栓を抜くと其まゝ身を水中に躍らして、舷を離れた。

舟中の一行は船頭がと驚き騒ぐ間もなく、水は恐ろしい勢を以て舟底から噴き出した。

伏兵兩岸  
に起る

同時に兩岸に現はれた伏兵は、籠を敲いて哄と嘩し立てる。さては欺かれたかと。義興主従、切齒扼腕して口惜しがつて見たがもう晚い。

欺討とは  
卑怯なり

『おのれ惡逆無道の良衡、高重！欺討とは卑怯なり。たとへ此まゝ死するとも、七たび生れて此恨は必ず晴らして呉れうぞ』

と、目を瞋らし齒をくひしぱり、岸を睨むで突立つた形相のもの凄さ。世良田右馬之助、井伊直秀、大島周防守、由良兵庫助、由良新左衛門等、譜代の侍十餘人何れも自盡して空しく六郷の鬼と化した。

裸體の奮  
戦

中にも土肥三郎左衛門、南瀬口六郎、市川五郎など水練の心得あるものは、手早く衣を脱いで、刀を口に銜み、涸いで彼方の岸に躍り上り、縦横無盡に斬りまくつたけれども何がさて多勢に無勢、甲冑に身を固めた軍兵に、素裸で立向ふのであるから到底敵すべくもない。これも敵五人を殺し、十二人に傷を負はせて悲壯の最後を遂げた。

入間河の  
營

良衡、高重は義興の首級を獲て之を基氏に入間河の營に供へる、基氏大に其功を賞し、良衡を留め、高重を其邑にかへして義興の殘黨を索めしめた。江戸高重は大に面目をほどこして意氣揚々、再び矢口の渡まで來ると、舟人どもが酒肴を載せて向岸から出迎へる。



舟人盡く溺死す

高重何心なく岸に立つて待つ程に、件の舟、前の日義興が恨み死に死んだあたりまで漕ぎ出すよと見る間に、一天俄に掻き曇り、空には墨を流したやうな黒雲が一面に瀾つて時ならぬ迅雷のもの凄さ、見る／＼うちに波濤洶湧して、舟を覆へしかの舟人ども盡く水中に溺死した。

義興の斷末魔

此光景を見た高重の眼には、今ありありと義興のおそろしい形相が現はれた。暗澹として物凄いらしの中に、朦朧として浮び出した義興の斷末魔、眼をいからし、齒を喰ひしばつてハッタと睨む、ハツと驚いた高重、馬の首を立て直して、一鞭あてると其鬣に伏して四里、五里が程はあらしの中を夢中で駆け通した。雨は車軸を流すが如く、電光は閃々として、凄愴な、沈鬱な光景の中に時々夢の如く馬の首に伏して走る一人の武士を映出した。

唯見る電光の裡

突如として高重の馬は竿立ち立つた。唯見る一道の黒氣濛々として頭上に掩ひかゝるよと見れば、後にあつてけた、まじい蹄の響き、こはそもいかに新田義興、龍頭の冑を戴いて白馬に打ちまたがり、追ひ

高重落馬して吐血す

せまつて今にも弓につがへた矢を切つて放たうとする。雨も黒い、風も黒い、黒い暗いあらしのうちに唯義興の甲冑のみが白くあやしい光を放つて居た。

入間河の怪異

高重は落馬して悶絶した。口からは黒い血潮がおびたくしく流れ出た。從卒に昇かれて家に歸つたが、それからは高重全く人事不省、宛轉攀縁水に溺るもの、如くにして七日目に死んだ。といふから、熱病か何かであつたものと見える。同時に畠山國清もまた義興の怨靈を見たといふ。彼は義興が例の物凄いらしに、一隊の幽鬼を引きつれ、火の車を挽いて入間河の陣所に進むと見たのである。

義興は大將の器に非ず

矢口の渡に高重を驚かした大雷雨は、また入間河の民家を襲うて三百餘戸を焼き拂つた。時人何れも義興の怨靈と稱して恐れをのゝいた。義興といふ人も、父義貞と同じく唯の武將であつて、大局に眼の届く人ではなかつたやうである。小金井原戦争にあれだけの勝利を得ながら、十萬の軍を統一する事が出来なかつた爲に、其結果は、負けたよりもひどいことになつてしまつたのである。三軍の統率といふ事よりも、亂軍の中に馬を入れて士卒と功を争ふといふ事の方が得



初めから  
定まつた  
運命

意であつたものと見える。  
少將の色に溺れて良衡に圖られるといふのも初めから定まつた運命ではなかつたらうか。

關東武士  
と京美人

(一一一) 漁色黨の旗頭

關東武士が京都に攻め上るたびに、起るのが、美人分捕問題である。采女制度の創設以來、代をかへ、年を経るに随つて美的淘汰の一般に行はれた京都の地に入つて、先づ關東武士の心を動かしたものは、皮膚に光澤のある、鼻條の通つた所謂京美人であつたに相違ない。

殊に建武の亂は、武士と朝廷との交渉であつた。荒くれ武士の目ざす對手は、優柔鳩の如き月卿雲客であつた。建武中興の鴻業一たび蹉跌してより、宮方の上臈はもとより、公家の令嬢令夫人、公家侍の女房に至るまで、遁げまどひ、行き惱んで鎌倉

鳩の如き  
月卿雲客

火の様な  
情慾の機  
性

武士の手籠に遇ひ、その火の如き情慾の犠牲に供せられたものが頗る多かつたのである。

名を聴いて  
たゞ顔で  
女が顔を  
そむける

當時漁色黨の旗頭として今に至るまでも世に其醜名を謳はれるものは足利尊氏の執事高師直である。後世の戯作者によりて、元祿の吉良義典に擬せられた爲に、高師直といへば日本國中の女が袖で顔を蔽ふやうになつた。彼は寧ろ不仕合な男かも知れない。何となれば、當時京都に於いて美人を漁つたものは必ずしも師直一人ではない。唯、彼は飽くまでも露骨であつた。彼が酔興に乗じて

『あはれ、昔頼政に賜はつた菖蒲前ほどの美人あらば、國の十箇國、所領の二三十箇所になりとも交換すべきに』

というた如きは其氣前をよく現はして居る。何時の世にも偽善者はある。蔭でコンコン悪戯をした大名も外に澤山あつたであらうに師直はひどい名を残したものである。然しながら彼は將軍家の執事であつた。彼は將軍家唯一の功臣であつた。彼の地位と彼の名望とを以てして、露骨極まる淫虐を働いたのであるから、それが世の批評に

蔭でコン  
コン悪戯  
名をした大



高家の祖

上つたのも無理はない。高家はもと公家の出である。祖先是右中辨、高階峰緒といふ人で、九世の孫、惟真といふものが、始めて高を稱した。其子孫が代々足利氏に事へて重く用ひられたといふのであるから、師直に至つてはもう生え抜きの田舎者で、粗野な關東武士の風が其血脈にまでも染み込んで居たに相違ない。

足利家唯一の忠臣

師直は師重の子である。尊氏の執事となり、右衛門尉に任せられ、尊氏が北條氏に叛いて六波羅を陥れるに及んでは武藏守に任せられた。尊氏が師直を寵用したのは當然の事である。何となれば、師直は實際に於いて足利家唯一の忠臣であつた。前にもいうた通り、全國の諸大名が尊氏を援けて、兎にも角にも征夷大將軍といふ地位に擔ぎ上げたのは皆自家の利益から打算しての事である。彼等は建武の中興に懲り込んで幕府の政治を望んだ。つまり自家の利益の爲に大勢よつてかゝつて尊氏を擁立したのである。

我儘な大名

されば若し一旦尊氏が自家の利益でないと見たが最後、彼等は直にも南朝に降参し

北朝一の武將

て足利氏に叛旗を翻すのである。當時の諸大名は最も極端なる自己中心主義者であつた。

處が高師直に至つては爾うでない。彼は足利家譜代の臣である。彼は足利家と終始利害を共にするものである。南朝方との戦ひにも師直は何時も命がけで働いて居る。他の大名が旗を捲いて逃出す時でも彼はひとり踏み止まつて戦つて居る。足利尊氏が彼を寵用したのは尤ものことである。

師直顯家を亡ぼす

四條畷の師直

延元二年、陸奥守北畠顯家が鎌倉を陥れ、翌三年青野原に勝つて奈良に侵入し、更に泉州堺に出陣して、弟顯信を男山に屯せしめ、遙に北國の脇屋義助と相應じて京都を包圍せんとした時は、尊氏にとつて正に危急存亡の時であつた。此時奮然身を挺して死地に入り奇勝を博して顯家を亡ぼしたものは師直である。師直は此時も命がけで其功をあげたのである。顯家の死は正に南朝の致命傷である。

正平三年四條畷の戦にも細川清氏、仁木頼章等が總崩れに崩れかゝるのを呼び止めて、頽勢を挽回し、正行の首をあげたものは矢張り高師直である。此時も彼は死を



決して戦つた。師直は南朝方から見ると飽までも憎い男であつたが、足利家にとつては無二の大忠臣であつた。

師直といへば何處までも奸物で、世辭と追従の外能のない男であつたやうに思ふのは大間違ひである。次にはいよいよ師直好色の事を述べる。

(一一二) 執事の巡宮

其戦功からいうても、其家柄からいうても尊氏が高師直を寵用して、彼に多大の權利を與へたのは決して偏頗の沙汰ではなかつた。

前回到いて師直の戦功を論うた私も京都に於いて彼が恣にした姦淫奢侈を辯護する筆は持たぬ。彼は故護良親王の生母の宅を改築増補して其處に私邸を營み門宇殿廊頗る宏麗を極めたとある。

師直の驕  
倖

又京都に入つて以來はしきりに諸王公卿の令嬢を奪ひ取り、これを數ヶ所に隠置し

尊氏と師

師直必ずしも悪人に非ず

諸王公卿の令嬢を姦す

二條前關白の令嬢汚

藤原冬信挑む

て淫虐を恣にした。其遣り口が如何にも東夷の心をまるだしであるから面白い。口さがなき京童は、執事の夜あるきを諷して、「執事の宮巡りに、手向を受けぬ神もなし」と謠つたとある。

中にも二條前關白の令嬢は、嬋娟たる美人にして、折よくば後宮、女御の數にも翠帳紅閨の裡に風をいたんで居たものを師直が暴力を以て盗み出した。

荒鷲が小雀の肉を裂くが如くにして師直は令嬢に迫つた。令嬢の操は忽ちにして其恐ろしい爪にかゝつて引き裂かれた。初めの程こそ忍んでも通つたが、程經ては公然妾の如くにして弄んだ。令嬢は涙の中に武藏五郎師夏といふ一子をさへまうけた。

けれども彼女に取つては心にもなき師直の事である。師夏を生んで後も鬱々として物思ひに沈んで居る。斯る處へ自惚れの強い物好きな公家が現はれて彼女を挑んだ。

大納言藤原冬信である。彼は姫が鬱々として樂まざる色ありと聞き傳へてさもありなむ。師直ごとき殺風景な男に姫をまかせて置くのは、豚に眞珠を投げてやつたも同じことゝいうたか、云はないか知らないが、兎に角マロならばといふ大さうな自信か



師直慈怒

ら、なまめかしい文を作つて姫のもとに贈つた。  
然るに此事が早くも師直の耳に入つたので武藏守、怒るまいことか、烈火の如く憤  
つて『おのれ憎きは冬信、青公家の分際で』といふので、即夜、兵を遣はして大納言  
の邸宅を焼き拂はせてしまつた。

戀の恨が  
放火騒ぎ

戀の恨みが直ぐ放火といふのであるから此は政子夫人の打毀しよりも酷しい。よし  
ない事をして馬鹿を見たのが藤原冬信である。あまり自信の強いものもよしあしであ  
る。

それから、危く師直の手にかゝらうとしたのが、吉野の上臈辨内侍といふ、これも  
妙齡の美人である、辨内侍は右少辨俊基の令嬢で、後醍醐天皇に仕へ世に美人の評判  
が高かつた。

輿の中に  
女の悲鳴

師直は深く辨内侍を戀し、例の手段を以て吉野の宮中から盗み出した。鬼のやうな  
軍卒どもが内侍を手籠めにして輿に押し込め、昇いて京都に走る途中折よく通りかゝ  
つたのが楠正行、輿の中に女の悲鳴をきいて『奇怪なり、あの輿の中をあらためよ』

辨内侍  
助けら  
る

といふ下知の下に、従ふ郎等がバラバラと駆けつけて、師直の軍卒どもと渡り合ひ、  
また、く間に一人残らず斬り殛して仕舞つた。  
さて輿の中をあらためて見ると、意外にもそれが宮中に仕ふる辨内侍であつたので  
相伴うて吉野に参内し、帝に事の顛末を告げまゐらすれば、帝も殊の外御感あり、あ  
らためて内侍を正行の妻に賜ふとの詔であつた、  
内侍も此縁談はうれしかつたに相違ない。處が正行、一首の歌を以て固く辭み奉つ  
た。

縁談  
うれしい

とても世に存生ふべくもあらぬ身の

かりのちぎりをいかで結ばむ

と。辨内侍も深く正行の義に感じ、其死後は、庵を大和の龍門の里に結んで行ひすま  
したといふ。

内侍尼と  
なる

これは『吉野拾遺』の記する處であるが、辨内侍を盗み出したのが、果して師直であ  
つたか何うかは頗る疑問である。此頃の大名は師直のみに限らず皆婦人の掠奪をやつ



重荷に小づけ

たものである。併し師直には二條前關白の令嬢といふものがある。『忠臣藏』の變名で世人に知られて居る鹽谷高貞の妻といふものがある。數へて見ると却々犯した罪は深い。辨内侍の事などは寧ろ『重荷に小づけ』の形かも知れない。次回は鹽谷高貞夫人のこと。

(一一三) 鹽谷高貞の妻

聲は鳩に似たり

鹽谷高貞は『忠臣藏』の色男役で、淺野長矩に擬せられた人であるけれども、實際は出雲國の田舎者で、聲は塔の鳩が鳴くやうであつたといふ。新田義興と同じ格の武者であつたに違ひない。

高貞の家系

此高貞といふ男、却々の内股膏藥で始終風の吹き廻しによつて進退を決したといふ形がある。高貞は出雲の大名で、隱岐守、佐々木義清の玄孫である。父貞清の時に至つて初めて鹽谷の姓を稱した。高貞は檢非違使となり、從五位下に叙し出雲守に補せ

られた。

高貞義綱を抑留す

後醍醐天皇は元弘三年隱岐に在し、富士名義綱に命じて密に高貞を諭し給ふと雖も、胸に一物ある高貞、容易に動かない、義綱を拘留して、さて鎌倉へ引き渡すでもなく暫くは日和見の體とあつた。

高貞の日和見

既にして帝、隱岐を遁れ出で、船上山に幸し給ふに及び、近國近郷の武士ども先を争うて馳せ參する。高貞も兵を發した。が、さて船上山を攻めるでもない。また、帝の御味方に參するでもない。豫て拘留してある義綱を連れて宗族千餘騎と共に八木に屯して進まない。

高貞官軍に降る

其處で船上山に於いては奇怪なる鹽谷が態度かなといふので、急に兵を發して高貞を攻めようとする、八木に日和を見て居た高貞、之を聞いて大に驚き、急に船上山に參つて其罪を謝したけれども、官軍は高貞の心を疑つて帝に近づけない、之を城外に屯せしめた。

鹽谷高貞の妻

四九一

鸞輿京都に還るの日、高貞は所部を率ゐて前衛となり一日先に京都に入つた。建武



高貞千里の馬を獻す

藤原藤房帝を諫め奉る

宮中隨一の美人

の初め、帝が馬場殿を高倉に建て給ひし時高貞千里の馬を獲て之を帝にすゝめ奉つた、却々如才のない男であつたものと見える。

これに就いて有名な萬里小路藤房の諫言があつた。かの千里の馬、骨相異常にして朝に出雲の富田を立つて、暮に京都に到着したといふので帝大に悦び呼びて天馬と稱し、左馬寮に飼養せしめ給ふ。藤原藤房參内して周の穆王、漢の文帝、後漢の光武帝を引き、帝を諫めて、天下の大勢を痛論し、禍亂の國內に潜伏して今にも爆發せむす形勢を説破した。これによつて見ても高貞が、大の喰はせものであつたことが分る。赤穂の長矩などとは似つかぬ男であつた。

隱岐守に任せられて、宮中隨一の美人弘徽殿の西の對の君を賜つたといふ。これが『忠臣藏』のかほよ御前である。

さて建武二年には高貞、尊良親王の手に屬して、足利尊氏と竹の下に戦ひ、前軍の敗走をきくと一戦に及ばずして尊氏に降參した。後年、高師直が謀叛の企てありと稱して高貞を尊氏に讒訴した時でも高貞にもう少し節操があつたならば尊氏とても爾

無節操極まる高貞

評直の淫虐

艶書の代作家として兼好法師

う易々とは信じなかつたのである。高貞に十分の弱點があつた處へ師直が附け込んだのである。云はゞ身から出た錆で、高貞の淺猿しい最後も蒔いた種を刈り取つたといふまで、あつた。

公家の令嬢達を喰ひ散らして飽足りない執事師直は昔頼政に賜つた菖蒲前ほどの美人あらば、國の十箇國、所領の二三十箇所とも交換しようといふので漁り抜いた結果茲に鹽谷高貞の妻が美人の噂をきいてそれに目ぼしをつけた。

彼は先づ侍従といふ女を通じて屢消息を通はせ、兼好法師や、薬師寺公義などに艶書を書かせて、鹽谷夫人をそゝのかしたが、何の甲斐もなかつた。『徒然草』では一通り悟つたやうなことをいうて居るが、兼好法師も權勢の前にはひれ伏して、艶書の代作までもしたものと見える。これに比べると堺利彦氏の『賣文社』などは結構なものである。明治の文學者の中にも案外、艶書の代作位はした人があるかも知れない。

兼好法師の筆を以てしても、更に反響がなかつたので、師直はいよゝ／＼焦り立ち、侍従を促して直接談判と出かけた。サアこれからが大變な幕である。東京大久保の何



の某君と元祖争ひをしようといふ湯殿のぞきの一件は之を次回に述べる事とする。

(二二四) 師直の淫虐

師直は侍従を促して、鹽谷高貞の邸内に覗ひよつた。それは湯殿の廻りであつた。

宮中隨一の美人と謳はれたる鹽谷夫人は今湯から上つたばかりの處であつた、大理石のやうな肌を淡紅梅の色に染めて、其上に氷のやうな練貫の小袖のしほ、とあるをかい取つた美しさ、ポット上氣した顔、露のしたゝるやうな瞳、ぬれ髪が行く方長くかゝりたるを袖の下に、部屋の内には空炷きの煙、残んの匂ひが強くはげしく師直の官能を刺戟した。

師直は小鼻をいからせて覗いて居たが、『物の怪の憑きたる様にわな／＼と慄ひ』出した。

高貞夫人の妖艶

師直はわなと慄

是が非で

平生の心がけが悪

師直高貞夫人を追せしむ

執事殿これは是が非でもといふことになつてしまつた。一代の才筆兼好法師の代作を以てしても彼女を口説き落すことが出来ないのは、鹽谷高貞といふ邪魔ものがあるからである、これは何でも高貞をなきものになければならぬといふので、師直いろいろに構へて高貞に謀叛の企てありといひふらした。

高貞といふ人が『忠臣藏』の高定ほどに正直な人ならば、恚んな讒誣にかゝるのではなかつた。處が此人、前にもいふ通り、平生の心がけに甚だ面白からぬ處があつたので、トウトウ其畏にかゝつて身を亡ぼすに至つた。

高貞は所詮免れぬ所と覺悟して、家の子三十餘人を率ゐ、遊獵と稱して京都を免れ出た。無論國にかへつて、兵を擧げる積りであつたのである。

さてまた大切の大切の女房には、八幡六郎等二十餘人を附して間道から出雲へ落したが、師直の目的は此一行にあつた。彼は桃井直常、大平義尙、山名時氏及び其子師義を遣はし、道を分ちて鹽谷一家を追躡せしめた。

八幡六郎の一行は播磨の陰山に於いて直常、義尙の兵に追及せられた。六郎等二十



鹽谷夫人  
死して操  
を守る

婦人道徳萌芽の時代

四六

餘人は何れも奮戦力闘して斃れた。鹽谷夫人は生きて師直の辱めを受くるに忍びずといふので六郎と共に自殺して果てた。全く美貌が身を殺したのである。

一方には時氏と師義、高貞を追うて山崎に至れば、高貞の臣來海五郎といふものこに要して拒ぎ戦ふ、高貞は其隙に乗じて出雲に還ることを得たが、國內の人心頓に離反して收拾の途がない。木村兼綱と佐々布山に走らんとして宍道の里に至る頃、一人の兵卒がかけつけて、夫人の自害を告げた。高貞聞いて失望落膽し、大に師直の不義を恨みつゝ屠腹して果てた。兼綱は首を泥中に埋めて自分も其骸の側に自殺したが、時氏足跡を泥濘の中に見出して高貞の首を獲、これを京都に傳へて恩賞に與つた。鹽谷の妻が早くも京都を落ち延びたと聞いた時、師直が大に残念がつて、『憾むらくは早く發せずして此美女子を失ふ』といったとあるのは史家のオマケではあるまいか。何れにしても師直の淫虐は概ね此類であつた。

高貞亡ぶ

師直の品行は問題に非ず

師直が亡びたのは其淫虐の行爲が一世の問題となつたのではない。彼は副將軍直義の執事上杉重能と權勢の争ひをしたのである。初め重能が其黨人、畠山直宗と謀つて

師直尊氏  
を脅かす

師直を誅戮しようとした時には、山名、今川、細川、仁木、土岐、佐々木の諸大名何れも先を争うて師直方に馳せ參じ尊氏を脅迫して直義の職を解かしめ、重能、直宗を放流して、中國探題直冬(尊氏の子にして直義に黨す)征伐の兵を發した。

師直副將  
軍を殺さ  
んとす

執拗なる師直は之を以て足れりとせず、なほ尊氏に迫つて、重能、直宗を謫所に殺し、併せて直義をも殺さうとした。直義は師直の意を憚り、剃髮して閉居したが、師直は未だ心を許さない。正平五年、九州に走つた直冬が兵をあげて勢大に振ふ由を聞いた師直は尊氏を促して親征の軍を起さしめ、其トサクサに紛れて直義を殺さうと企てた。直義は即夜逃亡して南朝により、師直征伐の軍を起した。

桃井直常  
直義に黨  
す

茲に越中の大名桃井直常(忠臣藏)の若狭之助(は奈良般若坂の戦ひに北畠顯家の軍を破つて大功を立てながら、大局の功を師直に奪はれたのみか、尊氏の行賞が當を失したのを憤つて不平滿々たる折柄、直義が師直に對して戦を開く由を聞き、此處ぞと直義に加擔し、越中にかへつて兵を擧げた。

師直の淫虐

四七



(一一五) 師直殺さる

御影濱の戦

石塔頼房、畠山國清、これも豫て副將軍直義に心を寄せた大名であつたが、桃井直常越中に兵を起して直義に應ずるよしを聞き、共に兵を進めて尊氏、師直の軍と御影濱に戦ひ、大に之に打勝つた。

尊氏の本意

もと尊氏と弟直義との間には、十分に了解があつたけれども、尊氏としては師直を捨てる譯には行かなかつた。師直と直義との喧嘩に於いて尊氏は全く板挟みの地位に立つて居た。師直の背後に山名、今川、細川、仁木、土岐、佐々木などいふ諸大名の勢力がなかつたならば、尊氏或は弟直義の議を容れて、師直を誅したかも知れなかつた、尊氏が師直に伍して、直義の執事、重能及び其黨人直宗を殺したのは、決して其本意ではなかつたのである。止むを得ざるに出でたのである。

師直松岡城に走る

御影濱に大敗した尊氏、師直は走つて松岡城に據つた。直義の大軍は窮追して十重二十重に取り圍んだ。尊氏は到底其免る可からざるを知つて將に自殺しようとする處

師直四國に走らんとす

へ、饗庭氏直が駈けつけて和議の成立したことを告げた。

和議は成立したけれども師直は到底自分の命の助からぬことを察した。自分が殺さうとして果さなかつた直義が、何うして自分の命を助けて呉れる者であらうか、彼は弟師泰とひそかに敵の圍みを遁れ出でて、四國へ落ちようと企てた。

師直僧に扮して出づ

彼等は先づ剃髮して罪を謝し、直義に就いて降を乞うた。師直は道常、師泰は道勝と改め身に法衣を纏ひ、菅笠を目深に被り、敵の油断に乗じて馬を急がせた。

曩に師直の手にかゝつて、謫所に無念の最後を遂げた直義の執事、上杉重能の二子顯能は、道に要して師直の一行を支へ止めた。

顯能の臣、三浦八郎左衛門は馬を躍らして、師直にせまつた。三浦の從卒は左右から進んで大に罵つた。

三浦八郎左衛門師直を斬る

『何もの、偽僧ぞ。笠を脱げ！ 無禮な奴め』  
といふより早く、師直の笠をはねとばした。笠の主はなほ頭巾で顔を包んで居たがそれは擬ふ方もなき高師直であつた、三浦八郎左衛門は大喝一聲、

師直殺さる

四六



吉江時宜  
師泰を殺す

『おのれ師直、主君の仇！ 思ひ知れよ』  
と一刀の下に斬り殺す。後に續いた師泰は此體を見て大に懼れ馬をかへして逃げ出さうとすれば、吉江時宜槍を抽いて刺し通す、師泰は刺されながらも衣の中に匿した刀を抜かうとする、處へ時宜の從卒が駆つけて馬から引き摺り下すと其儘一刀の下に其首をあげた。

高の一族  
亡ぶ

從ふ所の宗族十餘人、皆顯能の手に討取られてさしも權勢を誇つた高家もこゝに其根を絶されたのである。

さて、南北朝の頃といへば、武士の狼藉は大かた師直と五十歩、百歩のものであつた。

妻が夫に  
殉ずると  
いふ風

處が茲に注意すべきは之に對する女の態度である。男子の女子に對する態度は平安朝時代から鎌倉時代、鎌倉時代から南北朝時代と時を経るに隨つて強壓的になつて來た、處が女子の男子に對する態度は全くこれと正反對である。『貞女兩夫に見えず』などいふ道德の固定したのはズツと後の事であるが女が其一たび許した夫の難に殉ず

單に愛情  
の結果と  
可からい  
ふ

足利時代  
の婦人は  
容易に其  
容に容  
さす

る死んで仇敵の辱めを避けるといふ傾向は確に此頃から明かになつて來たのである。  
重ねていふ當時の女が夫の難に殉じたのは決して『貞女兩夫に見えず』といふ道德の觀念から割り出したのではない。然しながら私はこれを以て、或る人のやうに愛情の結果とのみ解釋する事も出來ぬ。若し愛情の結果のみで女が男の難に殉ずることが出來るものであつたならば、大化の新制以前でも、又平安朝時代でも、夫の難に殉じた女が澤山にありさうなものである。處が上古から平安朝の頃にかけては、女が男の難に殉ずるといふ例が極めて少かつた。否反つて、自分の夫を殺した仇敵に身をまかせて、平氣で居たといふ例が頗る多かつたのである。  
處が足利時代になると、女が却々仇敵に操を許さなくなつて來た。句當内侍でも、辨内侍でも、夫の死後は尼となつて世を捨て居る、鹽谷高貞の妻も師直の手にかゝるのをいやがつて播磨の山に自害した。少將でさへもなれては義興にまことを盡し、それが爲に殺されて居る。次には更に進んで二三の例を述べて見る。



(一一六) 戦争、女、貞操

藤房の愛人

萬里小路藤房にも左衛門といふ愛人があつた。後醍醐天皇の中宮に仕へて美人の評判が高かつた。藤房此女房と、なれそめて深くかたらひける處に、元弘の騒動となつて、帝は笠置に御幸、藤房も斷腸の思を忍んで此女房と別れなければならなかつた。藤房鬢の髪を切り、一首の歌を添へて此女房におくつた。

黒髪の亂れむ世までながらへば

これをいまはのかたみともみよ

左衛門の雑兵に辱しめられんとす

左衛門はこれを見て歎きかなしみ、伏し沈んである處へ急に關東の雑兵どもが亂入して、右と左から左衛門を引つとらへた。梨花一枝、春、雨をおびたる風情のあでやかに、忽ち野心を起した雑兵ども、あはや落花狼藉の始末に及ばんとするのを、左衛門はひたすらにすかしなだめ、巧に欺いて狼の手を遁れ出た。

左衛門いまは世にながらふ可くもあらずといふので、藤房の歌に自分の歌を書き添へた。

書き置きし君が玉章身に添へて

のちのよまでの形見とやせむ

左衛門の自殺

かくて彼女はかの形見の黒髪を抱き大井川の淵に身を投げて死んだ。平家の女房などに見られぬ心中立である。

武家の女房

勿論辨内侍や左衛門の如きは例外として見るべきもので、多くの女房は、『世を浮草の寄る邊なくさすらうて、誘ふ水あらば』といふ態度であつたらう。併しながら之を藤原時代、平家時代の女房達と比べて見ると、大變な相違である。夫の難に殉ずるといふ風は、勿論、宮中の女房よりも武家の女房に多かつた。

右京亮の時治の妻

『太平記』に右京亮時治が死にのぞんで女房を諭したといふ言が載つて居る。時治は既に戦死と覺悟して女房にいうた。

『御身は女性の事なれば、敵に知らるゝとも殺さるべき恐れなし。如何なる人にも相なれて、心安く世を送るべしと思へば、我等いまはの際に思ひ置くこと更になし』

戦争、女貞操

三〇三



鎌倉の妻  
時治の川  
に投ず

死ぬ可き  
義理

絶對的  
從屬關係

と。敵に知られても殺されない。如何なる人にも相馴れて無事に世を送る事が出来るといふのは此頃未だ世に『貞女兩夫に見えず』といふ道德のなかつたことを證するものである。道德律はなかつたけれども、時治の女房は二人の子とともに鎌倉の河に身を投げて夫に殉じた。彼女は夫の言葉をきくと其膝に伏し沈んで、  
『君と別れてまた何處にか身を寄すべき、希くは思ふ人と共に苦の下までも同穴の契を忘れざらむ』

と、かき口説いた。

女房が夫の死に殉ずるのは無論愛情の結果でもあらう。然しながら、愛情ばかりでは死なれない。死ぬべき義理がなくては死なれない。死ななければ、死にまさる苦痛を受けるといふ場合でなければ死なれない。

先づ、考へて見ると、此頃に至つて武士の女房は、鄙も都も一般に男の經濟的從屬者となり了せた。彼等は全く男子の私有財産の一部となり了せた。

彼等の家庭に於ける職責は、育兒のこと一つとなつて、其衣食は盡くこれを男の働

婦人に自  
活の能力  
なし

苦い經驗  
の結果

きに待つことゝなつた。茲に於いてか、彼等は其夫の難に際して、自分一人身を完うすることが出来ない義理となつて來た。

既に此義理のある處へ實際から考へても、女が多くの子供をかへて戦塵の間をウロ／＼するといふのは出来ないことであつた。彼等は久しき間の從屬的關係によつて全く自活の能力を失つて居る。武士の妻は殊にそれが甚しかつた。其處で一旦夫に分れたが最後、何うしても一人では行けぬ。第二の夫を求めてそれにたよらなければならぬ。

彼等とても最初は無論死をのがれて第二の夫を求めたに相違ない。第二の夫は多くの場合に於いて、第一の夫の仇敵即ち征服者であるべきは見易き道理である。然るに彼女が多くの子供をかへて其仇敵に身を委ねた結果は何うかを見ると、ヤハリ損である。死にまさる苦痛を買うたに過ぎぬ。(第八十一―八十五項参照)

これが私有財産制度の確立につれ、保元、平治の亂以來、二百年間の經驗によつていよく明かになつて來た。其處で武士の妻たるものは、イツツ夫と共に死んだ方が



道徳は常に勘定高

婦人道德萌芽の時代

五〇六

まじであるといふ事になつて来た。「貞操」といふ道德律に先だつて「殉死」といふ事實が生れた。道德の根底には何時でも損得の勘定が伴ふものである。

### (一一七) 烈婦と妖婦

良妻賢母か街情家

婦人は「家」といふものについて良妻賢母となるか。「家」といふものを離れて、巧に男の情を弄ぶことを以て本領とする、所謂街情家となるか。二途其一を擇ぶべき境遇に陥つた。

良妻賢母と妖婦とは影と形の如くにして離れないものである。良妻賢母の多い社会には、それと同時に街情婦人が多い。理屈はいはぬ。少くともこれは事實である。

影と形の如し

楠正成の妻の如く、良妻賢母の典型ともいふべき烈婦を生んだ南北朝時代は又一方に、菊亭殿のお妻の如き「腕の凄い」女を生んだのである。

正成の妻は何氏の出なるかを審かにしない。正成が湊川に出陣する時に、子の正行

櫻井驛の訣別

は甫めて十一歳であつた。

延元元年五月、楠正成は弟正季子正行と共に、湊川出陣の途に上つた。十六日、櫻井驛に於いて、正成は子正行を膝下に招き、曾て帝より賜はつたる菊作りの寶刀を授け、さて徐に誠めていふやう、

正成其子正行を誠しむ

『いかに正行、汝幼なしといへども既に十歳を過ぎたれば、父がいまはに遺す言こそあれ。深く心に銘して忘るる勿れ。今回の戦ひは天下分目の争ひなり。おもふに我また生きて汝を見る事能はじ、我討死したりと聞かば天下盡く足利氏に歸せんこと疑ふ可からず。汝成長の後は慎みて利害禍福を計れ。眼前の小慾に惑ひ、百年の大義を忘れて父の名を汚すこと勿れ。苟くも家の子郎黨にして一人の存するものあらば、率ゐて以て金剛山の舊趾により、身を以て奉公の誠を致せ。汝の我に報ゆる所これより大なるはなし』

正行悲歎

と。正行は父の言に泣くく、河内に歸つてなほ悲歎の涙にくれて居たが、其處へ尊氏から正成の首を送つて来た。眼のあたり父の首を見て、豫て覺悟の正行も忽にして

烈婦と妖婦

五〇七



正行自殺の覺悟

取り亂した。少年の彼としては尤もの事である。佛壇の前に座し、前の日父より授けられたる菊作りの寶刀を以てあはや自殺に及ばんとする處を飛び込んで、支へ止めたのが、正行の母、正成の妻であつた。

正行の母

『血迷ひしか正行、故判官殿の御身を河内にかへし給ひしは、御身をして死後の菩提を弔はしめんがために非ず。また、殉死せしめんが爲にも非ず。家の子郎黨をかり集めて再び菊水の旗を擧げ、叡慮を安んじ奉れとの御遺言に非ずや。前の日御身かへりて妾に其由を告げぬ。其時の言いまにありありと妾が耳にのこりて昨日のやうに覺ゆるを、御身は早くも忘れたるか、不覺なり正行。かくては他日の奉公もおぼつかなし』

鎌倉以前の歴史に此模倣な

と、容をあらためて誨へたので、正行も大に愧ぢ、それからばかりそめの遊戯にも博戦馳驅のさまをなし、賊を討ち讐を報ずるの形に擬へたといふ。『家』のために、悶え絶えなんばかりの悲しみを忍んで、子を育てる。子を育て、夫の遺業を繼がしめんとする。烈婦正成夫人の如きは、鎌倉以前の歴史に於いて曾て其

菊亭殿のお妻

影を見ざりし所である。

菊亭殿のお妻といふ女は、大さうな妖婦であつた。この女は、京都に乗り込んだ田舎武士の弱點を押へて、其纖細い、優しい手の中に、常に二三人の髭男を丸め込んで居たのである。

高土佐守の自惚

正直な武骨もの、高土佐守は、お妻を我ひとりの嬖妾と信じて心私に誇つて居た。此土佐守が伊勢の守護職を命せられて任に就く時、是非にといふのでお妻を引き立てた。お妻は大に迷惑に感じて何のかのといひ遁れようとしたけれども、高土佐守はいつかな承知しない。何がさて一廉の色男と信じて居るのだから手がつけられない。お妻もトウトウ輿で伊勢くんだりまで送られる事となつた。

土佐守欺かる

處が土佐守勢多の橋まで来て輿の中をしらべて見ると、こはそも如何、輿の中からは八十ばかりの齒の一つもない古尼が出て來た。

土佐守、烈火の如く憤つて菊亭に押しかけて見たが既に影も形も見えない。其處で飽浦信胤といふ情夫の家を嗅ぎつけて襲撃しようとする、信胤はいち早く南朝に降



參して仕舞つた。宮方も好い面の皮と申すべしである。

(二二八) 富子夫人

日かげの女王

曾て歴史の表面に立つて働いた日本婦人は、大化の新制以後、漸くにして社會の裏面に踏躑し、鎌倉武士の女房に於いてわづかに其名残を見る事を得たが、それも足利氏の末世に至つては、全く閨房の裡に姿をかくして、そこに凄腕を揮ふ所謂『日かげの女王』と化し去つた。

三時代の三女傑

婦人が社會の表面に其能力を發揮した時代の代表者としては先づ神功皇后を推し奉るべきである。婦人が社會の裏面に其能力を發揮した時代の代表者としては春日局を推すべきである。淀君も此時代を代表する婦人の一人ではあるが春日局に比べると人物が一段落ちる。そこへもつて來て對手が太閤であつたからそれにけおされた形もある。爾うして此二つの時代を繋ぐ過渡時代の大人物は政子夫人、所謂尼將軍である。

近世史の用意

『大日本開門史』もいよ／＼近世期に進んで、淀君、春日局を説く準備にとりかゝらなければならぬ事となつた。

南北朝時代の評論に於いて讀者諸君は曾て鎌倉武士の女房に名残をとめた日本上古の婦人氣質が全く跡を絶つに至つたこと、及び新道德の先驅としてまづ婦人の殉死といふ事實が現はれたことを了解せられたであらう。

閨門の勢力

更に進んで足利氏の末世から、戰國時代にかけて、婦人が盛んに暗中の飛躍を試みた。換言すれば閨中の勢力を恣にするに至つたことを見ると、いよ／＼其經過が明かになる。

義満夫人日野氏

將軍義満の夫人、日野氏に其端を發した閨房の煩ひは、延いて義政に至り、突然、爆發して應仁の亂となり、遂に足利氏の天下を覆へすに至つた。

初め、將軍義政は、夫人富子の腹に子がなかつたので、弟義尋を嗣子に立てようとした。義尋は當時剃髮して出家の境涯にあつたが、却々義政のすゝめに應じない。といふのは、義尋豫て義政の氣質を知つて居る。後に至つて實子が出来た爲に家督を變



義尋の選

更なるなどいふことがあつてはならぬと思つたからである。  
所が、義政はなほ熱心に義尋を説いた、假令實子が生れてもそれは直に出家させて仕舞ふ。決して家督を變更するやうな事はないといふ固い契約の下に、義尋は義政の嗣子となる事を承諾した。義尋は還俗して名を義視と改めた。これを今出川御所と呼び、細川勝元が其執事となつた。

伊勢貞親 義政に寵

此頃將軍義政の寵臣に伊勢貞親といふものがあつた。幼名を七郎といひ、高望王の玄孫、常陸助正度の後とある。貞親十六歳にして兵庫助に任せられ、文安中備中守となり従五位下に叙し、京徳中従五位上に進み、侍従を経て伊勢守に任せられた。康正元年従四位下に進み、文正元年には内書右筆となり、一躍して飛ぶ鳥も墜すばかりの勢ひとなつた。幕府の役人が貞親を呼んで父といひ、其妻を呼んで母といふたのである。以て如何に其羽振りがよかつたかを知るべきである。

甲斐氏 甲斐の女

貞親の妻は甲斐氏の女で、當時世に聞えたる美人であつた。將軍義政が貞親の邸に名高い湯殿を設けたのは此妾に肩を流して貰ひたいばかりであつたといふ。貞親がト

富子夫人 人身む

ン／＼拍子に出世をした理由もこれによつて略察する事が出来る。  
義政が貞親の邸に入り浸つて居る間夫人富子は日野勝光と共に威福を恣にして居たが、何うしても出来なかつた子が何時の間にか其腹にやどつた。爾うして間もなく義尙が生れた。

富子夫人 義政を説

さて我子が生れて見ると富子はそれを出家させて、將軍の職を他人の義視に譲るに忍びない。其處で彼女は何ういふ手管を以て義政の心を動かしたのか知らないが、兎に角、暗黒の中に義政を虜にして仕舞つた。

山名宗全 起つ

さて富子夫人は義視を排斥しようとしていろ／＼に苦心したけれども、義視には細川勝元といふ立派な後見があるのでウツカリ手を出す譯には行かない。其處で勝元の敵黨たる山名宗全を呼んでひそかに機密を含めた。  
何故、勝元と宗全とが相反目して居たか。



(二二九) 閨中の大權威

勝元と宗全

細川勝元と、山名宗全とが何故に相反目して居たか。管領勝元は義視の後見として權勢並ぶものなきに對し、宗全は大國を擁して家富み兵強く、其實力が殆ど勝元と匹敵して下らなかつた。此兩雄が互に相敵視するに至つた最初の原因は畠山家の家督相續問題である。

畠山家の相續争ひ

これより先、畠山持國に子がなかつたので、姪政長を養つて嗣子としたが、間もなく持國は義就といふ一子をまうけた。其處で持國は我子の愛にひかされて政長を廢し、義就を立てようとした。政長は走つて勝元により、其援けを請うて持國の不義を懲さうとした。

義就兵を擧ぐ

持國も管領勝元に出られては堪らない。大に陳謝して政長を迎へ、義就を逐うて改心の意の表した。義就の家を逐はれて河内に走り、若江城に據つて兵をあげた。政長は細川勝元の助

宗全義就を助く

勢を得て之を攻め、嶽山の要害を陥れて義就を高野に追ひ、更に吉野に窘迫した。處が嶽山の戰に於ける義就の奮戰健闘を聞いた山名宗全は、膝をうつて感嘆した。戰にこそ敗れたれ、義就は天晴大將の器であるといふので、寛正四年十二月、義就の爲に將軍義政を説き、罪を赦して京都に歸らしめた。これが勝元と宗全との睨合のはじまりである。

斯波氏の相續争ひ

勝元は宗全の面あてを心に深く含んで居る所へ、又ぞろ同じやうな事件が起つて來た。それは斯波氏の家督相續問題である。

義敏九州に走る

これより先、斯波家の總領千代徳が早世して、子がなかつたので、一族大野の一子義敏を以て繼嗣とした。所が斯波家の權臣甲斐常治といふものが、前項に述べた幕府の右筆、伊勢貞親といふものを抱き込んで義敏を斥け澁川義廉を立て、繼嗣とした。其處で義敏は九州に走り、大内教弘によつてひそかに事を企つる中、フト自分の妾が、かの伊勢貞親の嬖妾と姉妹であるといふことを知つて、巧に其縁を利用した。斯くの如くにして應仁の亂は徹頭徹尾、婦人の暗中飛躍によつてなされたのである。



妾同志の運動

義廉宗全に倚る

宗全と勝元の對抗

さても義敏は自分の妾に大事をふくめて貞親の妾に取り入る。貞親の妾も血を分けた同胞の頼みであるから、頻りにそれを貞親にすゝめる。貞親も閨中の大權威には敵す可くもなく、トウ／＼甲斐常治を賣つて義敏に味方する事となつてしまつた。幕府の父と呼ばれた伊勢貞親が將軍を動かしたので、義敏は忽ち京都に呼び返されて、斯波家の家督といふことになつた。

處が澁川義廉は將軍の命を拒んで服さない。分國の兵を召集し、山名宗全をはじめとして一色、土岐の諸侯によつて義敏に反抗の氣勢を示した。これが寛正六年のことである。

山名宗全は先づ列侯を誘ひ、運署して貞親の專横を幕府に懇へ、速にこれを誅戮すべしと強請に及んだ。貞親もこれには大に恐れ、逃走して其跡を晦ました。大勢上、是は無論勝元によつたのである。

斯くの如くにして勝元と宗全とは、畠山、斯波兩家の家督争ひに與つて夫々一方に黨し、互に兵を集め威を示して今にも一戦に及ばんず形勢となつて來た。恰も此時で

ある。將軍義政の夫人、富子は、山名宗全を召して義尙のことを依頼に及んだのである。(前項参照)

宗全勇躍

宗全は雀躍して喜んだ。

茲に於いてか、將軍家の義視を始めとして、畠山家の政長、斯波家の義敏等正當の嗣子にして、理由なく家督の權利を奪はれんとしたるものは皆細川勝元により、其援助を乞うて自家の權利を主張せんとし、將軍家の義尙を始めとして畠山家の義就、斯波家の義廉等家督を争ひて得ざるものは皆山名宗全により其實力に倚賴して自家の目的を達せんとするに至つたのである。

三家の家督争ひ一時に爆發す

應仁元年正月、戦争は先づ畠山政長と畠山義就との間に開始せられた。

富子夫人の操縦によつて實子義尙の愛に溺れたる將軍義政は其裁決に感うた結果、奇怪とも奇怪千萬なる命令を發した。

奇怪千萬なる命令

『義就、政長は各其私兵を以て雌雄を決すべし。諸將相助くること勿れ』と、これが一國治亂の責を双肩に負うて立つ、將軍の命令であるといふから驚くべ



めでたうか。

(一一三〇) 富子と政子

大市街戦  
始まる

然るに山名宗全は、將軍義政の命令に従はずして、義就を助け、撃つて政長を走らせた。

勝元は大に怒つた。直に諸國に檄して十六萬の兵を京都に集めた。宗全も之に對して十一萬を集めた。

兵燹京都  
を滅す

勝元は早くも將軍義政を拉して幕府の東に陣し、宗全に相對して西に陣した。世に勝元の軍を東軍といひ、宗全の軍を西軍といふ。

兩軍何れも火を洛中に放つて、先づ戰場を作る。炎焔天を焦し、禁裡を始め、社寺、邸宅皆灰燼に歸し、さしも繁華を誇つた京都の市街も、一朝にして荒寥の原野と化し去つた。

勝元天皇  
を擁し奉  
る

初めの程は東軍が大に利を失つた。これは例の將軍義政が、義尙の愛に溺れて東軍にありながら西軍に心を寄せたからである。勝元もこれに氣づいたから、こんどは後土御門天皇及び後花園上皇を花御所に迎へ奉つて士氣を鼓舞した。

之に對して宗全も亦義視(義政の弟)を拉し來り、將軍兄弟の相争ふが如くに見せかけた。

義就東軍  
に降る

文明四年に至り西軍の畠山義就が東軍に降參した。思ふに義政の内命によつたものであらう。これよりして北國の交通が開け軍糧が多く東軍に聚るに及んで、勝元方は大に其勢ひを恢復した。爾來、西軍の將卒相率ゐて東軍に降るもの多く、宗全は頓に其勢を失した、

宗全勝元  
共に死す

文明五年には山名宗全先づ死し、尋いで勝元も死んだけれども、餘黨の争ひはなほ息まなかつた。この年の十二月に入り、義尙始めて征夷大將軍を拜し、義就管領の職を繼ぐに及んで、義政の宿志もこゝに達し戦争も一段落を告げた。

かくて文明六年には山名政豊と、細川政元との和議もなり、越えて九年には西軍の



京都漸く  
静にして静

荒寥たる  
京都

飯尾彦六  
の歌

婦人道德萌芽の時代

五三

諸將、皆京都を去り、義視美濃に退くに及んで洛中漸く静謐に歸した。應仁元年からこゝに前後十一年、京都の大半は荒廢に歸し去つた。

大内の築地は破れて、内侍所をもれる燈影が、微に三條橋のほとりから望まれる。心なき京童は群をなして禁城に入り、さまざまの遊戯に日の暮るゝを忘れた。右京の地は(戰場となつた所)閑寂として行人絶え、左京の地さへも人家は極めて稀であつた。高倉の東は鴨川の流れ、徒に昔の面影を語るのみ、五條以南は全く荒寥たる雜草の野であつたといふ。飯尾彦六といふものが俯仰古今の感に堪へずして、

なれや知る都は野邊の夕雲雀

あがるをみても落つるなみだは

と詠んだ歌に見ても、猿樂や、茗宴や、奢侈と遊樂の中心であつた京華の地が、如何に荒廢を極めて居たかを知るべきである。

日本歴史の上に戦國といふ一新時代を劃した應仁の亂は、もともとが三家の家督争ひから起つた。早くいへば私有財産の争奪である。然り、權門の家督争ひが、三十萬の大

私有財産  
と女

兵を京都の地に動かしたのである。京都の文明を盡く灰燼に歸せしめたのである。私有財産の背後には昔から必ず女がある。將軍義政の室、富子夫人が、自分の腹をいためた義尙に將軍職を譲り度いばかりに、ひそかに、山名宗全を動かした。更に、將軍義政に至つては、富子夫人の愛と、實子義尙の愛とに迷うて、天下の大動亂を未然に拒ぐことが出来なかつたのである。

義政と源  
賴朝

讀者諸君は足利義政と私が曾て説いた源賴朝とを比べ、義政の室富子夫人と賴朝の室政子夫人とを比較して如何の感をなすか。賴朝は世に嫉妬深い、残忍冷酷な大將とそしられながらも、天下泰平の爲に、弟義經、範賴を殺したのである。更に政子夫人は、其賴朝の遺した鎌倉の憲法を遵奉せんが爲に、現在自分の腹を痛めた賴家、實朝が殺されるのを坐視して忍んだのである。權威の存する處に悲惨の影は絶えないと西洋のヒューマニストは喝破したが、一國治亂の責を双肩に負うて立つものは、時に自分の骨肉の死を坐して傍觀する位は止むを得ないのである。

將軍義政及び富子夫人は一子の愛に溺れて、前後十一年に亘る大市街戦を惹き起し、

富子夫人  
と平政子

富子と政子

五二



爲政者の  
戒むべき  
もの二つ

京都の文明を一炬にして灰燼に歸せしめたのである。

噫、私有財産と女！爲政者の心に銘して戒むべきは此二つである。

(一三二) 公娼制度の起原

例によつて此時代に於ける賣淫史の一節を叙する事とする。

遊女、白拍子、傀儡子のことは既に説いた。其後、物換り星移つて治者も被治者も幾度か其人をかへたけれども賣淫制度の發達は世と共に進んで毫も衰ふる所を知らなかつた。

足利氏十五代の天下は諸大名の跋扈を以て始まり諸大名の跋扈を以て終つて居る。人は、應仁の亂以後を戰國といふが、尊氏の晩年、執事師直と副將軍直義との拮抗以來、足利氏の諸侯は互に派を立て黨を結び、侵襲攻略して中央政府の權威を無視し、更に其命令を奉じなかつたのである。されば嚴密なる意味に於いていへば足利氏の天

戰國時代  
は何時か

賣淫の風  
益々盛な

十五代を  
通じて戰

下は十五代を通じて全く戰國の代であつたといつても敢て支障はないのである。而も將軍は此間に在つて毫も秩序の恢復に意なく、徒らに豪華華美を衒ひ、荒淫漁色を事として天下を塗炭の苦しみに泣かしたたのである。

財政難

斯くの如くにして財政の窮迫は當然の事である。財政難は足利氏十五代を通じての病根であつた。或時は貨幣の供給を明國に仰いで一時の破綻を彌縫した。又或時は「徳政」と稱する奇怪千萬なる法令を發布して一切の貸借關係を破棄せしめ、果ては百姓一揆の暴行によき口實を與へた。

傾城局の  
新設

更に將軍義晴の時に至つては、財途窮迫のあまり、新に傾城局と稱する一官府を新設し、洛中洛外の賣春婦に一々營業公許の券面を下附し、御用と稱して一人につき一年に十五貫文づゝの税金を徴收した。

これ日本に於ける公娼制度の濫觴であつて二千年來曾て其例を見なかつたことである。それにしても天下の民が塗炭の苦しみに陥つて居る最中、賣春婦のみは、此重税の負擔に堪へ、なほ綽々として餘裕があつたといふのであるから、私達は之によつて



明治晩年の不景氣と新橋の花柳界

之等賣春婦の對手が多く上流の權力者であつたといふことを想像する事が出来る。

明治の晩年に於ける大不景氣に際しても第一流の金族と官僚とを客とする新橋の繁昌は實に目覺しいものであつた。經濟界の萎靡沈滞が其極に達した時に於いても新橋に於いては一人の妓を聘するに三日も前から約束を要するといふ有様であつた。

遊女桂花

當時京に桂花と呼ぶ有名な遊女があつた。山城の國桂の里から出た女で、足利義澄などは此女を殿中に召して盛んに遊んだものと見える。其家は五條の東の等院にあつて、薄雲、春雨などいづれも其頃世に知られたる美人の群に立ち交り、道行く貴人を見たと袂に縋り、袖を引いて遊興をすゝめたものと見える。之を想ふに今の六區の公許された様なものでもあつたらうか。

薄雲、春雨

數人の女が一人の男を包圍して座敷に引き上げると先づ酒肴をすゝめて、心ざしのある女に盃を差し給へとすゝめる。やがて盃が決ると巧に席を外す女もあり、居残つてとりまきをする女もあり、召があれば客の邸にも推參したものと見える。又、同じ頃加賀といふ女があつて之も措紳の寵をうけ盛んに諸方の殿中に推參した

遊女加賀

ものと見える。加賀といふのは其生國を取つて名としたものでもあらうか、何れにしても其淫風の盛んであつたことを察するに足る。

湯女の濫

『立君』『湯屋風呂の女童』などいふものも此頃から起つて諸書に見はれて居る。後世の辻君、湯女は既に足利氏の頃から世に行はれて居たのである。應仁の亂以後は中部都市の荒廢と共に四國・九州、中國沿海の都市が非常な勢で發達した。(拙著『町人の天下』參照)中央政府の權威を蔑視して私に京都の制度を邊境の封疆に營んだ諸大名は、盛んに大船巨船を浮べて海外貿易を行ひ、巨萬の國富を蓄積して大に自ら擬する所があつた。之と同時に個人の海外貿易も亦頗る盛んであつた。和寇、所謂八幡船は人之を呼んで海賊といふが實は刀杖武器を携へたる一種の貿易商人であつたのである。

沿海都市の大發達

斯くの如くにして應仁以後中央の都市を追はれたる遊女娼婦が、相携へて四國、九州、中國の港津に集り、朝夕帆影を送迎して鬻笑をなしたことはいふ迄もないことである。



### 第六章 婦人の絶對的服従

#### (一三三二) 戰國策と婦人

政略結婚

さていよいよ戰國に入る。

戰國に入つて先づ眼につくのは戰國策と婦人との關係である。大名と大名とが合縱し、連衡するために行ふ政略結婚が盛んになつて來たことである。

南北朝以來、十分に男子の絶對的服従者たる訓練を受けて來た婦人は、戰國に入つて餘す所なく其個人としての權利を奪ひ去られてしまつたのである。

同盟の實  
か人質か

戰國時代の政略結婚は、大名と大名とが同盟の實を擧げたといふ徴であつたけれども、一面には弱い方の大名が、強い方の大名に其子女を人質として送つたことを意味するものであつた。然らば同盟といふ意味が重かつたか、又、人質といふ意味が重かつたかといふに、無論人質といふ意味の方が重かつたのである。

敵方に嫁せられた大名の女は、錦の褥といひたいが荆棘の床に横へられたも同じこ

錦の褥  
棘の床

とで、何時其かほそい首が飛ぶことやら、鴛鴦の契りこまやかにといひ度いが、却々爾ういふ譯には行かなかつたのである。

それも其筈である。現在我子を敵方に渡して置きながら、家國の爲といへば眼を閉ぢて、刃を向ける氣強い親も多かつた世の中である。まして、敵方の女たる自分の妻俣の嫁を殺す位は、大根を切るよりも易い事であつたに相違ない。

廣忠と織  
田、今川  
兩家

織田信秀が計略を以て徳川廣忠が人質として今川氏の許にさし出さうとした一子家康を尾張に奪ひ去つた時、使を岡崎の城に派して、廣忠に告げ、速に今川氏との盟約を捨て、當方と握手せらる可し、然らざれば御子息家康殿のためにあしかりなんと云はせた。廣忠は此使者に接して大に驚いたが、意を決して、殺さば、殺せ、一子の故を以て信を隣國に失ふ可からず。といふ意味の返答をした。

殺さば殺

家康は廣忠にとつて大切な伴である。其家康が白刃を喉に擬せられて居る場合でも、家國の爲といへば、殺さば殺せといふやうな返答をしたのである。これが戰國武士の信條であつた。大切な大切な長男でさへこれである。女などは何人取られて